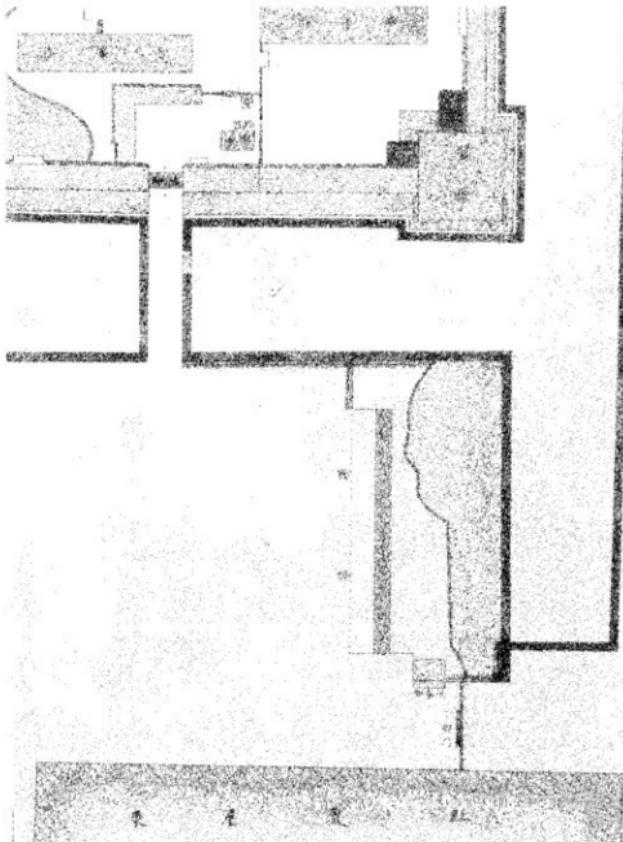


雨水管渠整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

高松城跡 (大手前地区城内中学校跡地)



2012年3月

高松市上下水道局
高松市教育委員会

例　言

- 1 本書は、高松市玉藻町5 番17 号地内に所在する高松城跡（大手前地区域内中学校跡地）における埋蔵文化財発掘調査報告及び試掘調査結果報告を収録した。
- 2 発掘調査及び整理作業については高松市教育委員会が実施した。
- 3 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関の助言と協力を得た。記して謝意としたい。
香川県教育委員会、香川県立ミュージアム（顛不同、敬称略）
- 4 高松城跡（大手前地区域内中学校）の調査は、小川賛（文化財課文化財専門員）、中村茂央（当時、文化財課非常勤嘱託）が担当し、大嶋和則（文化財課文化財専門員）、渡邊誠（文化財課文化財専門員）、高上拓（文化財課文化財専門員）、中西克也（文化財課非常勤嘱託）の補佐を得た。
- 5 以下の業務については、委託した。
基準点打設業務：四国測器販売株式会社
遺物保存処理：第一合成株式会社
遺物写真撮影：杉本和樹（西大寺フォト）
- 6 本書の執筆・編集は、小川が行った。
- 7 本文の挿図として、高松市都市計画図2千5百分の1「高松市街北部」を一部改変して使用した。
- 8 発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 9 本報告書の高度値は海拔高を表し、方位は座標北（日本側地系）を表す。
- 10 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SB: 据立柱建物　　SD: 構造遺構　　SF: 道路、石列　　SK: 土坑
SP: 柱穴　　SU: 地下遺構　　SX: 性格不明遺構
- 11 土壤及び土器観察の色調表現は、新版 標準土色帖農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修）に掲げる。
- 12 本書に掲載した絵地図の所蔵については、以下のとおりである。
『高松平家資料 旧高松御城全図』（表紙）・『高松平家資料 高松城下圖屏風』・『香川県立図書館旧蔵資料 高松城町屋敷割図』：香川県立ミュージアム
『生駒家時代鐵岐高松城屋敷割図』・『享保年間高松城下図』・『高松街全図』・『高松旧城内平面図』・『高松市新地図』・『高松市街図』：高松市歴史資料館
- 13 本書で用いた陶磁器・土器類の分類及び編年は、概ね以下の論考に拠る。
・乗岡2002:「近世備前焼鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡 表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査』
・藤澤1998:『瀬戸市史 陶磁史編4、6』
・大橋2000:「九州陶磁の編年」『九州近世陶磁学会10周年記念』
・松本2002、佐藤2003:「高松城編年」・『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）II・第5冊 高松城跡（西の丸町地X）III』

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	
第1節 調査範囲および調査方法	4
第2節 主要遺構と基本層序	4
第3節 調査地北部の遺構・遺物	9
第4章 総括	
第1節 遺構変遷	54
第2節 史料との整合性	56
第3節 歴史的評価と課題	58

挿図目次

第1図 調査地位置図 (1/5,000)	
第2図 高松市および市域における位置図	
第3図 高松城跡周辺発掘調査地位置図	
第4図 第1遺構面平面図 (1/100)	
第5図 第2遺構面平面図 (1/100)	
第6図 第3遺構面平面図 (1/100)	
第7図 調査地盤面土層図 (1/100)	
第8図 中堀石垣検出状況平・立面図 (1/50)	
第9図 中堀埋土出土遺物 1	
第10図 中堀埋土出土遺物 2	
第11図 SF102平面・土層図 (1/40)	
第12図 SF103土層断面図 (1/40), SF103裏込層出土遺物	
第13図 SF104平・立面図 (1/40), SF104出土遺物	
第14図 SX101平面・土層図 (1/50), SX101上層出土遺物 1	
第15図 SX101上層出土遺物 2	
第16図 SX101下層出土遺物 1	
第17図 SX101下層出土遺物 2	
第18図 SB301平・断面図 (1/40)	
第19図 柱穴, SD302出土遺物, SD301・302・303・374-375, SK371, SX384平・断面図 (1/40)	
第20図 埋納遺構平・断面図 (1/20), 集石遺構, SX380・381・382, SK310平・断面図 (1/40), 埋納遺構集石遺構SX380・381・382, SK310出土遺物	
第21図 SX364, SK365平・断面図 (1/40), SX364, SK365出土遺物	
第22図 SK204・214平・断面図 (1/40), SK204・214出土遺物	
第23図 SD201, SK205・203・201・202平・断面図 (1/40), SD201・205・203出土遺物	
第24図 SB101基礎部, SK206 ~ 212上部・下部平面・土層図 (1/50)	
第25図 SK210-211出土遺物	
第26図 SB101, SF101平面・土層図 (1/50)	
第27図 SB101, SF101出土遺物	
第28図 SU101平・立面図 (1/40)	
第29図 SU101出土遺物 1	
第30図 SU101出土遺物 2	
第31図 SK102・105・103・104・107平・断面図 (1/40), SK105・107出土遺物	
第32図 SK108平・断面図 (1/40), SK108出土遺物	
第33図 第1遺構面検出時出土遺物	
第54図 H層出土遺物	
第35図 G層出土遺物出土状況 (1/20)	
第36図 G層出土遺物 1	
第37図 G層出土遺物 2	
第38図 G層出土遺物 3	
第39図 G層出土遺物 4	
第40図 G層出土遺物 5	
第41図 F層出土遺物	
第42図 E層遺物出土状況	
第43図 E層出土遺物 1	
第44図 E層出土遺物 2	
第45図 遺構変遷図	
第46図 各期における絵地図	
第47図 整備基本計画と中堀石垣	

写真図版目次

図版 1 - 1	中堀検出状況（東方向から）	図版 10 - 1	E層出土遺物
2	中堀南西隅石垣検出状況（東方向から）	2	SK365出土遺物
図版 2 - 1	中堀検出状況（東方向から）	3	SF104出土遺物
2	中堀検出状況（北方向から）	図版 11 - 1	SF101検出時出土遺物
3	中堀南西隅石垣検出状況（北方向から）	2	SB101壁石1・6検出時出土遺物
図版 3 - 1	中堀検出状況（南方向から）	3	壁石2据付坑出土遺物
2	第1遺構面調査区北部（東方向から）	4	SX101出土遺物
3	中堀南西隅石垣検出状況（東方向から）	5	E層出土遺物
4	第1遺構面調査区南部（西方向から）	6	E層出土埋納遺物
図版 4 - 1	SB101検出状況（東方向から）	図版 12 - 1	G・F層出土遺物
2	SB101礫石1柱材痕（北方向から）	2	G層出土遺物
3	SK208検出状況（東方向から）	図版 13 - 1	H層出土遺物
4	SF101柱座ハツリ痕（西方向から）	2	SX101出土遺物 理兵衛焼
図版 5 - 1	第3遺構面（東方向から）	3	G層出土遺物
2	第3遺構面遺構検出状況（西方向から）	4	中堀およびSX101出土遺物
3	集石遺構（南方向から）	図版 14 - 1	G層出土瓦
4	SD302（北方向から）	2	調査地南部第1遺構面出土瓦
5	SX381（東方向から）	図版 15 - 1	SU101出土瓦
6	SX381（北方向から）	2	中堀、SX101出土瓦
7	SP3105（西方向から）	図版 16 - 1	SK214出土瓦
8	SB301P - 4	2	第3遺構面出土瓦
図版 6 - 1	E層出土土地鎮遺物（北方向から）	3	E層出土瓦
2	SB101礫石2・6根石検出状況（北方向から）	4	SU101出土 金属製品
3	SB101礫石2根石検出状況（北方向から）	図版 17 - 1	G層出土 刀装具
4	SB101礫石1根石検出状況（南方向から）	2	G層出土 煙管
5	SB101礫石4根石検出状況（北方向から）	3	G層出土 鉄釘
6	SK210-212（南方向から）	4	H層および第3遺構面出土 金属製品
7	SK209（南方向から）	5	F層出土 鉄釘
8	SK 207（南方向から）	6	E層出土 金属製品
図版 7 - 1	SK201-202およびSD201（西方向から）	図版 18 - 1	第1遺構面出土 鉄釘
2	第3遺構面理納遺構（西方向から）	2	SX101出土 陶製灰・蓋
3	G層出土 青銅製鐸	3	出土石製品および土製品
4	G層遺物出土状況（240）	4	G層出土 脚付火鉢
5	G層遺物出土状況（230）	図版 19	出土錢貨
6	G層遺物出土状況（北方向から）	図版 20 - 1	SD201, SK203 ~ 205, SK214出土遺物
7	調査地南部土層（東部、北方向から）	2	SX101出土 刻青土器
8	調査地南部土層（中央部、北方向から）	3	G層出土遺物
図版 8 - 1	SF101（北西方向から）	図版 21 - 1	E層およびF層出土遺物
2	SB101出入口部（北方向から）	2	G層出土遺物
3	SU101（南方向から）	図版 22 - 1	SK203出土遺物
4	SU101床組み検出状況（南方向から）	2	出土遺物 壺
5	SK310（北方向から）	3	出土遺物 灰炉
6	SF103, SX101（東方向から）	4	SX101出土 鮎瓦
7	堀石垣築状ノミ痕	5	出土土師質製品
8	中堀埋め戻し状況（東方向から）	6	埋納遺構出土遺物
図版 9 - 1	G層出土遺物	図版 23 - 1	SK310出土 骨
2	第3遺構面出土遺物	2	SX101出土 ガラス皿
3	SK108出土遺物	3	SX101出土 陶製ボタン
		4	出土ガラス瓶

第1章 調査の経緯と経過

平成20年度、高松市都市整備部下水道建設課（以下、下水道建設課）より高松市立城内中学校跡地（高松市玉藻町5番17号）地内に予定する公共下水道管理設用立坑築造工事および既設下水道暫迂回路設置工事について、高松市教育委員会教育部文化財課（以下、文化財課）に照会があり、史跡高松城跡に隣接していることから事前に確認調査を実施することで合意した。

確認調査の結果、石列および集石などの遺構を検出し、陶磁器などの出土品が認められた。加えて、当地点は高松城に関する絵地図において三ノ丸御門、番所と記された箇所に相当し、城の構成を端的に示す地点であり、事前の保護措置が必要な埋蔵文化財埋蔵地であると判断した。

こうしたことから当該工事に先立ち、平成21年3月9日付けで「埋蔵文化財発掘の通知」（文化財保護法第94条第1項）を高松市長より香川県教育委員会（以下、県教委）に提出し、同月19日に県教委から事前の発掘調査を実施する旨の通知があった。

以上の経緯のもと、平成21年度から雨水管渠整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成23年4月9日付けで「埋蔵文化財発掘調査について」（文化財保護法第99条第1項）を提出し、同日、高松市教育委員会直営事業として発掘調査に着手した。

現地発掘調査の進捗に伴い、調査地の北端において往時の高松城中堀に相当する石垣が存在することを確

認した。この石垣は昭和59年に史跡の追加指定を受けた東ノ丸石垣の延長部分に相当し、今後の史跡高松城跡保存整備においても重要な価値をもつことから現状保存することが望ましいとして下水道建設課と協議を行なった。石垣を撤去しなければ工事の施行は困難な状況であったが、工法を検討した結果、立坑の寸法縮小と既設下水道幹線を利用し、仮設水路設置を不要とする計画変更を採用し、石垣の現状保存を図ることができた。

この計画変更により立坑位置など工事範囲が南西にやや広がることから、この計画範囲を調査対象に含めるとともに、中堀の範囲について明確な資料を得る必要性から調査地を北へ拡張し調査を継続した。その後、7月4日に中堀石垣を一般公開する現地説明会を開催し、同月13には石垣の埋め戻しを終えて、現地調査を完了した。

整理作業については、平成21年度の現地調査終了後から平成23年度まで高松市教育委員会直営事業として実施したが、出土した金属製品の保存処理については第一合成株式会社、遺物の写真撮影については西大寺フォトの委託業務として完了した。



第1図 調査位置図 (1/5,000)

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境（第2図参照）

瀬戸内海に北面した香川県中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及ぶ。またこの平野は、讃岐山脈から北流し瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。高松城の城下町として発展した高松市街地は、香東川の東流路が瀬戸内海に注ぐ河口の中洲や砂堆上に立地する。香東川は現在、石清尾山塊の西を直線に北流する西流路のみだが、17世紀初頭、高松藩に招かれた西島八兵衛の河川改修によって一本化されたものであるが、この廢川直前の流路は、現在、御坊川としてその名残をとどめる。

第2節 歴史的環境（第3図参照）

高松市街地はじめて人的活動が認められるのは、松平大膳家上屋敷跡における発掘調査地点で、弥生時代後期の土器を伴う柱穴が多数検出されたほか、平安時代前期の溝が確認されている。この後、平安時代後期には、この地域は庵原郷と呼ばれる安楽寺院領である野原庄が高松城跡の南方に比定されている。野原庄については白河院の勅使印が応惠年間頃（11世紀末葉）に立券莊号されたもので、康治2年（1143）8月19日の太政官符では野原庄の西至が条里により表記されており、条里地割および条里呼称がこの地に普及していたことが分かる。中世に入ると莊園以外にも、文安2年（1445）の「兵庫北関入船納帳」に船籍地としてあり、港湾施設の存在がうかがわれる。高松城跡西の丸地区の発掘調査では、11世紀後半から13世紀前半の港湾施設に加えて搬入土器が高い比率で認められ、東浜に相当する東町奉行所跡の調査でも、同時期となる舟人状の流路を確認し、高比率の搬入土器が認められる。また浜ノ町遺跡では、白磁四耳壺の埋納遺構や区画溝をもつ13世紀末から15世紀末の集落跡が確認された。中世末期の状況を端的に示す事例に、寿町一丁目地区の発掘で出土した「野原演村无量壽院」の刻書瓦が挙げられる。県内有数の古刹、無量壽院は天文年間に野原郷八輪島に移転し、高松城築城に際して更なる移転を余儀なくされたことがその寺記にみられ、発掘成果と一致する。のことから、中世末期には寺院を有する経済的基盤をもつ港町であったと考えられ、砂堆や中洲上に中世都市が立地する状況は、博多や草戸千軒遺跡にもあるように全国的な傾向に合致する。こうした背景のもと、当地に高松城が築かれ城下町が整備されたと理解される。

高松城および城下町を造ったのが、豊臣秀吉の家臣、



第2図 高松市および市域における位置図

生駒親正である。秀吉の四国征伐により、天正13年（1585）長宗我部元親が降伏、讃岐国は仙石秀久・十河存保に与えられ、その後尾藤知宣の領国となったが、天正15年（1587）には生駒親正が入封し讃岐17万石を領し、翌天正16年から数ヵ年を要し高松城を完成させた。北の守りは瀬戸内海に委ね、堀には海水を導く水城とされ、南方は大手（旧太鼓門）を構え、南側に城下町が展開する「後堅固」の城でもある。城の構造は、内堀・中堀・外堀となる三重の堀をめぐらし、内堀より内側に本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配する。本丸は更に堀により他の曲輪と独立し、本丸と二ノ丸をつなぐ鞘橋を落とすことで敵の侵入を防ぐ構造で、本丸には天守と地久櫓を備える。

寛永17年（1640）御家騒動により生駒氏は転封、代わって寛永19年には松平頼重が城主となり東讃岐12万石を領した。頼重は城の改修を度々行い、寛文11年（1671）頃には東ノ丸を新造した他、月見櫓・続櫓・渡櫓などを造り、北に設けた水手御門より直接海へ出入りができるようとした。以後、松平氏は高松城主として明治維新を迎える。高松城は昭和29年（1954）に松平氏より高松市に譲渡され、翌年玉藻公園として市民に開放されるとともに、史跡として国指定され文化財の保護が叫ばれている。

高松城に関する発掘調査は、今まで多数の事例をもつ。本丸では天守台と地久櫓台の石垣解体時に、地



第3図 宍道城跡周辺発掘調査地位図

1. 東ノ丸跡 (県民ホール地区)
2. 水手御門
3. 県民小ホール地区
4. 香川県歴史博物館地区
5. 西の丸町地区Ⅱ
6. 西の丸町地区Ⅲ
7. 作事丸
8. 西内町
9. 地久松
10. 高松北警察署地区
11. 内町
12. 三の丸
13. 西の丸町地区I
14. 地久横台
15. 丸の内地区
16. 松平大膳家中屋敷跡
17. 松平大膳家上屋敷跡
18. 三の丸、竈櫓台北側
19. 西の丸町D地区
20. 丸の内
21. 寿町一丁目 (無蓋浴院)
22. 中堀、北浜町
23. 丸の内、都市計画道路高松海岸線街路事業
24. 丸の内、再生成水井布設工事
25. 丸の内、個人住宅建設
26. 二の丸、丘澤公園西門料金所整備工事
27. 外堀、西内町、共同住宅建設
28. 丸の内、共同住宅建設
29. 東町奉行所跡
30. 西の丸町
31. 丸の内
32. 片原町遺跡
33. 鉄門
34. 圓跡
35. 外堀、兵庫町
36. 芦町二丁目地区
37. 天守台
38. 江戸長屋 I
39. 江戸長屋 II
40. 丸の内
41. 浜ノ町遺跡
42. 鶴町一丁目遺跡
43. 生駒義正夫妻墓所
44. 二番丁小学校遺跡
45. 亀井戸跡
46. 大井戸
47. 錦賀城跡
48. 本町地区
49. 絹屋町遺跡
50. 大手前地区域内中学校跡地

下室をもつことが判明した。何れも壁面は石積みにより構築された地下1階相当のもので、天守台には西面に出入り口を備えるが、地久横台ではなく建物内に付随していたものと考えられる。二ノ丸入り口にあたる鉄門の袖石垣解体時には、半地下式で小形の穴蔵が確認され、凝灰岩製の切石による床・壁面構造をもつことが判明している。また東の丸での香川県歴史博物館（現、香川県立ミュージアム）建設に伴う調査では、東ノ丸新造に際し開削された中堀が検出されている。以上のような中堀の内側、内曲輪において確認された遺構は、何れも松平初期に行われた改修に相当するものと考えられている。一方、武家地となる外曲輪についても、近年、調査事例が増加した。広範に調査が行われた西の丸町地区では、生駒期の重臣、上坂勘解由や松平期に大老職を占めた大久保家に由来する木簡や家紋瓦が出土したほか、絵地図と合致する鍵型の街路

を検出するなど、各期における屋敷割の状況が明らかとなった。旧大手前にあたる丸の内地区では、藩主連枝である松平大膳家の家紋をもつ理兵衛焼、瓦が出土し、検出された街路及び門跡が絵地図と合致し、その屋敷であることが判明している。外堀大手に面した内町の鍵跡では、弘化年間の絵地図にその跡が記載された生駒時代末期の大形となる井戸状遺構が検出され、その石積みから生駒家家紋が刻まれた石材が見つかっている。この他、外堀の東口付近となる鶴屋町では、松平末期の絵地図に記された東町奉行所に相当する地点で、その跡とみられる遺構が確認されている。このように外曲輪では松平期の絵地図、文献資料と発掘成果が対応する事例が数多くみられ、概ね屋敷割の変遷を辿ることができる。

第3章 調査の成果

第1節 調査範囲および調査方法

城内中学校跡地内で調査対象としたのは、当初の工事計画において既設下水道幹線以南の立坑設置箇所ならびに、その北側を迂回する仮設下水路線の工事予定期所であるが、東西方向に埋設された既設下水道幹線により調査地は南北に分割される。既述のとおり高松城中堀跡の確認のため、北部については北西方に調査範囲を広げ、第2遺構面において中堀石垣を検出し中堀の構造を確定した。現状保存が決定したことから、この構造の確認をもって調査地北部についての調査を完了した。一方、調査地南部については立坑の設置位置および寸法の変更により、工事範囲が当初よりやや南北に広がることになったため、これに対応する範囲で第1～3遺構面まで調査を実施した。

調査方法は、重機および人力を併用し遺構面までの掘削・精査を行なった。遺構面設定後、遺構剥離剥削を人力により実施し、写真撮影ならびに測量・図化作業を併行して行った。なお測量の基準点については、委託業務により4級基準点及び水準点を設置し、これをもとに遺構図、土層図等の作成を1/20縮尺で行った。

第2節 主要遺構と基本層序（第4～7図参照）

第1遺構面では、試掘調査で確認した遺構群の検出を目的とし、調査地南部で礎石建物SB101、これに付随する低基壇の縁石SF101および地下遺構SU101、廐棄土坑SK108を、北部では道路側溝SF103、これと接する石疊の路SF102ならびに建物跡と考えられる石組の基礎SF104を確認した。道路側溝SF103は、調査地南部において東西方向に確認したコンクリート製路肩SF105と対となり城内中学校以前に存在した旧道路跡を示す。いずれも戦災あるいは戦後において廃絶する遺構であることを確認した。

上述のとおり調査地北部については、第1遺構面の下位で高松城中堀石垣を確認し、隅部の検出までに留めた。中堀南面石垣の上部に構築されているSF103がコンクリートに固められており、撤去には石垣破損の懸念があったため、これを残した状態で検出している。埋没時期は上位面および出土遺物から、19世紀末頃が考えられる。南部については、17世紀後半の遺物を包含する整地層（G層）の上・下面において、第2遺構面の確認を行なった。SB101の下層遺構に相当し、礎石据付坑および根石であるSK206～212はか土坑、溝状遺構など、SD202を除きG層上面で確認している。いずれの遺構も出土遺物に乏しいが、所属時期についてはG層および上位遺構面との関係から、17世紀後半から19世紀代と考えられる。

南部のみで確認した第3遺構面については、東部で焼土を伴い広範囲に広がるSX364、集石および埋納遺構に加え、SD301・302およびSX380～382に区画されるように柱穴群を検出し、SB301として復元した。SD302以西では廐棄土坑SK310を認めるが、遺構は希薄となる。出土遺物から17世紀初頭の遺構面となっている。

以下、調査地焼土面で観察された土層を特徴および遺構面との関係からA～I層に分類し基本層序とする。A層：花崗土を基本とする城内中学校校庭の造成土。調査地南東部では、学校砂場およびその排水層である玉砂利層が、第1遺構面検出の旧道路跡コンクリート製路肩、基壇縁石SF101を壊す。

B1層：調査地北部、A層下で認められる砂礫を基調とした層。戦災痕を含まず、既設の下水道幹線ならびに路面整備に関する整地層と考えられる。

B2層：B1層の下位で、若干の戦災痕ならびにコンクリート片を含む層。SF102、SF103、SF104の覆土。

C1層：主に調査地南部で認められる焼土ならびに被熱遺物を伴う整地層。戦災処理と考えられるSX101およびSU101焼土についてもこれに該当する。

C2層：調査地南部で認められる被熱赤化層ならびに炭化層。戦災層と考えられ、主にSB101、SF101の検出時に確認した。

D層：調査地北部、B層あるいはC1層の下位で認められる入念に整地された層。SF102の基盤層となる中堀の最終理土やSF103裏込めならびにその路肩の整地が該当する。

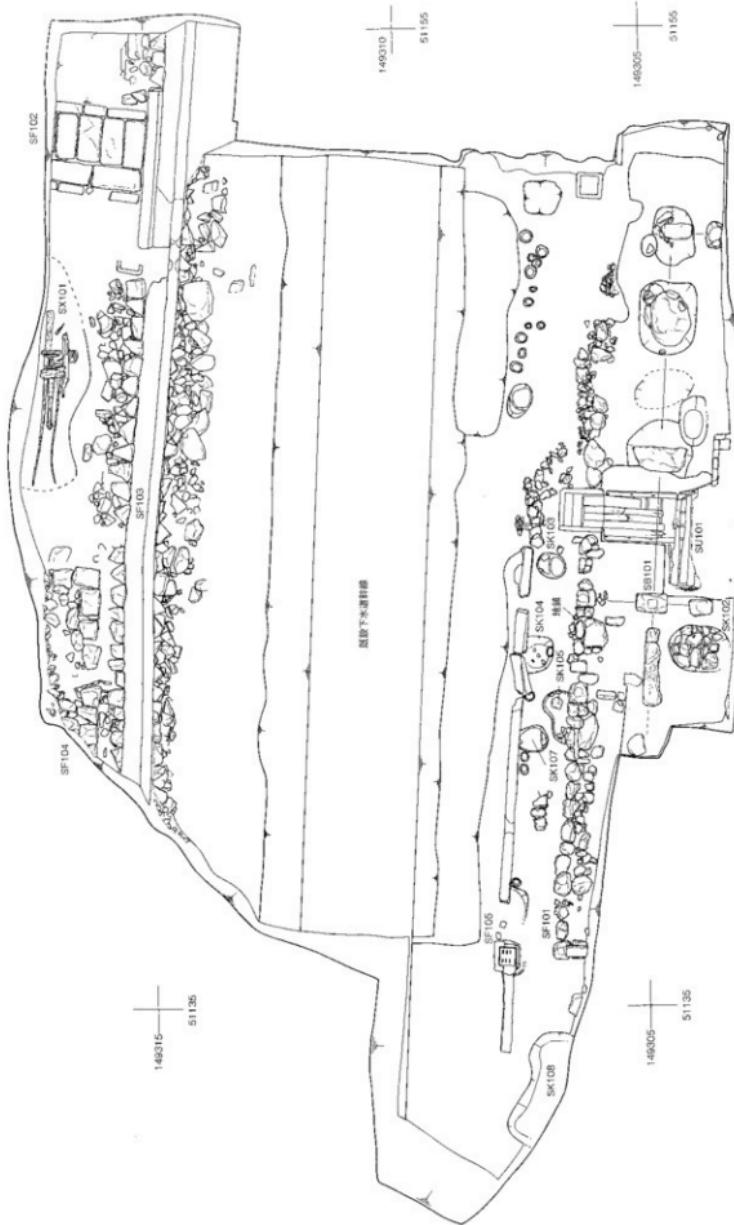
E層（整地1）：調査地南部で認められるSB101、SF101、SU101の基盤層で、黄色粘土（土壁）塊、漆喰、砂礫を含む。出土遺物から19世紀後半と考えられる。

F層（整地2）：SB101付近のみで認められる整地層。オリーブ黄色砂礫を基調に粘土塊を含む層で、SB101下層遺構であるSK206～212を被覆する。

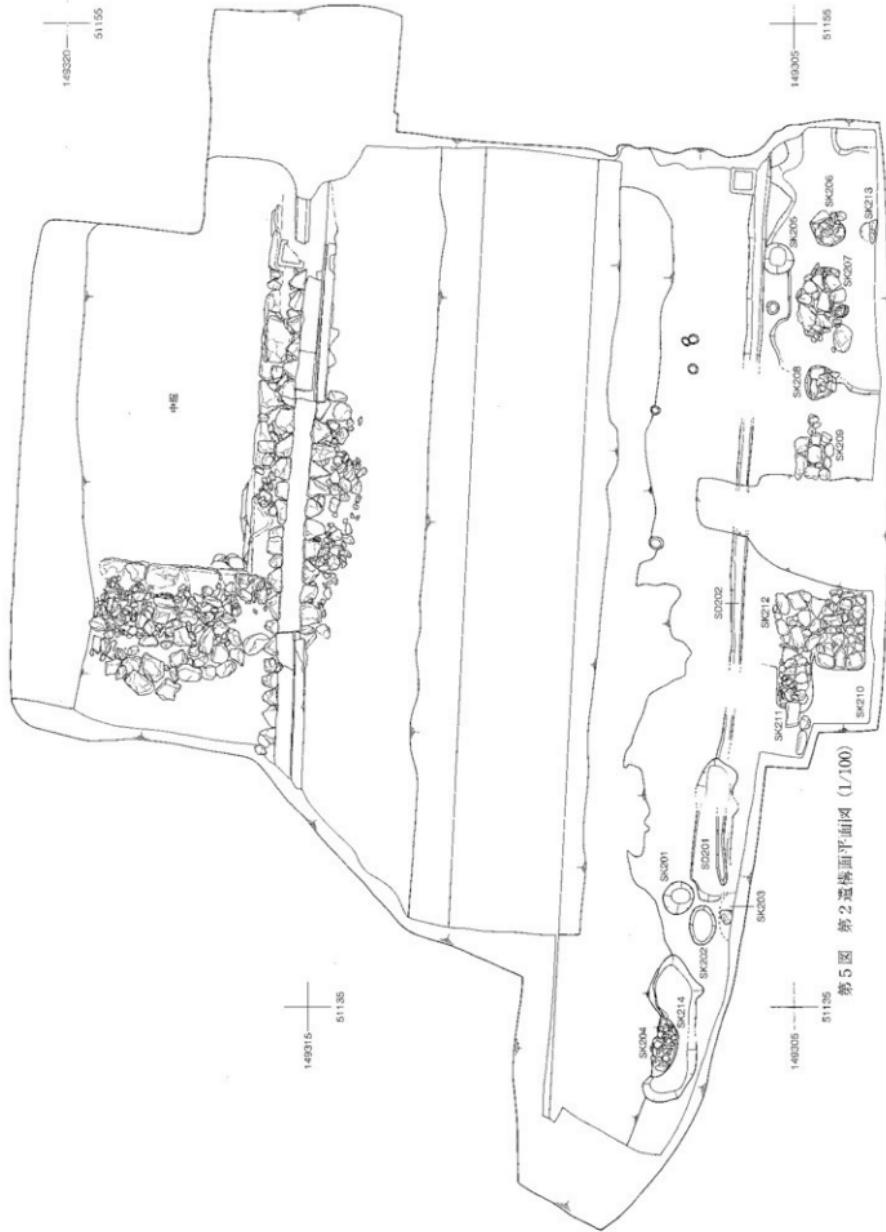
G層（整地3）：調査地南部で認められる締まった粘質土と砂質土との互層を基調とする整地層で、地鎮とみられる散銭や陶器器ほか17世紀後半の遺物を一定量包含する。この上面と下面で第2遺構面を検出した。

H層（整地4）：調査地南部において認められるG層下位に堆積する砂質土層で、炭化物を含む整地層。16世紀末～17世紀初頭を中心とする遺物を包含する。この下面で第3遺構面を検出した。

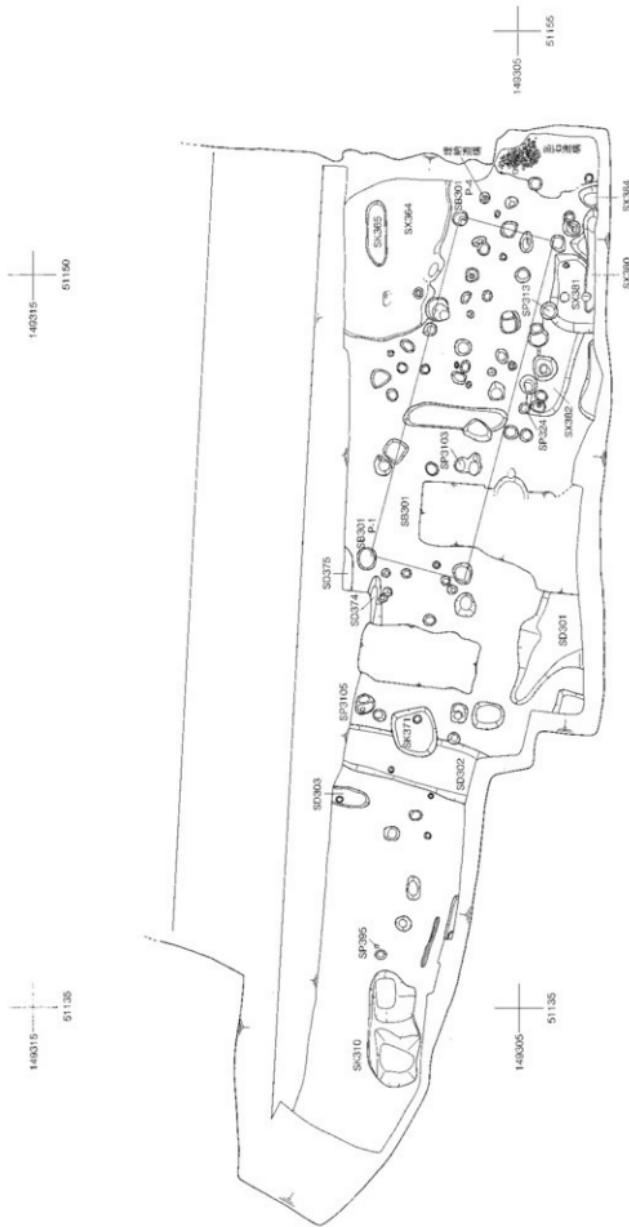
I層：調査地南部において認められる第3遺構面の基盤層となる砂質土層。湧水を含み、無遺物層であることから、当調査における地山層とした。



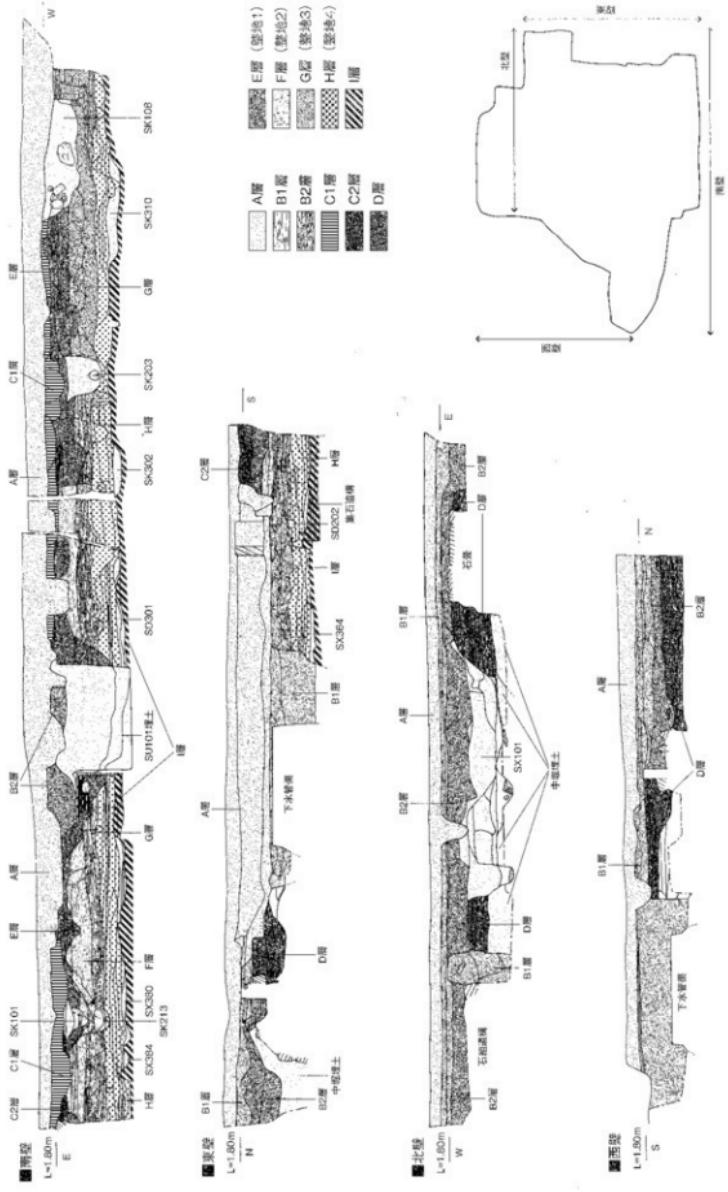
第4图 第1层横面平面图 (1/100)



第5图 第2道房面下地面 (1/100)



第6図 第3遮擋面平面圖 (1/100)



第7図 調査地壁面1層図 (1/100)

第3節 調査地北部の遺構・遺物

中堀跡（第8～10図）

SX101調査時にSF103下部において、北に面を描えた花崗岩の巨石が東西方向に並ぶことを確認し、縦地図や県立ミュージアム建設に伴う調査で検出された石垣との位置関係から、松平時代初期に開削された中堀の南端東部に相当する可能性が高いと判断した。このため、既述のとおり中堀南東隅の確認を目的とし、調査範囲を北西に広げ石垣の検出を行なった。この結果、東西方向に延びる石垣はSF104の下部において北方向に直角に折れて入隅となることから、中堀の南東隅であることが明らかとなった。

石垣の確認範囲は、SF102以西でSF104を撤去した後、中堀南面および西面が明確となる上方から2段目の上端部付近まで、隅部については更に埋土を掘り下げ2段目下端付近まで行なった。この際の検出長は南北方向に3m、東西方向に7.5mで、主軸方位はN95°Eを測る。また東西方向の石垣については、第1遺構面調査時にSF102下部を抜けて遺存していることが確認でき、更に以東に延びることが判明している。調査終了後においては、石垣上面ならびに側面を土壌により養生し埋め戻しを行なった。

石垣の築石には花崗岩の割石あるいは自然石が用いられ、高さ0.5m、幅1m前後の大きさのものが比較的横目地が通るよう積まれている。上段ものには縦状のノミ痕をもつものが多く、化粧仕上げを行なったものと考えられる。隅部については、上段で南面が先行し下段では西面が先行するように積まれており、西面の下段については縦石使いとなっている。石垣の高さならびに中堀の深さに関しては未調査ではあるが、石垣の天端は現況で標高1mを測り、中堀が延長する県立ミュージアム建設時に確認されている石垣が標高-1.5m付近まで構築されていることから、2.5m程度の規模が推定される。石垣の勾配については、検出した範囲の計測で西面が約78°、南面は83°を測る。

間結石については、花崗岩および安山岩が用いられている。また西面の石垣背面においては、裏込と考えられる安山岩および花崗岩、閃緑岩が上面において検出している。裏込石については後述するSF104などに由来する石材と明確に区別できないが、西面上端より1.5m付近で大きさならびに石材質が分かれることから、安山岩の礫群となる背面側1.5m付近までが裏込層である可能性が高いと考えられる。南面の裏込層についてはSF103によって大きく壊され、この構築時に上段の石垣が大きく損なわれたと考えられる。

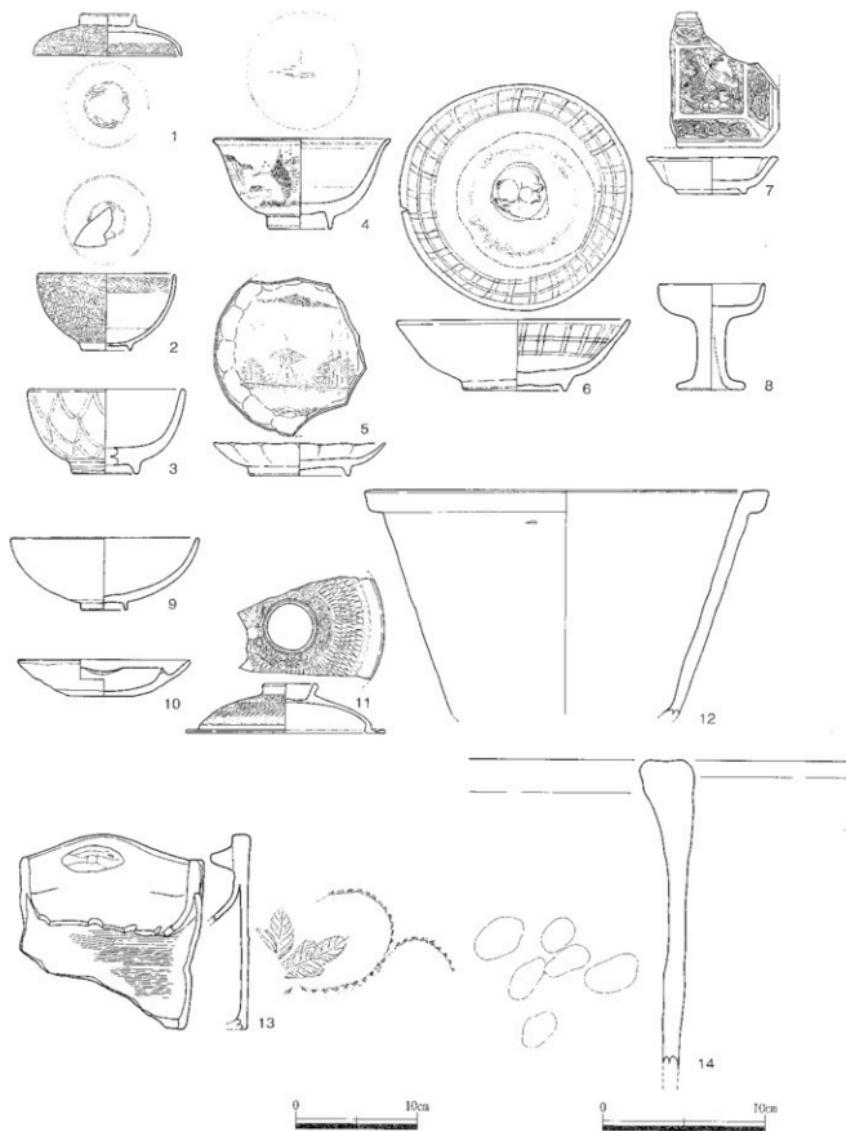
中堀の埋没状況については、石垣の天端付近以高についてはD層とした互層状の入念な整地層が認められ、SF102等の構築基盤となっている。この下位で上

段の然石下端付近までは地山層と酷似した砂層により充填されているが、これ以下では、腐敗した木質遺物など有機物を多量に含む泥炭化した堆積によって埋没している。この泥炭層には多量の遺物が包含されていたが、建材ほか木質遺物に関しては今回取り上げず、時期を判断できるよう陶磁器などコンテナ3箱分について取り上げを行なった。取り上げた遺物については、肥前系磁器碗・壺・皿・瓶・段重、瀬戸・美濃系磁器碗・皿・仏龕具・植木鉢、白磁小坪、京・信楽系陶器碗・灯明皿・壺、備前系陶器鋸鉢・植木鉢、施釉陶器蓋・鍋・皿・灯火具・瓶、土師質器大壺・焜炉・大鉢、瓦質器罐、軒丸・平瓦などが認められ、これらの出土遺物から19世紀後半頃に堀の大半が埋没し、機能を失っていたことが考えられる。

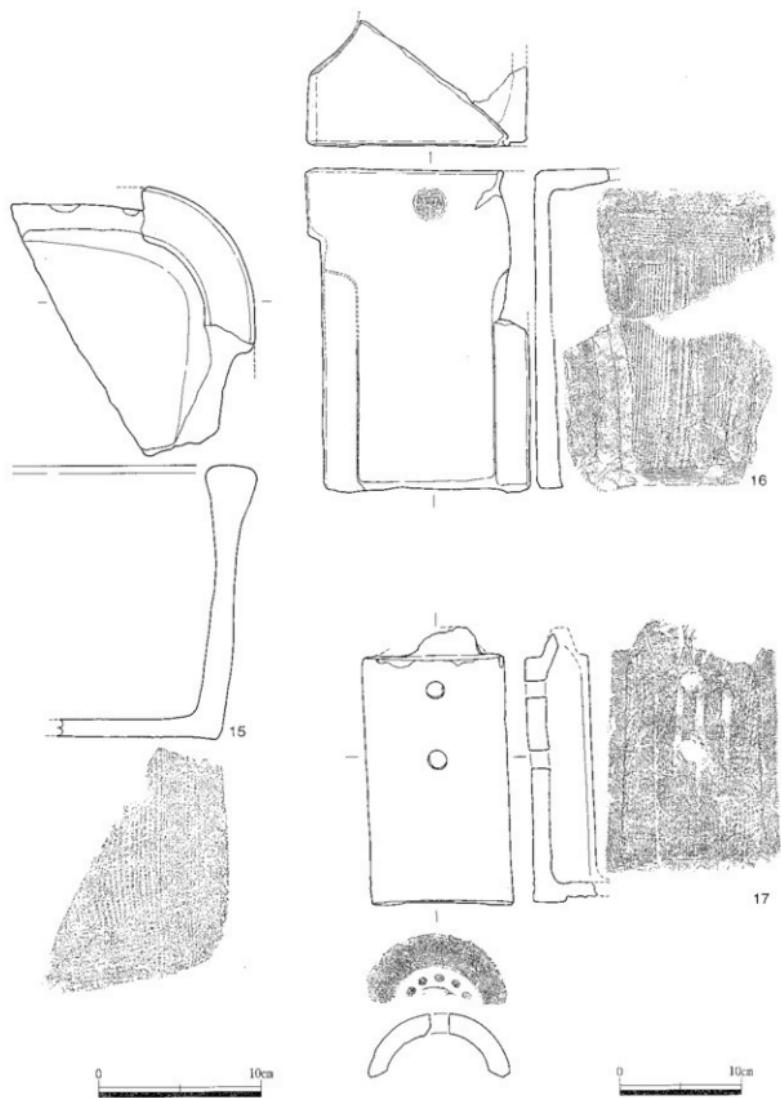
1～17は、中堀埋土の泥炭層から出土した遺物である。1・2は肥前系磁器で、染付碗および碗蓋のセット。ともに微塵唐草、四方桙、環状松竹梅の染付文様をもち、大崎V期に相当する。いずれも内面に被熱痕が認められる。3は肥前系磁器で、二重網目文の染付碗。くらんわんか手で、中野V-4期に相当する。4は瀬戸・美濃系磁器で、染付の端反碗。5は肥前系磁器で、染付皿。口銘を施す型打の一枚絞目で、大崎V期に相当する。6は肥前系磁器で、内面に二重の格子文、見込みにはワンポイントの草花文が染付られた皿。低い蛇ノ目凹形高台をもち、見込みに蛇ノ目釉制ぎとアルミナ塗布が認められるくらんわんか手で、中野V-2～4期に相当する。被熱により器形の歪が著しい。7は瀬戸・美濃系磁器で、染付皿。方形の高台および陽刻文をもつ、責型成形による型打皿である。8は瀬戸・美濃系磁器で、仏龕器。内面は透明色、外側は瑠璃色の釉が施され、高台底は無釉で回転ヘラケゼリにより平坦に仕上られる。9は京・信楽系陶器の平碗。10は京・信楽系陶器の灯明皿で、受け部の注口は輻広で1箇所となる。11は施釉陶器の蓋で、外面にイッチン文様およびトピカナ、鉄泥の塗布が施されている。12は備前系陶器で、(植木)鉢。13は土師質製の焜炉で、受け部が一体化した二重構造をもつ外型成形のものである。受け部はナデ仕上げに接合痕を残す。焜炉本体には内面にのみ粗いハケ、ナデ調整が認められる。胎土には金雲母および褐色粒が認められる。14は土師質製の井側。15は土師質製の鉢で、方形を呈する大型品と推定される。胎土に金雲母を含む。16は瓦質製の竈で、側面に「丸に京」の印刻をもつ。外側は上・側面で丁寧なミガキ調整が施されるが、正・背側はハケ調整となる。内面はハケとナデ調整が施される。底面は未調整である。17は2箇所の釘穴をもつ巴文軒丸瓦で、凹面にコビキおよび内タキ痕を残す。



第8图 中城石沟情况平、立面图 (1/50)



第9図 中堀埋土出土遺物 1



第10図 中堀郷出土遺物 2

SF102 (第11図)

切石により舗装された南北方向の道。検出高は標高1.7～1.75m、検出長1.85mである。主軸方位はN-7°・E、道幅は1.9mを測る。舗装には長さ0.9m、幅0.45m前後の扁平な花崗岩切石を用い、2つの小口側で長手側に揃うパターンをしている。両縁石には不揃いな細長のものが用いられている。既述のように堀埋没後、入念に整地された上部に構築され、幹線道の路肩SF103から発し南北方向へ延びる。周辺に存在した施設に伴う岡路と推定されるが、詳細は不明である。出土遺物はないが、層序から19世紀後半以降で20世紀中葉頃を中心とした時期が考えられる。

SF103 (第12図)

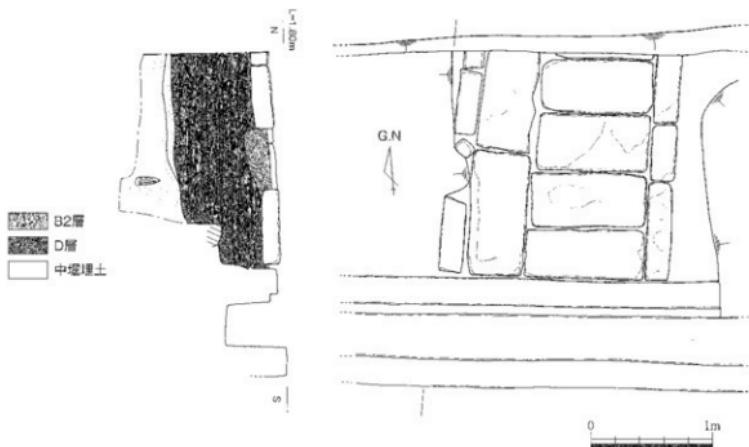
東西方向に走る幹線道の路肩および側溝。検出高は標高1.65～1.75m、検出長1.55mを測る。主軸はN-92°・E およびN-95°・E を測り、調査地中央部付近でやや南北方向へ屈曲する。下部に石組溝が存在し、これをコンクリートで覆い側壁および溝底が構築されている。側壁は厚さ0.2m、高さは0.4m～0.5mでやや道路側が高くなる。側溝幅は内法で0.3mを測る。側壁から道路側で質の悪いアスファルト状の舗装面が認められ、中央部では下水道幹線埋設時の掘削により舗装面が破壊されているものの、調査地南部のコンクリート製路肩SF105まで広がり往時の幹線道の所在が明確となった。SF103-SF105とともに、外側の側壁に接する位置ではコンクリート製排水溝を備える。下部の石組溝については、石垣保護のためコンクリートを撤去せず未調査だが、2段の石組で構築されている可能性がある。裏込層については掘削を行ない、側壁の北側裏込

層からコンテナ3箱分の遺物が出土した。肥前系陶器碗・皿、肥前系磁器碗・皿・鉢、瀬戸・美濃系陶器向付・壺・鉢、京・信楽系陶器碗・蓋・灯明皿・火入れ、磁質施釉陶器上瓶・蓋、施釉陶器碗・皿・擂鉢、備前系陶器擂鉢・壺、土師質土器皿・炭炉・焼塙壺蓋・羽釜、磁器碗・色絵皿・青磁鉢、瀬戸・美濃系磁器碗・瓶、弥生土器、金属製煙管、玉、鉄釘、軒丸・軒平・軒桟瓦、ガラス製瓶・板ガラスなどがあるが、南側裏込層では遺物は皆無であった。所属時期は出土遺物および層序から、19世紀後半以降で20世紀中葉と考えられる。

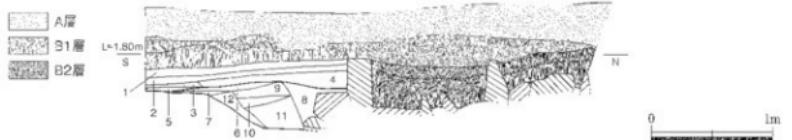
18～29は、SF103北側の裏込層から出土した遺物である。18は瀬戸・美濃系磁器皿で、染付文様に一部型紙刷が用いられる。高台内には、異体文字と「946」の製造番号の染付が認められる。19は磁器皿で、コバルト色および緑色の染付文様が施される。20は肥前系陶器碗で、鉄釉を施す唐津天目。被熱痕が著しい。21は肥前系陶器皿で、見込みに鉄絵および蛇ノ目釉剥ぎを施す。22・23は備前系陶器の小壺およびその蓋。24は瀬戸・美濃系陶器鉢で、鉄絵を施す志野向付。半環足で、底部に重ね焼きの目跡が残る。25はガラス製瓶。27は鉄製釘。28、29は軒平瓦および軒桟瓦である。

SF104 (第13図)

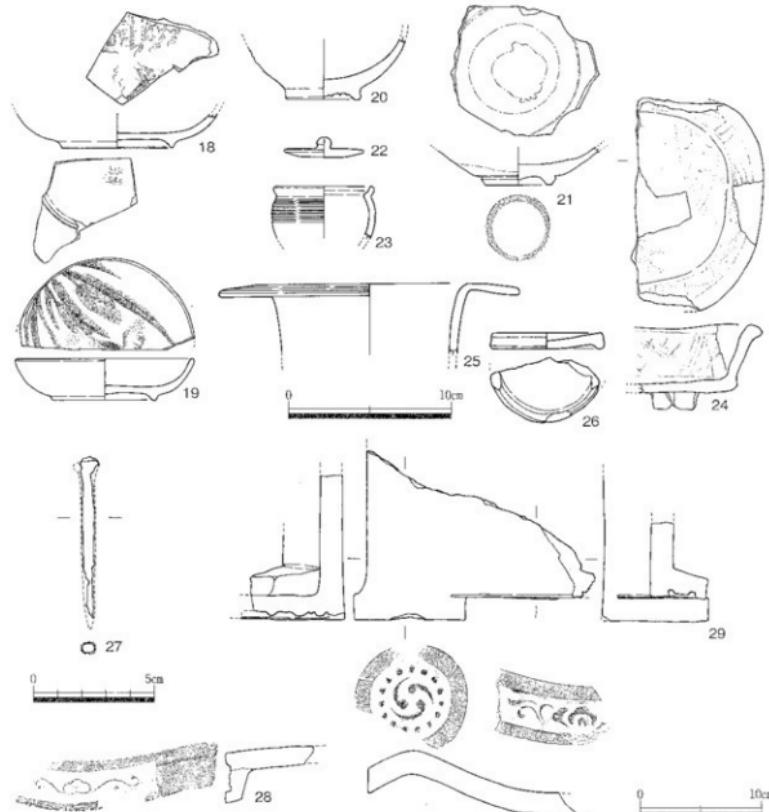
調査地北部西端でSF103に面して検出した石組構造。花崗岩の割石が南・東方向に面を擴え構築され、内側に集石を伴う。検出高は標高1.5～1.8mで、検出長は東西方向に3.8m、南北方向に1.1mを測る。主軸はN-92°・E を測り、SF103屈曲部と同地点が東面となっている。中堀埋没後の整地上に構築されているが、破壊が著しく調査地を北西方向に拡張した際にも規模



第11図 SF102 平面・土層図 (1/40)



1. アスファルト (沥青鋪設)
 2. 白色 (SY 7/r) 滲透じり粗縫砂 (数cm大の円礫を多く含む)
 3. 赤色 (SY 4/r) 滲透じりシルト質粘土 (数cm大の円礫を多く含む) } パラス層
 4. 黄灰色 (2.5Y 9/1) 滲透じりシルト質粘土 (数cm大の円礫を多く含む)
 5. 泥質砂 (SY 7/r) 糙度じり粗縫砂 (1cm大の円礫を含む)
 6. 黄灰色 (2.5Y 7/g) 粗縫砂
 7. 淡青色 (2.5Y 7/a) 滲透じり粗砂 (数cm大の円礫を含む)
 8. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 滲透じりシルト (黄色粘土塊を含む)
 9. 黄灰色 (2.5Y 6/1) シルト-淡青色 (SY 7/g) 細砂の混入
 10. 黄灰赤 (2.5Y 9/1) シルト (黄色粘土塊を多く含む、滲透直し)
 11. 黄灰色 (2.5Y 9/1) 滲透じり粗砂 (数cm大の花崗岩片を含む、滲透直し)
 12. 黄灰色 (2.5Y 9/1) シルト (黄色粘土塊・花崗岩片を含む)
- SF103掘り方



第12図 SF103 上層断面図 (1/40), SF103裏込層出土遺物

等の詳細は確認できなかった。性格は不明だが、出土遺物などから建物基礎と推定される。出土遺物は検出時におけるコンテナ2箱分で、肥前系磁器皿・皿、瀬戸・美濃系磁器皿・皿、磁器皿・皿・小杯、青磁、備前系陶器擂鉢・大甕・ミニチュア、軟質施釉陶器土瓶・蓋、施釉陶器瓶、上師質土器撲鉢・竈、陶製タイル、瓦質製品などが認められる。所属時期は、出土遺物および層序から19世紀後半以降で20世紀中葉と考えられる。

30～38は、SF104検出時の出土遺物である。30は肥前系磁器皿で、高い蛇ノ目凹形高台をもつ型打の輪花皿。コバルト色の顔料を用い型紙刷で染付文様を施す。見込みに5ヶ所の針支え痕が認められる。31は磁器皿で、コバルト色の顔料で染付文様を施す。32は白磁菊皿で、内面に白土による描文を施す。33は海手の磁器小杯。内面に上絵付の痕跡が残る。34は備前系陶器玩具で、ミニチュア擂鉢・見込みおよび底部に重ね焼き痕が認められる。35は陶製のタイルで、幾何学文様をもち施釉されている。36は陶器火鉢。口縁部および高い高台部に、握り部とみられる精円形の窓をもつ。内面および高台内は無釉で、見込みに墨書きが認められる。37は瓦質の製品で、怪が不明であるが土管と推定される。38は鉄製釘で、大型の皆折釘。

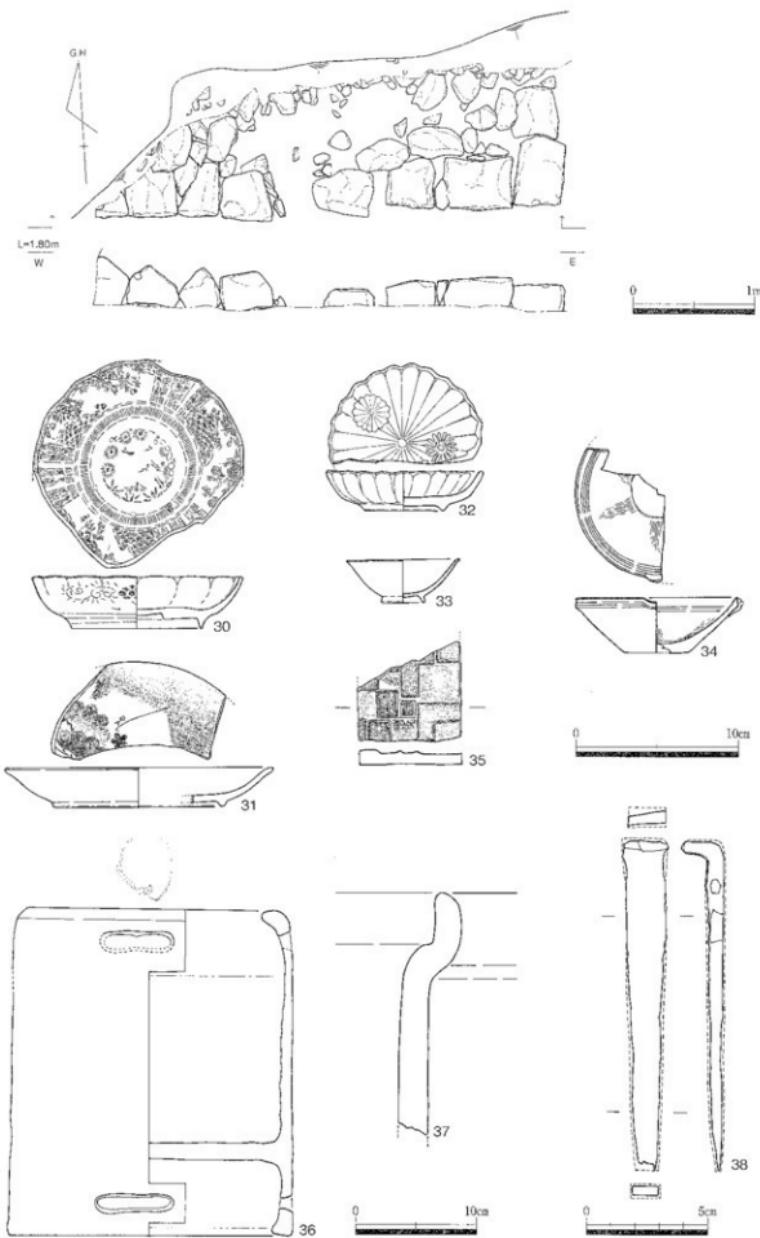
SX101（第14～17図）

調査地北部の中央北端で確認した性格不明遺構。検出高は標高1.4～1.6mで、検出長は東西方向3.8m、南北方向1m前後を測る。D層を基盤に開削され、深度1.2～1.4mの規模をもつ。底面は中塙埋土上層の砂層まで達する。土層断面の分層状況から、複数時に亘り開削された可能性がある。いずれも焼土粒ならびに粘土塊、瓦礫を含み、アスファルト舗装に酷似した石炭ガラを特徴的に含む。遺物の包含は底面付近に集中し、それまでを上層出土、集中部を下層として取り上げた。また底面で板櫛および杭跡が認められ、中塙の埋立てに際する土留めとの関連が推定される。

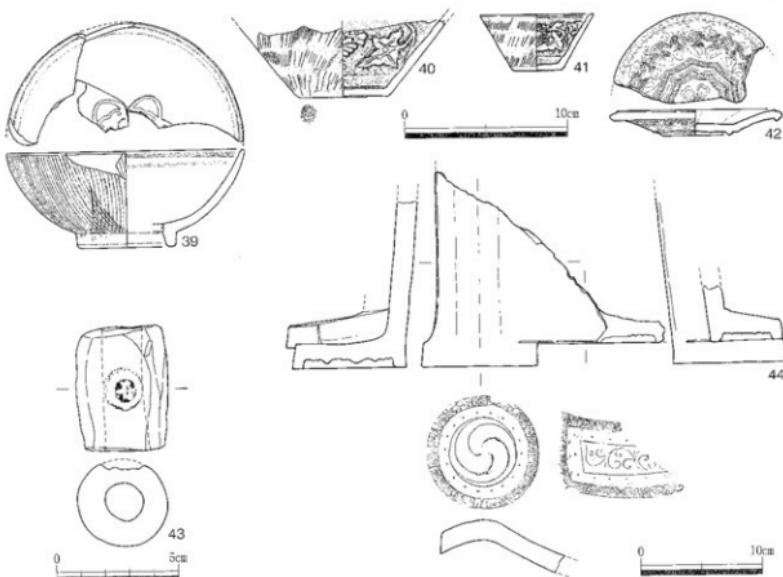
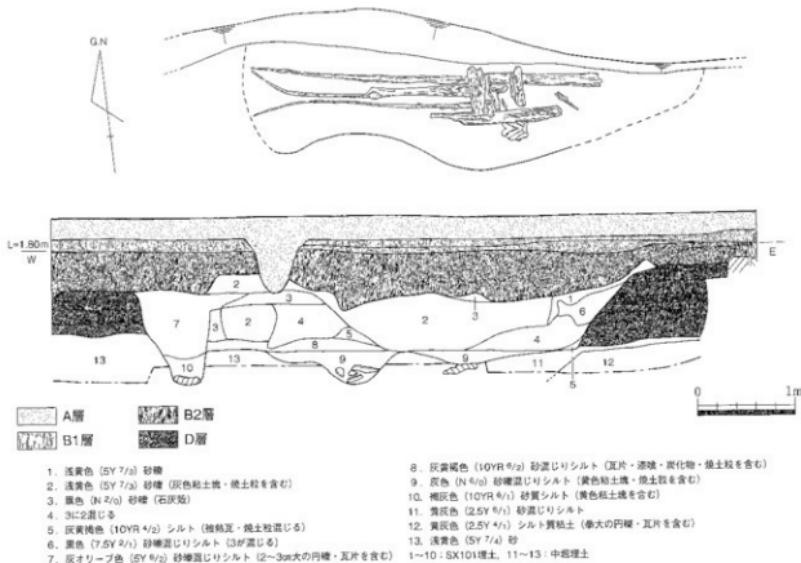
取り上げた上層遺物はコンテナ5箱分あり、磁器碗・青磁鉢、備前系陶器土鉢・擂鉢・灯明皿・大甕、ガラス製蓋・瓶・板ガラス・皿・軒丸・丸・平・軒棧・熨斗・道具瓦、瀬戸・美濃系陶器植木鉢・髪入れ、肥前系磁器皿・皿・蓋、瀬戸・美濃系磁器碗、青磁瓶、肥前系陶器碗、京・信楽系陶器碗・灯明皿・盤、施釉陶器香炉、軟質施釉陶器土瓶・蓋、鐵釘、土師質土器皿・玩具・大甕・風呂釜・焼烙鍋、瓦質土器撲鉢・羽釜、陶製折などが認められる。下層遺物はコンテナ10箱分あり、肥前系磁器皿・皿・瓶・蓋・猪口・仮飯具・油壺、瀬戸・美濃系磁器皿・皿、磁器碗・皿・瓶・青磁鉢・香炉・急須、京・信楽系陶器碗・灯明皿・鉢・瀬戸・美濃系陶器碗・皿・甕、軟質施釉陶器土瓶・玩具・花生、施釉陶器碗・鍋・竈・甕・瓶・急須、土師質土

器皿・燒塙・焰烙鍋・甕・焜炉・鉢、備前系陶器灯明皿・蟠鉢・瓶、軒丸・軒平・棧・號瓦、ガラス瓶、瓦質土器皿、鐵鍋、陶製ボタンなどが認められる。上・下層の遺物とも19世紀後半以降を中心とし、17～18世紀代のものを一定量含む。

39～51は、SX101上層出土遺物である。39は大振りの磁器碗。外面は緑色、内面はコバルト色の顔料で染付けされる。40は青磁鉢で、内外面で発色が異なる釉で掛分ける。外面は黄色みがかった発色で、軸下にトビカンナを施す。内面は緑灰色に発色し、陽刻文をもつ。底部は無釉で、放射状のカンナ板および丸に玉山の刻印が認められる。41は40と同形の小型品。42はガラス製の皿で、陽刻文をもつ。43は備前系陶器の管状土錐で、「中」の刻印をもつ。44は軒棧瓦。軒丸部の巴文は細身で長く延びて圓線をなし、18個の小さな珠文を伴う。平部も圓線をもち外区に小さな珠文が配される。瓦当面にキラコの塗布が認められる。45・46は櫛目をもつ熨斗瓦。47は花菱文の棆込瓦。同形品がSK108で認められる。48～51は陶製瓶および蓋。型成形で赤褐色に焼き締まる。52～85は、SX101下層の出土遺物である。52は瀬戸・美濃系磁器端反碗。53は青磁香炉。釉の発色および内面のトビカンナなどから54等の青磁と同産地のものと考えられる。54は40と同形の青磁鉢。55は肥前系磁器紅口。56は磁器製の碍子で、「特許許印□250.V5A」の文字が染付けられる。57は理兵衛焼と考えられる京・信楽系陶器碗。三葉葵文とみられる青色の上絵ならびに高台内に破風窓の刻印をもつ。58は京・信楽系陶器灯明皿。59は備前系陶器灯明皿。60は大谷焼と考えられる施釉陶器皿。底面に回転糸切り痕および重ね焼きによる筒状の着痕が認められる61は京・信楽系陶器蓋。62は屋島焼と考えられる軟質施釉陶器蓋。63は源内焼と考えられる軟質施釉陶器花生。型成形で陽刻文をもつ。64は施釉陶器の水白粉瓶で、「□坂びん□町□」がイッチン描きされる。65は備前系陶器擂鉢。66・67は土師質土器焼塙。66は輪積成形で、「天下□藤左□」の刻印をもつ。67は板作り成形。68は土師質土器焰烙で、口縁上面に「寛文四年」の刻書をもつ。69～71は土師質土器皿で、いずれも口径52cm、底部に回転糸切り痕をもつ。72はガラス瓶。73は鉄製丸釘。74～78は陶製ボタン。いずれも2孔で緑灰色を呈する。79・80は軒丸瓦。81・82は軒平瓦。81は半裁花菱文の中心飾りで、唐草は陽刻の輪郭線で表現される。瓦当面にキラコの塗布が認められる。83・84は花菱文の棆込瓦。85は鰐瓦の尾鳍部。中空で、胴部との接合面に刻み目および刻痕が認められる。接合面の一部には中空内部とともに焼面が残り、一旦焼成した後に接合した可能性がある。

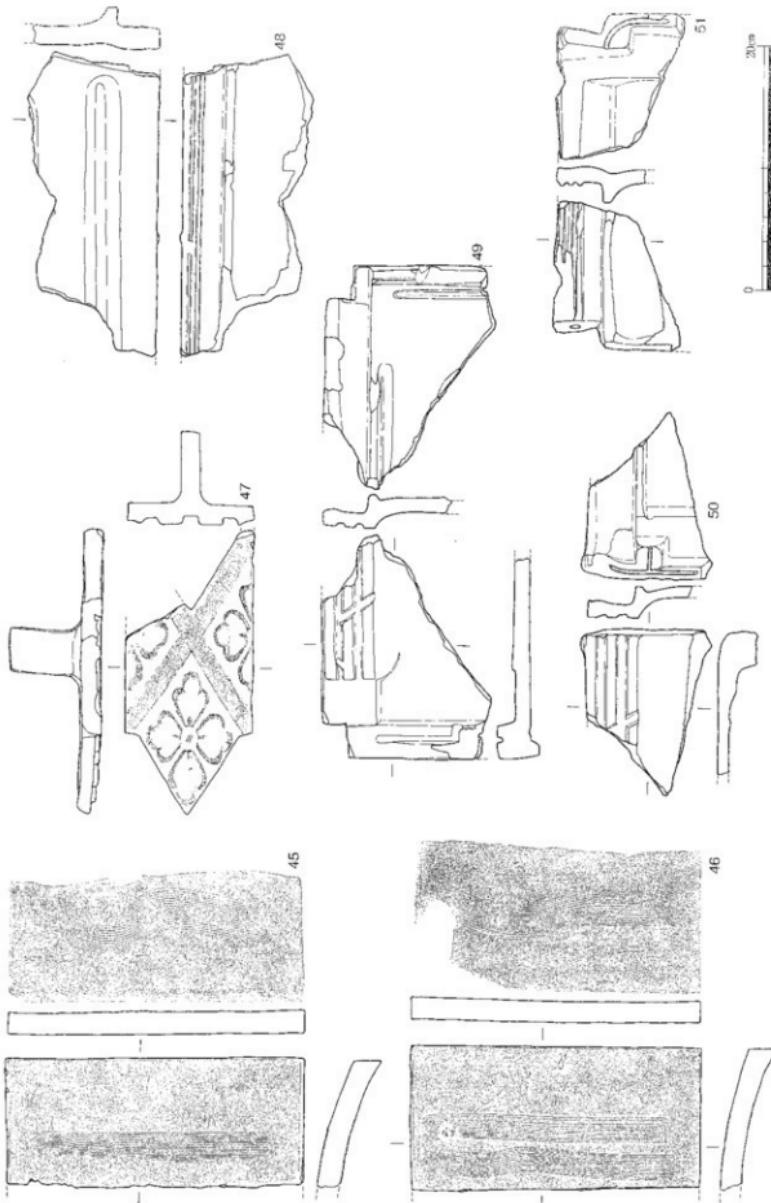


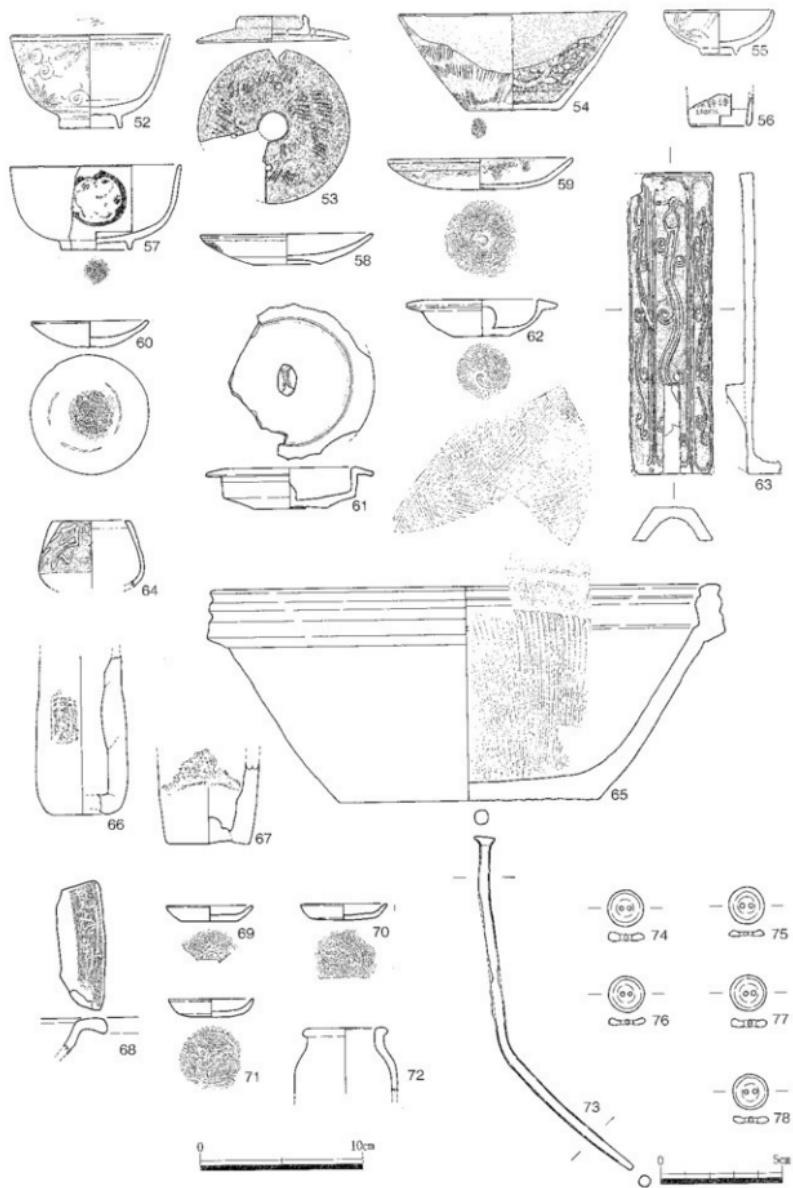
第13図 SF104 平・立面図 (1/40), SF104 出土遺物



第14図 SX101 平面・土層図 (1/50), SX101 上層出土遺物 I

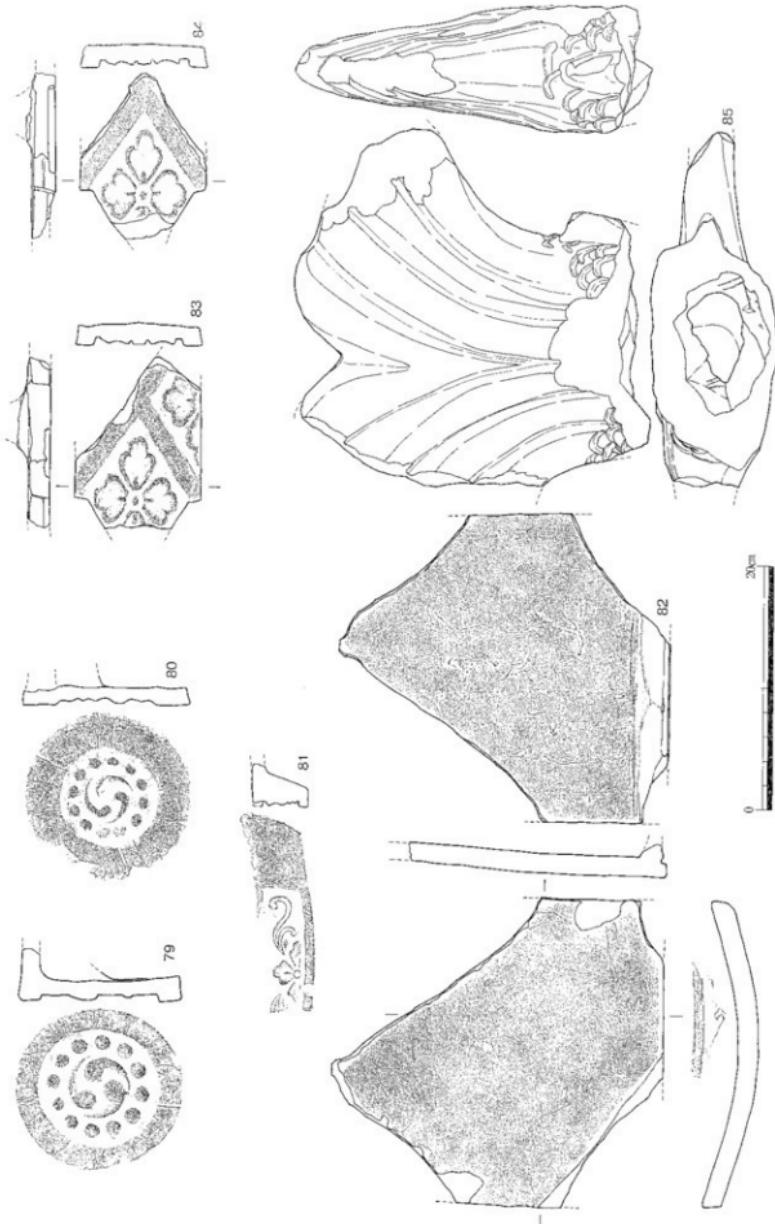
第15图 SX101 上层出土遗物2





第16圖 SX101 下層出土遺物 1

第17图 SX101 下层出土遗物2



第4節 調査地南部第3遺構面の遺構・遺物

SB301（第18・19図）

第3遺構面の東部における柱穴群のうち、SD301・302およびSX380～382との位置関係をもとに復元した掘立柱建物である。規模は1×3間で、梁間2m、桁行7m、床面積14m²を測る。主軸方位はN-105°-E、柱穴の検出高は標高0.4～0.5mである。南面の西側1間分を構成する柱穴が明確ではないが、概ね柱配置は直線的に揃い、西および東側の桁行1間分が2m、中央の1間分が3mとなる。柱穴の規模は0.4m前後で、平面は隅丸方形あるいは円形を呈する。深度は0.2～0.4mで、東方向で深くなる。埋土は黄灰あるいは褐色灰色の砂質土を基調とし、炭や焼土が混じるもの認められる。出土遺物はP-1より鉄釘が出土したのみである。

柱穴出土遺物（第19図）

86はSB301P-1出土遺物で、鉄釘である。87はSP313出土遺物で、土師質上器皿。底部に静止糸切り痕が残り、形態から佐藤A II形式に相当する。88はSP324の出土遺物で、瀬戸・美濃系陶器丸皿である。89はSP395の出土遺物で、土師質土器壺鉢の口縁部。内面に炭化が認められる。90はSP3103の出土遺物で、肥前系陶器皿。絵唐津の大皿で、大橋I-2期に相当する。91はSP3105の出土遺物で、漳州麻系青花碗である。

SD301（第19図）

調査地中央南端部で確認した溝状遺構である。検出高は標高0.36m、深度0.14m前後を測る。北側は東西方向に延び主軸方位N-105°-E前後を示すが、南側は南北方向へとL字に折れるようである。西方向で途切れ、SD302へと繋がらない。出土遺物は少量で、土師質土器壺鉢・皿の細片のみである。

SD302（第19図）

調査地中央部で確認した溝状遺構である。検出高は標高0.4m、深度0.17m前後を測る。幅1mの規模で南北方向へ伸び、主軸方位N-15°-Eを示す。当遺構面における地割を最も反映する遺構であり、その東西で遺構の分布が異なり特徴的である。出土遺物は少量で、土師質土器および須恵質土器の細片、飾り金具が認められる。92は青銅製の飾り金具。天半が折損しているが、筆文とみられる象嵌が認められる。

SD303（第19図）

調査地中央部北端で確認した溝状遺構である。検出高は標高0.43m、深度0.1m前後を測る。幅0.4mで

SD302と併行し北方向へ伸びるが、南方向には続かない。出土遺物はない。

SK371（第19図）

調査地中央部で確認した土坑である。検出高は標高0.38m、深度0.1m前後を測る。平面は隅丸方形で、長軸方向に1m、短軸方向に0.78mの規模をもつ。SD302東側を壊し開削されている。出土遺物はない。

SD374（第19図）

調査地中央部北端で確認した溝状遺構である。検出高は標高0.45m、深度0.05m前後を測る。東西方向に延びるがSB301付近で途切れる。出土遺物はない。

SD375（第19図）

調査地中央部北端で確認した溝状遺構である。検出高は標高0.47m、深度0.05m前後を測る。SD374と併行する位置関係にある。出土遺物はない。

SX384（第19図）

調査地東部南端で確認した性格不明遺構である。検出高は標高0.46m、深度0.22m前後を測る。幅0.4mの規模で南方向へ延びる。出土遺物は、骨片が少量出土している。

埋納遺構（第20図）

調査地東部で確認した埋納遺構である。検出高は標高0.5mで、深度0.05m程で土師質土器が埋納されている。鉢形土器95を底に据え、III93および94の口縁部を下に向けて、下から順に93と94を重ねて蓋をする。鉢埋設の掘り方は不明瞭で、検出できない。土器内部に遺物などは存在しなかったが、鉢内部に炭化物の付着が認められる。

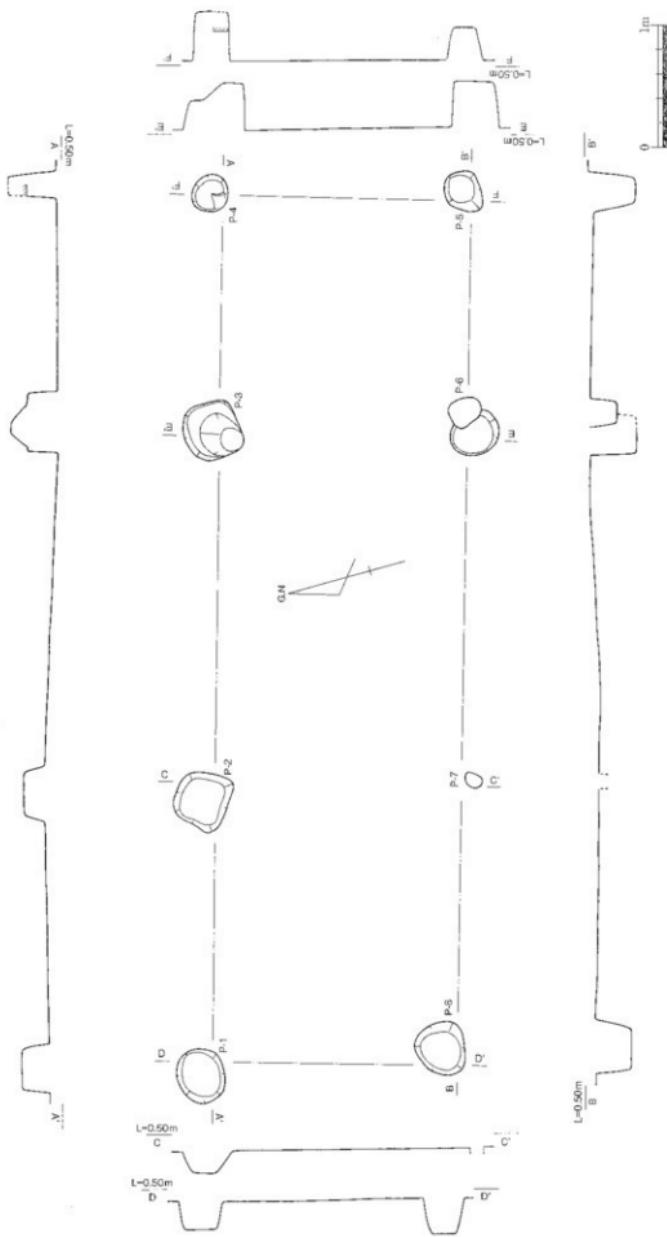
93・94は底部静止糸切りの土師質土器皿で、佐藤A II形式に相当する。93は半壊、94は完存で確認している。95は土師質土器捏鉢の底部で、口縁部を欠く。

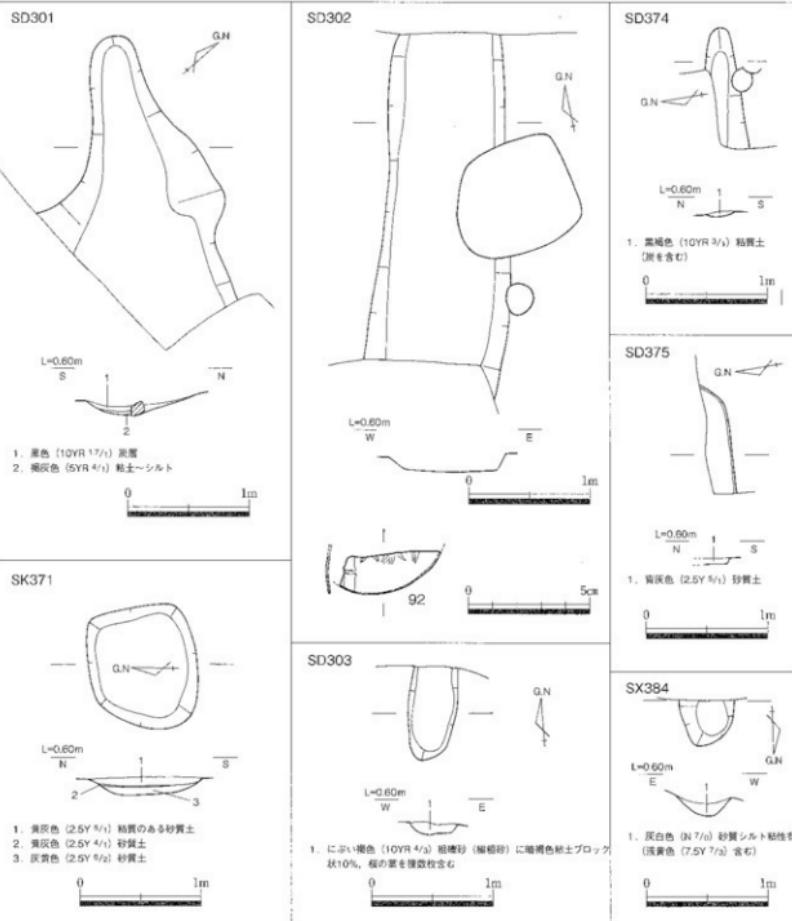
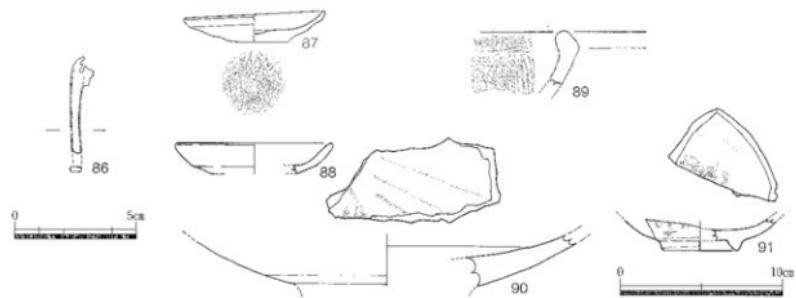
集石遺構（第20図）

調査地東端で確認した集石遺構である。検出高は標高0.5m前後で、平面形態および規模は不明だが、0.8m程の円形状に集石が認められる。集石は拳大～人頭大の礫からなり、信濃陶器や瓦片も含む。明確な下部構造は認められないが、集石の基盤層が炭化層であり、浅い落ち込み状に堆積する。出土遺物については、集石から備前系陶器壺小片、平瓦小片があり、炭化層からは土師質土器皿、平瓦小片、焼土塊、桃核が認められる。

96は炭化層の出土遺物で、土師質土器皿。精良な胎

第18图 SP301 平·断面图 (1/40)





第19図 柱穴, SD302 出土遺物, SD301・302・303・374・375, SK371, SX384 平・断面図 (1/40)

土をもち、口径14cmを測る。97は集石からの出土遺物で、平瓦細片である。

SX380・381・382（第20図）

調査地東部南端で確認した性格不明の遺構群である。標高0.35～0.46mにおいて、SB301の南面東部に面し連続して検出した。SX380は深度0.2m、SX381は0.09m、SX382は0.12m前後を測る。平面形態はSX380および382は溝状を呈し、SX381は方形を呈するが西部が南方に向へと延びるようである。主軸方位はSX380および381がN-95°-E、SX382がN-105°-Eを測る。前後関係はSX382が最も先行し、続いてSX381、SX380となる。埋土はいずれも炭化層を含み、レンズ状の堆積となる。出土遺物は少量で、國化した土師質上器鉢および鉄釘のみである。

98はSX381の出土遺物で、土師質土器巣。内外面に煤の付着が認められる。99はSX382の出土遺物で、鉄釘。100は、SX380出土の鉄釘である。

SK310（第20図）

調査地西部で確認した土坑である。検出高は標高0.4m前後で、大半が先行するSK214の底面に取り付いた状態で確認した。長軸方向に2.37m、短軸方向に1.09mの規模をもつ。平面は不整形な楕円形を呈するが、東西に分かれる2箇所の方形の窪みで構成されている。深度0.2m前後を測り、炭化物、木質遺物、骨片を含む粘質土で充填される。出土遺物は少量で、肥前系陶器、土師質土器、磁器細片、鉄釘、丸瓦、動物骨が認められる。

101は丸瓦。凸面にはヘラミガキおよびナテ調整、凹面にはコビキ痕が認められる。

SK364（第21図）

調査地東端で確認した性格不明の遺構である。標高0.48m前後で、SB301の北面東部に面して検出した。長軸方向に3.3m、短軸方向に2.2mの規模で検出されたが、更に北および東方向へと広がるようである。深度は0.2mで、壁面がほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦になっている。埋土は焼土および炭化物を多量に含む砂質土で、表面は被熱による赤化が著しい。出土遺物は少量で、青花皿、瀬戸・美濃系陶器碗、土師質土器皿・鉢、鉄釘などの細片が認められる。

102は白磁皿の底部で、高台置付に砂粒付着が認められる。111は組紐の鉄釘で、断面が円形を呈する。

SK365（第21図）

調査地東部で確認した土坑である。標高0.35m前後で、SX364を基盤に検出した。東西方向に延び、N-90°

-Eの主軸方位を示す。規模は長軸方向に1.34m、短軸方向に0.4mを測る。深度0.35m前後を測り、断面は裕形を呈する。埋土は3層に分層され、上層は砂、中層および下層はシルト質土によって充填されている。出土遺物は一定量あり、肥前系陶器碗・皿、備前系陶器鉢・盆、陶器小片、土師質土器皿、丸瓦片が認められる。

103は肥前系陶器碗あるいは鉢で、口縁上端が無釉である。104は肥前系陶器皿で、幕灰釉を施す。105は肥前系陶器で、砂目の皿。大橋Ⅱ期に相当する。106は瀬戸・美濃系陶器で、鉄釉を施した碗底部。107は備前形陶器鉢で、乗岡近世1b・c期に相当する。108は土師質土器皿。109および110は丸瓦、凹面に109は内タタキ模、110はコビキ痕が残る。

第5節 調査地南部第2遺構面の遺構・遺物

SK204（第22図）

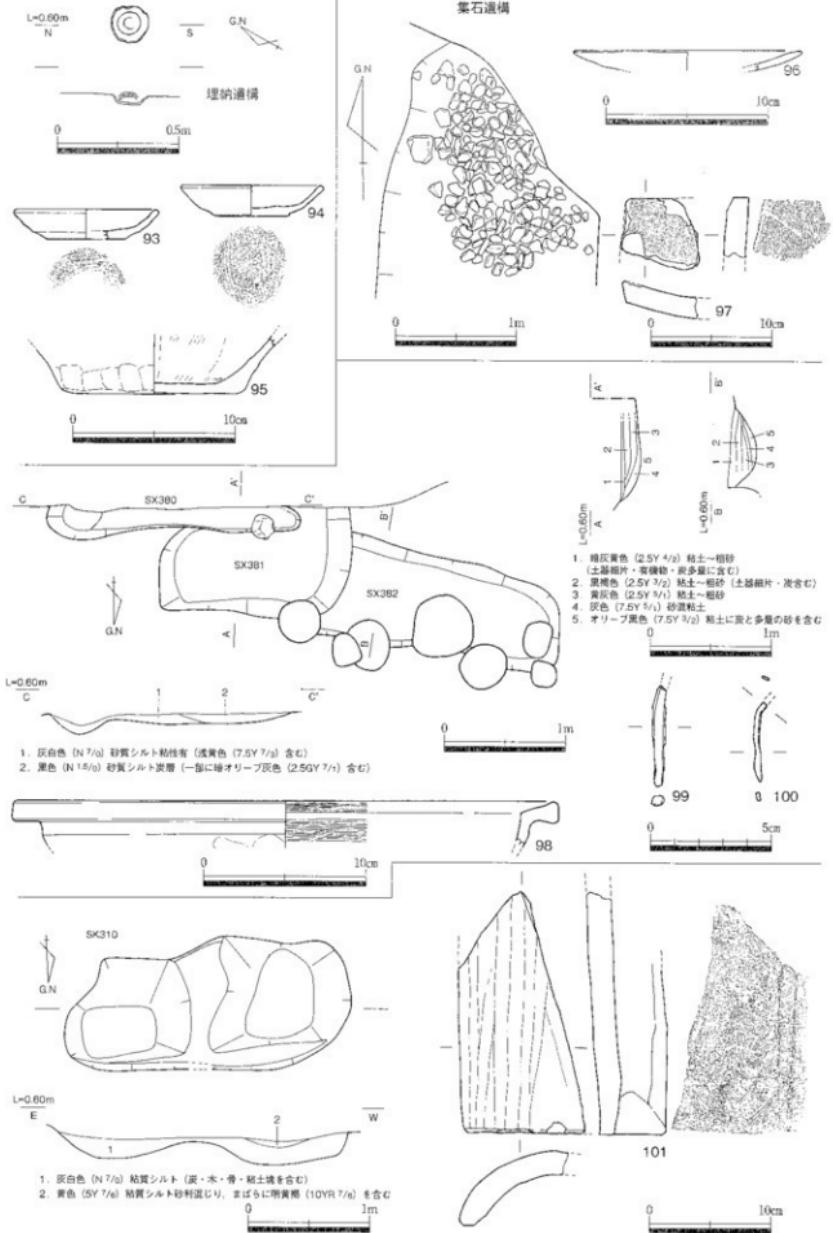
調査地西部、SK214上面で検出した集石を伴う土坑である。標高0.90m前後で検出し、規模は長軸方向に1.26m、短軸方向に0.5mを測る。北半を欠いて確認しているが、梢円形の平面形態が推定できる。内部は拳大～人頭大の礫で充填されている。出土遺物は少量で、肥前系陶器碗・皿、肥前系磁器、備前系陶器皿・鉢・碗、土師質土器皿が認められる。

112は肥前系陶器で、溝縁皿。113は備前系陶器皿の口縁部。114は備前系陶器瓶の底部である。115は備前系陶器鉢。口縁部が高く薄手のもの。116は土師質土器皿。口縁部が焼化し、灯明に使用されたと考えられる。灰白色を呈する精良な胎七で、底部に回転糸切り痕および見込みには仕上げナデが認められる。佐藤皿V形式（様相4）に相当する。

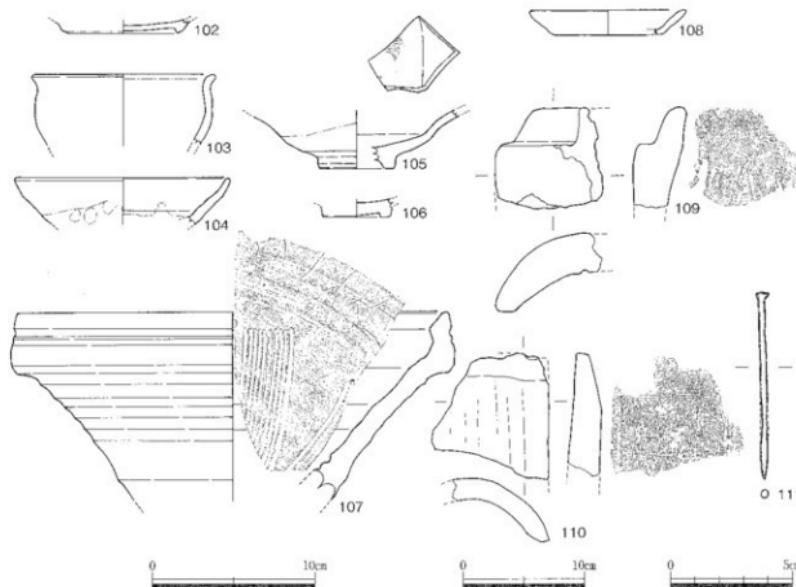
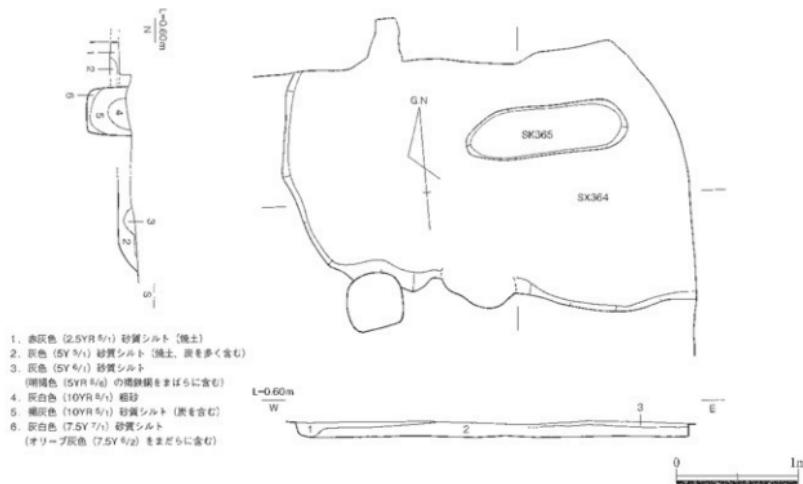
SK214（第22図）

調査地西部で検出した土坑である。標高0.9m前後で検出し、規模は長軸方向に3m、短軸方向に1m前後を測る。平面は東西方向に不整形に延び、N-92°-E前後の主軸方位を示す。深度は0.3～0.4mを測り、東方で深くなる。遺物は一定量出土しており、底面の遺物を下層、その他を上層として取り上げた。上層では青花碗小片、肥前系陶器碗・皿、備前系陶器細片、土師質土器細片、軒丸瓦、丸瓦、下層では青花小片、肥前系陶器皿、備前系陶器鉢・瓶、土師質土器皿、軒丸瓦が認められ、上・下層とも同様な構成となる。

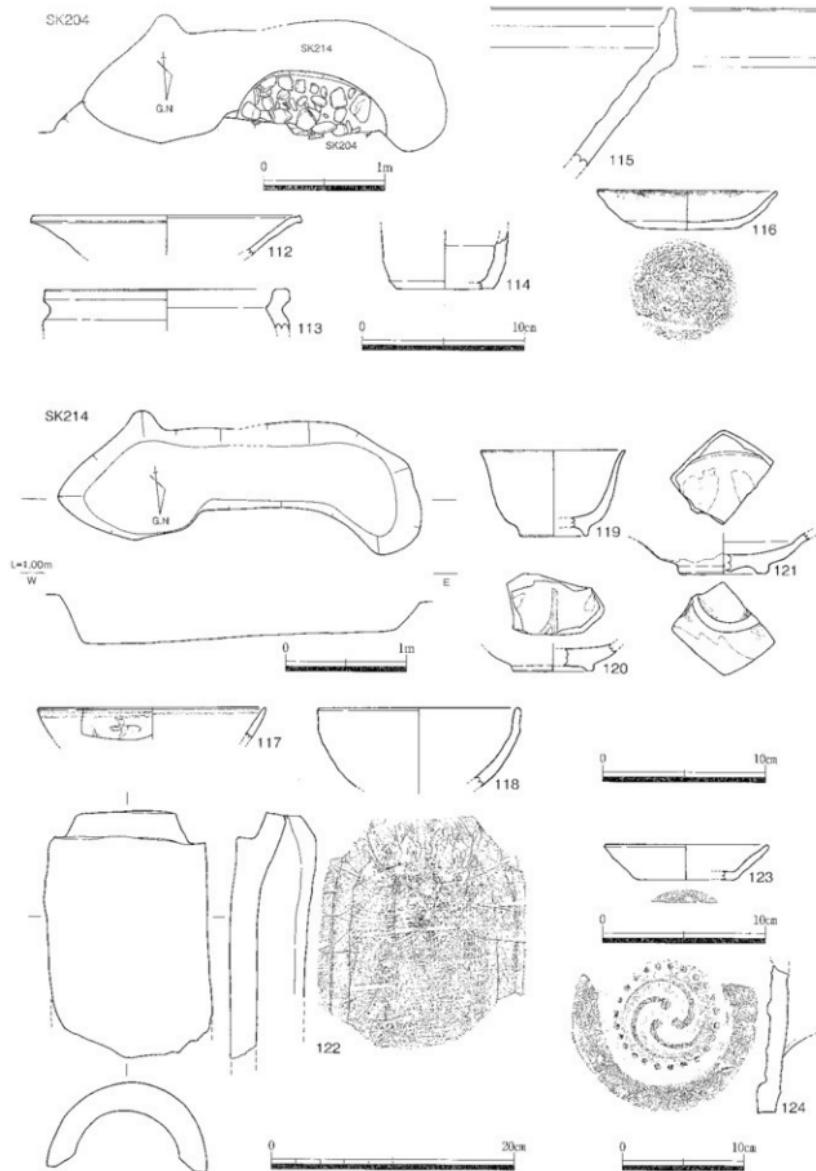
117～122は、SK214上層出土遺物である。117は漳州窯系青花碗。内外面に貢入が認められる。118は肥前系陶器碗で、灰釉を施す天目碗。119は肥前系陶器碗。高台置付に砂目の着焼が認められる。120は肥前系陶器皿で、胎土目をもつ絵唐津。121は肥前系陶器皿で、高台と見込みに砂目の着焼が認められる。122は丸瓦。



第20図 埋納遺構平・断面図 (1/20), 集石遺構, SX380・381・382, SK310 平・断面図 (1/40), 埋納遺構, 集石遺構 SX380・381・382, SK310 出土遺物



第21図 SX364, SK365 平・断面図 (1/40), SX364, SK365 出土遺物



第22図 SK204・214 平・断面図 (1/40), SK204・214 出土遺物

四面にゴザ目およびコビキ痕が認められる。

123および124は、SK214下層出土遺物である。123は土師質上器皿。にぶい黄褐色の胎土をもち、底部の切り離しは回転糸切りとみられる。器形および口径から、佐藤皿Ⅲ形式（様相4）に相当する。124は軒丸瓦。広い内側で、巴文の尾が長く伸びて24個の小さな珠文が配される。

SD201（第23図）

調査地西部で検出した溝状遺構である。標高1.07m前後で検出し、規模は長軸方向に2.80m、短軸方向に0.75m前後を測る。平面は東西方向に延び、N-95°・Eの主軸方位を示す。深度は0.25mを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は風化礫を塊状に含んだ砂混じりシルト層で、固く締まる。遺物は少量で、肥前系陶器Ⅲ、備前系陶器細片、肥前系磁器細片、土師質上器皿片が認められる。

125は肥前系陶器Ⅲで、見込みおよび高台疊付に砂目の焼着が4箇所認められる。

SD202（第5図）

調査地を東西方向に走る溝状遺構である。標高0.85m前後で認められ、整地G層直下で明確となる第2遺構面の下層遺構として検出した。幅0.3m、深さ0.15m前後を測り、断面はV字あるいはU字形を呈する。N-95°・Eの主軸方位で調査地東側へと延びるが、西部SD201付近でやや南を向き途切れる。埋土は円錐混じりシルト層で、グライ化が一部認められる。遺物は皆無である。

SK205（第23図）

調査地東部で検出した土坑である。標高0.95m前後で検出し、平面は0.6mの円形を呈する。深度は0.2m前後で、断面は逆台形を呈する。出土遺物は少量で、肥前系陶器Ⅲ、土師質上器皿が認められる。

126は肥前系陶器で砂目の皿。127土師質上器皿。にぶい黄褐色の胎土で、底部の切り離しは回転糸切りである。器形および口径から、佐藤皿Ⅲ形式（様相4）に相当する。

SK203（第23図）

調査地西部南端で確認した土坑である。調査地南壁で確認したもので、標高1.4m付近の第1遺構面基盤となるE層から掘り込みを確認した。平面検出は行えなかったが0.8m程の規模をもつと考えられる。深度は0.7m前後で、断面はU字形を呈する。埋土は粘土塊、炭化物、瓦片、小標を含むシルト層で、底付近には人頭大の角礫が見られる。出土遺物は少量で、圓化した備

前系陶器瓶、土師質上器皿焼物のみである。

128は備前系陶器で、梨押しの人物形利。底部に刻印をもつ。129は土師質上器皿焼物。内耳の円孔は貫通する。

SK201（第23図）

調査地西部で検出した土坑である。標高1.07m前後で検出し、平面は0.65mの円形を呈する。深度は0.05m前後で、断面はV字形を呈する。埋土は単層で、炭化物および風化礫を含むシルト層である。出土遺物は少量で、肥前系陶器細片、丸瓦片が認められる。

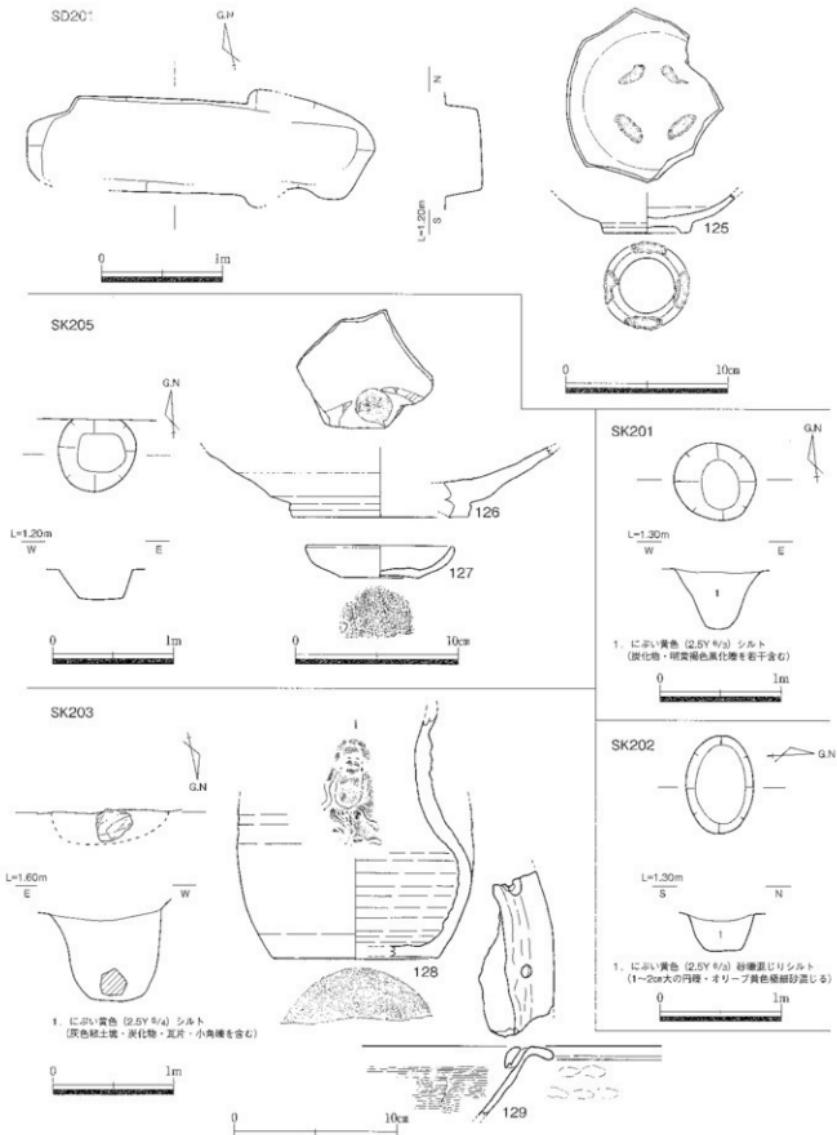
SK202（第23図）

調査地西部で検出した土坑である。標高1.08m前後で検出した。平面は長軸方向0.8m、短軸方向0.6mを測り、断面は円形を呈する。深度は0.3m前後で、断面は逆台形を呈する。埋土は単層で、円錐および砂を含むシルト層である。出土遺物は少量で、肥前系陶器、備前系陶器、土師質上器皿の細片が認められる。

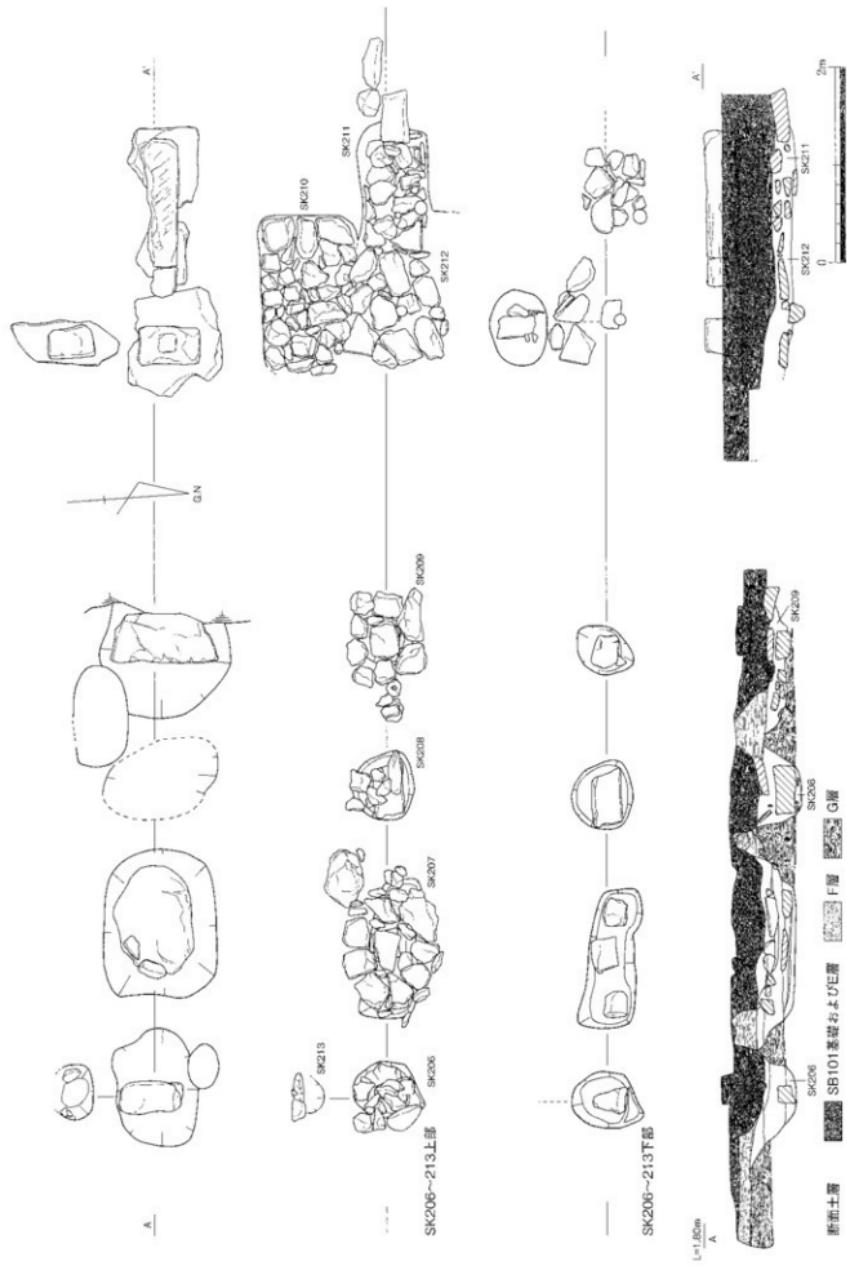
SK206～SK213（第24図）

調査地東部で検出した礎石建物基礎である。標高0.95～1.04m、整地G層上面で認められ、円形あるいは方形の掘り方に入念な根石を伴う。掘り方底面の中心に石を据えるものが多く、布掘りの掘り方であるSK207底面は両端部にも石材が配されている。この上部では壺掘りのSK206・208では乱雜に根石が投げ入れられているが、SK207・209・212では再び中心に石を配し格円あるいは方形に石組みを行なっている。規模の大きい布掘りSK210・211では中心に石を配さないが、掘り方内は入念に石組みされている。SK210・211・212についてはその埋土により前後関係は判断できなかつたが、石組みの状況ではSK212の石組みが後出するのが分かる。石材は拳大から一抱え大の花崗岩および安山岩ではほぼ同じ割合で認められるが、SK210西端中央に据えられた柱状の石のみ転用石と考えられる凝灰岩が用いられている。またSK207上部の石組み中央の花崗岩には、幅数cm大の矢穴が認められる。

これらの建物基礎については、第1遺構面検出の備石建物SB101と位置関係が合致するが、掘り込みの基盤が第1遺構面の礎石搬付の掘り方と整地F層を挟み異なる箇所が認められる。F層からE層までの整地が一連の造業あるいは時期を造る可能性の双方があるが、後述するように出土遺物においてE層とF層に若干の時期差（19世紀中葉と19世紀後半）が認められることから、時期が異なる礎石建物跡と考えられる。上記についてはSB101と平面プランが合致することから建替えと理解されるが、先行してみられるSK210に



第23図 SD201, SK205・203・201・202 平・断面図 (1/40), SD201・205・203 出土遺物



第24図 SB101 基礎部 SK206～212 上部・下部平面・土層図 (1/50)

については第1遺構面の礎石根石と規模および位置関係が合致しないことから別途構造物を想定する必要もある。出土遺物についてはSK207で肥前系陶器の細片、SK210で平瓦、鉄板、鉄塊、SK211で肥前系陶器の細片、土師質土器細片、錢貨が認められる。

130および131はSK211出土の古銭。水滸通寶で2枚重なって出土した。132および133はSK210出土の鐵製品で、132は柱状、133は方形で板状を呈する。いずれも錯による腐食が著しい。

第6節 調査地南部第1遺構面の遺構・遺物

SB101 (第24・26・27図)

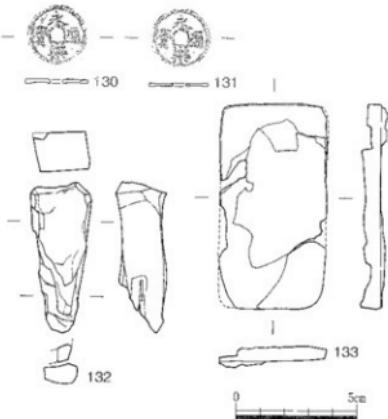
調査地東部で検出した礎石建物跡である。標高1.48m～1.84mで検出しているが、礎石1および2については花崗岩の削石を柱土台とし、礎石6とともに戰災による被熱層を伴って確認したもので原基礎構造を留める。礎石3～5は礎石据付坑および土台の根石が残存するもので、栗石を敷き詰め扁平で大振りの花崗岩を据えて根石としている。礎石6およびSK101については、礎石据付坑ならびに栗石だけが残存して確認された。礎石1・2・6についても下部に巨石を据えた根石が存在し（第24図）、礎石据付坑に栗石を伴った根石を据え、その上部に柱土台を置く構造であることが分かる。建物の規模については、西および南側に広がるものと推定されるが、検出した規模では東西方向9.5m南北方向1mとなり、主軸方位はN-95°-Eを示す。

礎石1および2では、上面に20cm角の柱座となるハツリ痕あるいは柱材の炭化痕が認められた。同様の痕跡は礎石2および6と対面する位置でSF101上の石にも存在し、庇をもつ構造と考えられる。礎石2から西1間分（1.9m）については、礎石6が撤去しとなっていることから、庇をもった出入り口と考えられる。また後述のように、東側に接して構築され同時期に廃絶する地下遺構SU101についても北側が出入り口となっており、礎石3およびその対面のSF101上を基礎とし庇が東に広がると考えられる。

出土遺物および位置関係から戰前に存在した神社施設と考えられる。

134は礎石2の据付坑の出土遺物で、灰釉を施す陶器蓋。底部露胎で回転糸切り痕を残す。135および136は礎石4の据付坑の出土遺物である。135は軟質陶器蓋。136は土師質土器皿。底部に回転糸切り痕を残す。

137～146は礎石1・6付近検出時の出土遺物で、焼土を伴って出土した。137～140は白磁の仏神具。137は瓶子。著しく被熱を帯びている。138・139は水器および水器蓋。140は仏飯器。被熱痕が認められる。141は磁器瓶。緑色で「不二 □エキス」と上絵付けされ



第25図 SK210-211 出土遺物

ている。器面に被熱したガラスが熔着している。143は磁器の底部。高台内に「NIPPON TOKI KAISHA」および商号が銅版転写されている。144は陽刻文をもつ瓦質土器の口縁部。赤および緑色のベンキに似た顔料で彩色されている。145はガラス製瓶。型合せで、底部に「25 1」の陽刻をもつ。146は軒丸瓦。被熱痕が認められる。

SF101 (第26・27図)

調査地を東西方向に走る低基壇の石列である。検出高はSB101の土台より0.2m程度低く、ほぼ当時の地表付近で面を揃えていたものと考えられる。西部で南へ折れるが、隅部では上に切石の地盤が乗りSB101の土台と高さを揃えている。SB101と併走しており付随する玉垣などの基礎と推定されるが、石列前面および背面の下部では集石を伴った入念な整地が認められる。東部では旧中学校の砂場によって壊されているが、地下遺構SU101の出入り口の北および西面を囲むように下部の集石層が認められる。石材質については地覆および石列が花崗岩を基準とするのに対し、集石は安山岩が主となる。出土遺物から19世紀後半に構築され、検出状況から戰災により廃絶したと考えられる。

147～158はSF101検出時の出土遺物である。147は肥前系磁器で、壺反碗。口縁内面の染付文様は墨彈きによって施されている。148・149は漸戸・美濃系磁器皿。148の染付には正円子および酸化クロムとみられるピンク、緑色が用いられている。高台内に製造番号とみられる数字が陽刻されている。149はコバルト色および緑色の染付文様をもつ。150は陶器で刷毛目装飾の

範。外面にヘラ彫りおよび縁飾による加飾が認められる。151・152は上部質土器皿で、いずれも底部に回転糸切り痕を残すとともに形態から佐藤型形式に相当し、混入品と考えられる。153は白磁瓶。口縁に蓋用の螺旋状溝をもち、底面には「MASTER」の陽刻が施される。被熱痕が著しい。154・155は無文の軒丸および軒平瓦。156は半截花波文の中心飾りをもつ軒平瓦。157の平瓦は凸面に格子状のタタキ痕をもつ。158は花菱文の棟込瓦で、瓦当面にキラコの塗布が認められる。

SU101（第28～30図）

調査地東部で検出した地下遺構である。標高1.4m～1.6m前後でSB101を横断して検出した。北面にモルタル仕上げの階段を伴い、板張りの壁・床面が南方に向へ広がるもので、検出面積は約2m²の床面積を測る。

北面の昇降部は外法で0.9×0.9mを測り、壁はレンガ積みで壁面をモルタル塗りで仕上げる。レンガは焼成不良の青灰色を呈したものが用いられ、壁面に対し長手積みされている。階段の高さは約1mで、蹴上げは0.28～0.36mを測り、3段で床面に達する。床組みは地面に梁を置き、根太を通して板を張る梁床だが、階段直下は地面に直接板を敷き根太を置いた上に板を張っている。昇降部から南へ1間分は南北方向が梁行きであるが、以南は東西方向の梁行きとなり床面が広がるとともに、根太および床板の方向が変わる。昇降部以南の壁面は板壁で、横張りの板材が一部残存している。いずれも梁に設けられた間柱ホゾ穴の外側に壁板が残り、外方向から壁板を設置する構造と考えられる。東面については斜行しながら広がり、別の昇降部と推定されるレンガ積みの壁面へと繋がる。

SB101との関係について新旧は不明だが、ともに戦災で廃絶することなどから共存していたものと考えられる。SB101の柱土台とSU101の床面の比高差は1.7m程度あり、建物の床下において立ち歩行が可能であったと推定される。埋没状況については、上面から床面に至るまで多量の焼土および瓦礫で充填され、床板の直下が湧水層となる。取り上げた出土遺物には磁器碗、青磁細片、瀬戸・美濃系陶器植木鉢、施釉陶器植木鉢、備前系陶器擂鉢、節理金具など金属製品、軒丸・軒平・棟権振瓦が認められる。

159～173はSU101埋土からの出土遺物である。159～161は無文の軒丸および軒平瓦。161は凸面に格子状のタタキ痕をもつ。162・163は棟権振瓦で、163の広端面および側縁には漆喰が付着している。164・165は格子状のタタキ痕をもつ平瓦。166は丸瓦で、門面に内タタキ痕が認められる。167・168はレンガで、168は湾曲部をもち表面に漆喰の付着が認められる。169はトルクレンチ状の鉄製工具。170は青銅製の金具。棒

状を呈し、両端に仕口と締ぎ手をもつ。171は鉄製の吊り金具。上端をリングで巻きM字状の吊り下げ部をもつ。5枚の板金を組み合わせ、4箇所でリベット留めが認められる。172は青銅製の飾り金具。被熱による損傷が大きいが、複数の薄い側板および棒状の金具で構成されている。173は鉄製の表示札。表面を背後に白色で電柱番号がペイントされている。

SK102（第31図）

調査地中央部南端で検出した土坑である。標高1.25m前後で検出し、平面は長軸方向1.24m、短軸方向0.9mを測る楕円形を呈する。深度は0.3m前後で、断面は舟底形を呈する。埋土は焼土塊、被熱瓦などの戦災痕を含み、下層に粘土塊を作り砂礫が充填している。底面はSK210の石組に達しており何らかの構造物の設置痕と推定されるが、SB101の出入り口に相当する位置関係が留意される。

出土遺物は少量で、磁器細片、瓦片が認められる。

SK105（第31図）

調査地中央部南端で検出した土坑である。標高1.49m前後でSF101の北面に接して検出した。平面は不整形で、長軸方向1.1m、短軸方向0.5mを測る。深度は0.2mで、断面は四角形を呈する。

出土遺物は少量で、肥前系磁器碗・瓶、瀬戸・美濃系磁器碗、施釉陶器細片、土師質の井削が認められる。

174～176はSK105埋土の出土遺物である。174は瀬戸・美濃系磁器の端反碗。175は肥前系磁器の端反碗。大橋V期に相当する。176は土師質の井削である。口縁外側の貼付け帯は剥離している。

SK103（第31図）

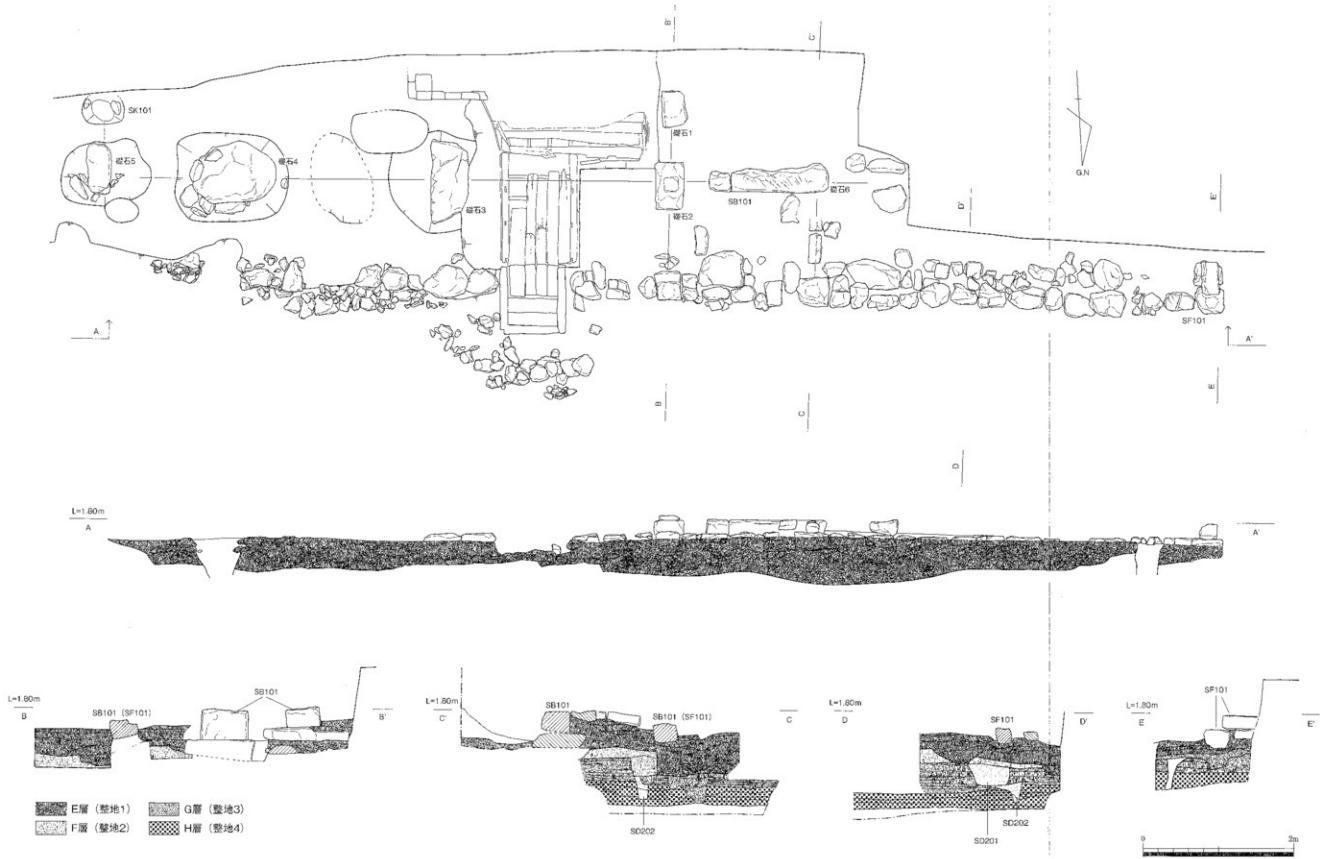
調査地中央部で検出した土坑である。標高1.55m前後でSF101の北面側で検出した。平面は円形で0.55m程の規模である。深度は0.27mで、北面に段が付く。埋土は焼土粒および瓦礫を含む黒色シルトである。取り上げできた出土遺物はない。

SK104（第31図）

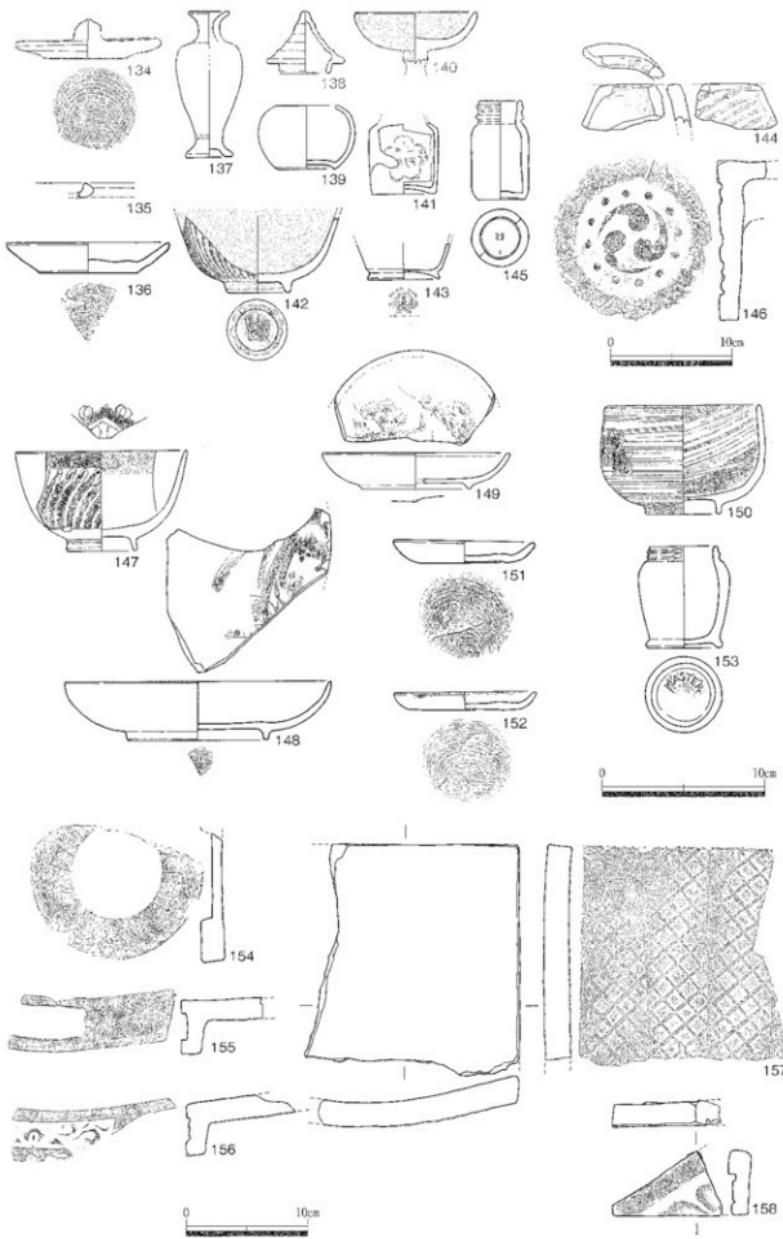
調査地中央部で検出した土坑である。標高1.51m前後でSF105の南面に接し検出した。平面は方形で0.7m程の規模である。深度は0.3m前後で、埋土は上層が焼土粒および瓦礫を含むシルト層で、下層はグライ化した砂が充填している。出土遺物は少量で、磁器碗・瓶などの細片、肥前系陶器細片、板ガラスが認められる。

SK107（第31図）

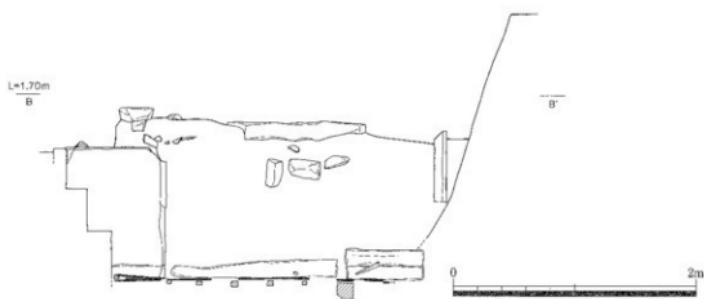
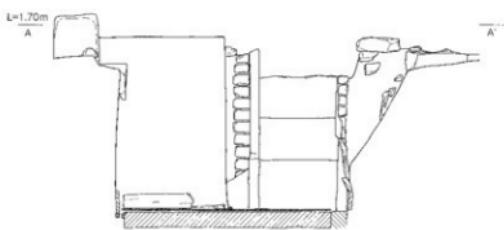
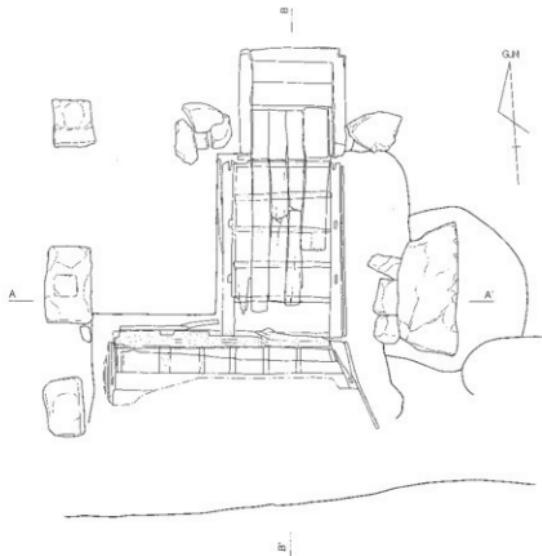
調査地中央部で検出した土坑である。標高1.50m前



第26図 SB101, SF101 平面・土層図 (1/50)



第27図 SB101, SF101 出土遺物

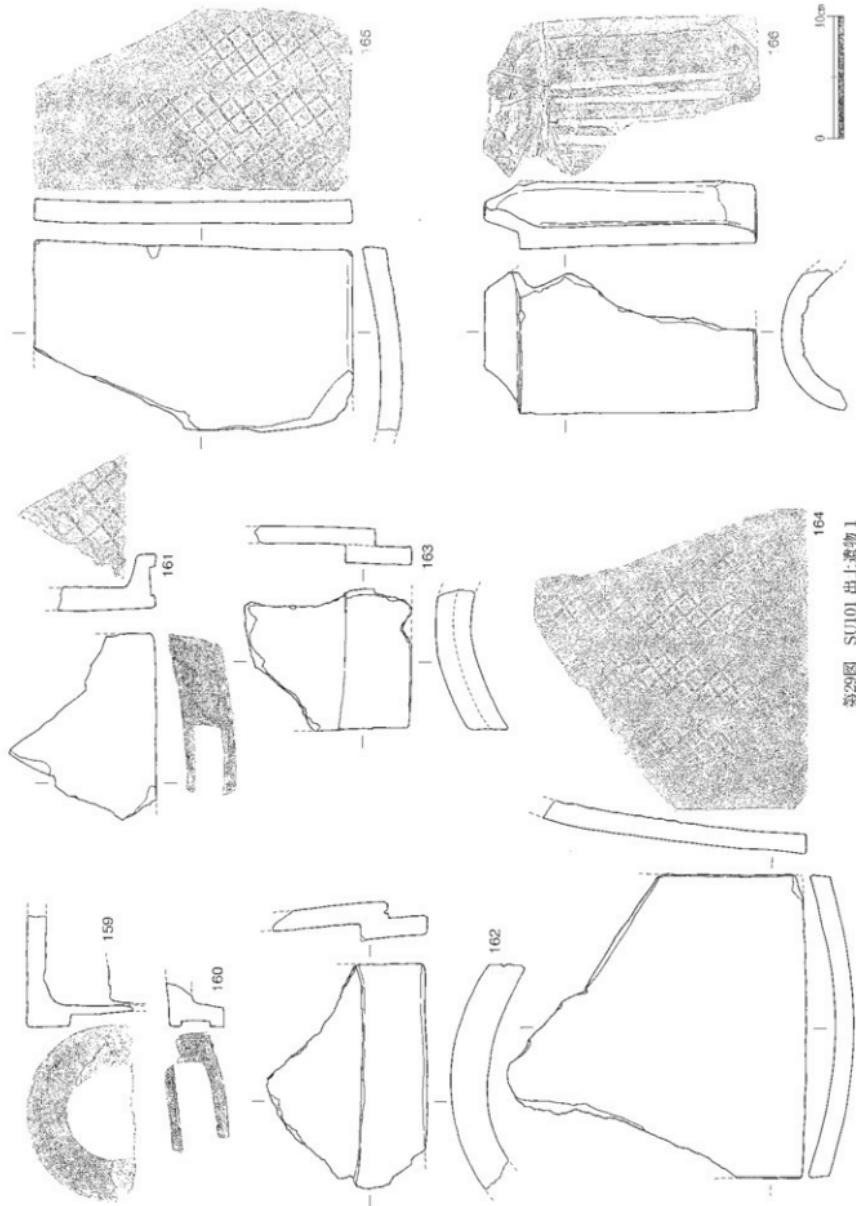


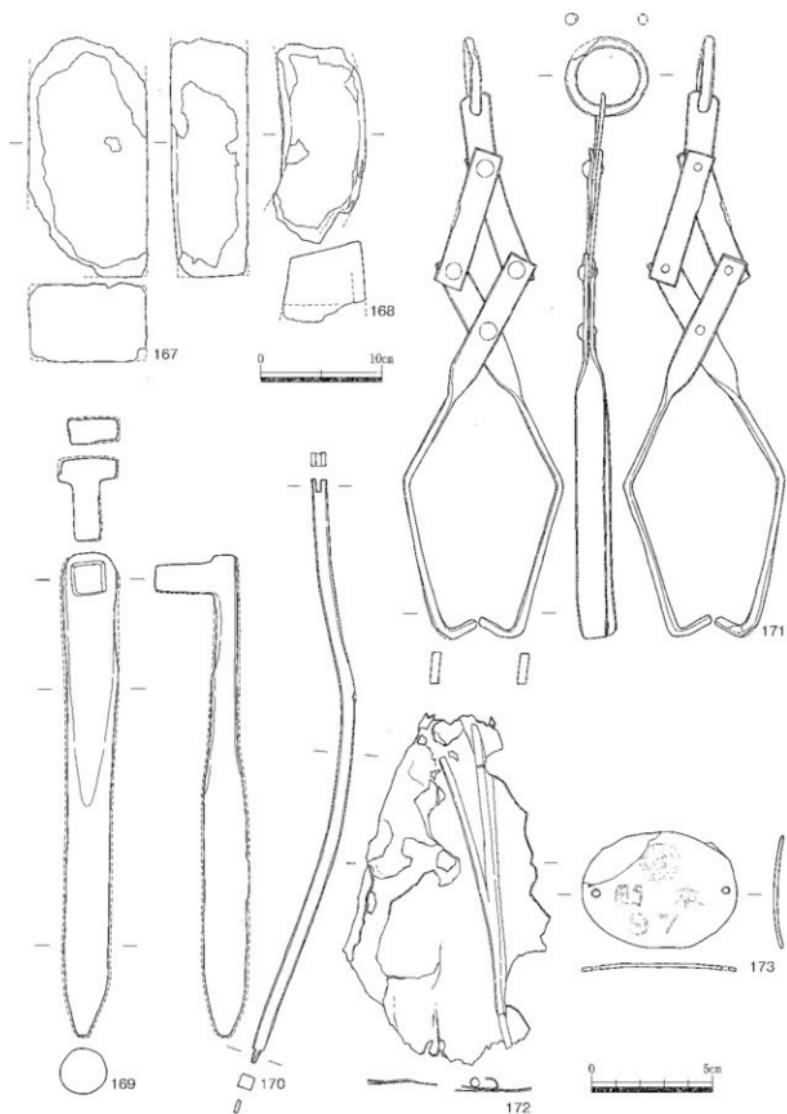
第28図 SU101 平・立面図 (1/40)

10cm

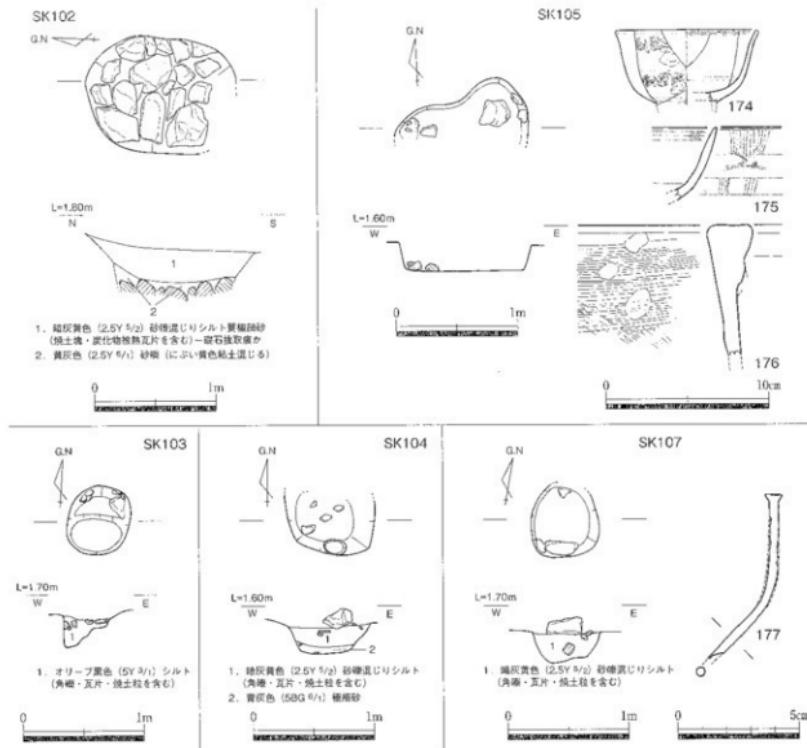
164

第29图 SU101出土遗物1





第30図 SU101 出土遺物 2



第31図 SK102-105・103-104・107 平・断面図 (1/40), SK105・107 出土遺物

後でSF105の南面に接し検出した。平面は円形で0.6m程の規模である。深度は0.3m前後で、埋土は上層が焼土粒および瓦礫を含むシルト層である。出土遺物は少量で、肥前系磁器細片、施釉陶器細片、鉄釘が認められる。

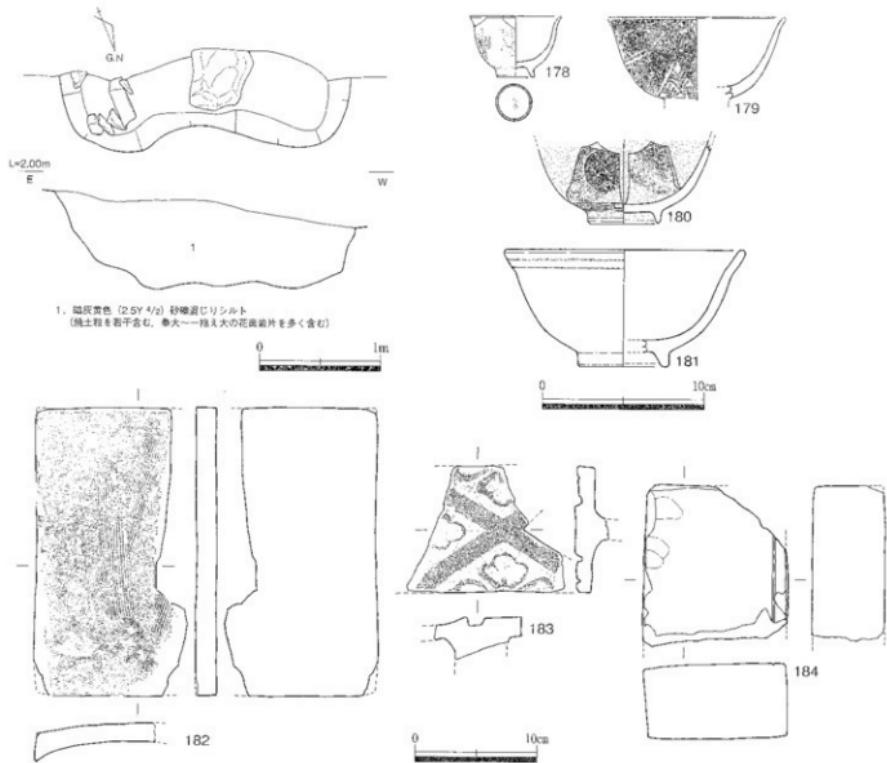
177はSK107の出土遺物で、断面が円形の鉄釘である。

SK108 (第32図)

調査地西南部南端で検出した土坑である。標高1.63m前後で検出した。平面は不整形な楕円形を呈し、長軸方向に2.36mの規模をもつ。深度は0.8mを測り、壁面および底面の凹凸が著しい。埋土は焼土粒および瓦礫

を含むシルト層で充填されている。出土遺物は一定量あり、磁器碗・小杯、施釉陶器碗・鉢・大甕、備前系陶器捕鉢、平瓦、煉瓦などが認められる。

178～184はSK108の出土遺物である。178は瀬戸・美濃系磁器の小杯。高台内に九谷の銘款をもつ。179は京・信楽系陶器碗で、陽・陰刻文および錆絵の染付が施されている。180は磁器碗で、陽刻文をもち青磁および鉄釉が掛け分けられている。181は磁器で、大振りの碗。染付文様は口縁外側の圓線のみとなっている。182は凸面に櫛目をもつ熨斗瓦である。183は花菱文の櫛込瓦。瓦当面にキラコの塗布が認められる。184は煉瓦。幅11.8cm、厚さ6.2cmを測り、平面の長手側縁辺に1条の凹線をもつ。器面には指オサエの觸痕が認



第32図 SK108 半・断面図 (1/40), SK108 出土遺物

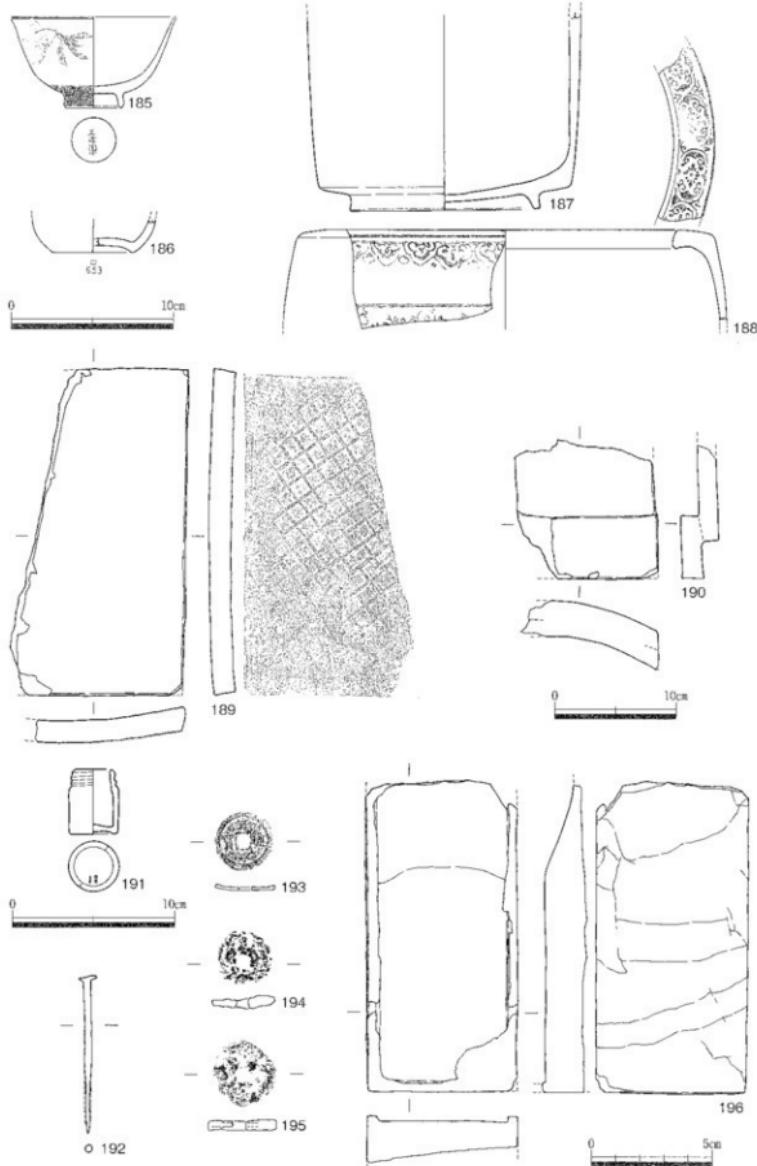
められる。

第1 遷槽面検出時出土遺物（第33図）

185～196はSB101およびSF101を除く第1遷槽面検出時出土遺物で、主にSF101からSF105の間における遷槽面で出土した。磁器碗・皿、白磁瓶、白磁火入れ、磁器焜爐、肥前系磁器碗・皿・青磁染付、軟質輪釉陶器鍋、施釉陶器皿・壺、備前系陶器大壺・擂鉢、土師質土器甕・人形、平瓦、石製硯、ガラス瓶、古錢、鐵釘などが認められる。

185は磁器碗で、正円子およびコバルトによる染付文様が施される。186は瀬戸・美濃系磁器瓶底部。底面

に製造番号とみられる数字が染付けられている。器面には被熱による土の熔着が認められる。187は白磁燭。188は染付文様をもつ磁器製焜爐。器面は被熱によって変色している。189は凸面に格子状のタタキ痕をもつ平瓦である。190は桟雁振瓦。胎土はにぶい橙色を呈し、凸面にヘラミガキ調整が認められる。191はガラス製の小瓶である。192は断面が円形となる鉄釘である。193～195は青銅製の錢貨。193は寛永通寶で、字体から新寛永と考えられる。194および195は鋳は著しく、文字の判読は不能である。196は石製品で硯。硯背が削り取られている。



第33図 第1造構面検出時出土遺物

第7節 調査地南部の整地層出土遺物

H層出土遺物（第34回）

H層の出土遺物についてはコンテナ1/2程度と少量だが、青花碗・皿、肥前系磁器碗・皿、肥前系陶器碗・皿、備前系陶器擂鉢・平鉢・瓶、瀬戸・美濃系陶器碗・皿、土師質土器皿・捏鉢・焼塙壺・土鍤、丸瓦などが認められる。上記遺物の所属時期は16世紀末～17世紀初を中心とし、17世紀中葉までのものが確認できる。

197は漳州窯系青花碗である。198は景德鎮窯系青花皿である。199は肥前系磁器皿。高台疊付に砂粒の焼着が認められる。大橋II-2・III期に相当する。200は肥前系磁器で白磁碗。201は瀬戸・美濃系陶器で、灰釉の折縁ソギ皿。大窯第4段階に相当する。202は肥前系陶器で灰釉皿。大橋I-2期に相当する。203は瀬戸・美濃系陶器で、鉄釉を施す天目茶碗。大窯第4段階に相当する。204は備前系陶器で大平鉢である。205・206は備前系陶器擂鉢。205の口縁形態から、乗岡近世1b期～2a期と考えられる。207は土師質土器皿である。208は輪積成形の焼塙壺。橙色の胎上に金雲母を含む。209は上師質土器捏鉢の口縁部である。210は有漆土鍤である。211は鐵津、炭化物および砂粒の焼着が認められる。212は鉄釘である。213は丸瓦。凹面にゴザ目状の圧痕が認められる。

G層出土遺物（第35～40回）

G層については粘質土および砂質土との板塗状の堆積を主とした整地であり、近隣の調査例から路床が推定できるが、他の整地と比べて遺物の出土量および内容において特筆する。遺物の出土量はコンテナ5箱で、青花碗、白磁皿、肥前系磁器碗・皿・小杯・青磁、肥前系陶器碗・皿・火入れ、瀬戸・美濃系陶器向付、上師質土器皿・捏鉢・擂鉢・熔鉢・足釜・鍋・土鍤、瓦質土器甕・茶釜、備前系陶器擂鉢・大甕・壺・瓶、鉄釘、鉄滓、銭貨、砥石、薪石、軒丸瓦・丸瓦などが認められ、当該整地直下で明瞭な生活痕が認められないことと対照的である。

とりわけ一定量出土した銭貨については、埋納された痕跡をもたず暫時、散在して整地内で確認されたもので、整地途上の間で撒かれた、あるいは置かれたものと理解される。他の遺物については周辺からの廃棄との判別が難しいが、明瞭な掘り込みがなく完品や伏せられた状態での出土例が認められることから、銭貨とあわせ部分的にせよ整地時に地鎮行為があったと推測できる。

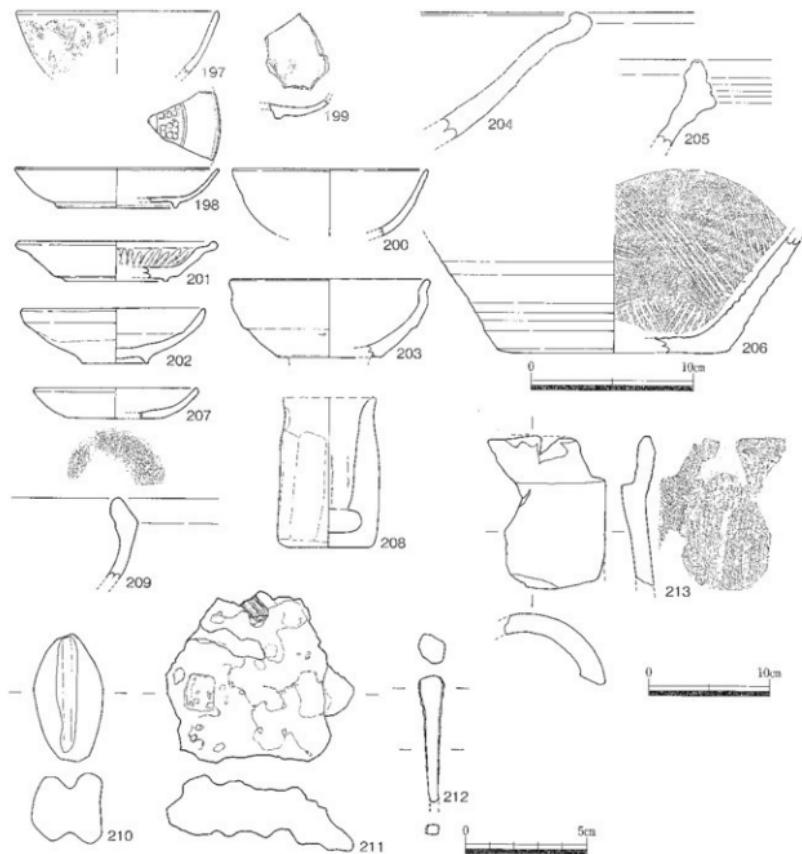
また当該整地の所属時期については、これらの出土遺物から17世紀後半と考えられ、調査地北部で確認した中堀の開削時期と重なる。当該整地は中堀石垣周囲では認められないが、双方の確認できた標高を比較す

ると、整地が現況での右堀大罐付近からその0.5m上位までを覆う水平方向での位置関係となり、中堀の開削に伴う盛上あるいは路面整備を示すと考えられる。

214は景德鎮窯系青花碗である。215・216・218は肥前系磁器碗。216は高台疊付に砂粒が付着する。大橋II期に相当する。218は高台内に方形枠で祥瑞の銘款をもつ。215ともに大橋III期に相当する。217は肥前系磁器で、高台内無釉の青磁碗。中野IV期に相当する。219は青花皿。型打成形による陽刻文をもち、白抜きに搔落とし技法が認められる。器面上には気泡および貰入が目立つ。上位の整地であるE層およびF層との接合資料で、当該整地層が以後の整地により削平・搅乱を受けたことを示す。220は還反の白磁皿である。221～223は肥前系磁器で、蛇ノ目釉剥ぎの青磁皿。221は高台無釉。222および223は釉剝ぎ部に鉄錆を喫布する。いずれも中野IV期に相当する。224・225は肥前系磁器皿。大橋II・III期に相当する。226は肥前系磁器で、高台内無釉の小杯。大橋II-2期に相当する。227は青磁鉢。内面に片切り彫りによる施文が認められる。貰入が著しい。

228～232は肥前系陶器碗。228は見込みに胎土目、229は高台疊付に砂目の焼着が認められる。前者は大橋I-2期、後者は大橋II期に相当する。230は京焼風陶器で、内外面に貰入が認められる。231は鉄釉を施すもので、高台無釉である。大橋II期に相当する。232は京焼風陶器で、口縁を切り落し小杯としている。233～245は肥前系陶器皿。233および234は胎土目の皿で、233は鉄絵を描く。235および236は灰釉皿。235は高台内のケズリが浅く、底部に同様糸切り痕が残る。233～236は大橋I期に相当する。237～241は砂目皿。237は鉄絵を施す蛇ノ目釉剥ぎの皿。238は鉄釉を施す。237とともに大橋III期に相当する。239・240は完形の溝縁皿で、ともに大橋II期。241・242は京焼風の胎土および釉剥落をもち、同一個体と推定される。口縁は輪花となる。243～245は大皿。243・244は内面に刷毛目文様を施すもので、244は象嵌が認められる。ともに大橋III期に相当する。245は二彩手で、大橋II期となる。246は瀬戸・美濃系陶器向付。鉄釉を施した後、搔落としにより施文し長石釉を掛けた鼠志野である。247は肥前系陶器火入で、口縁上端には敲打痕が認められる。248は鉄絵を施す蓋の摘み部。249～254は備前系陶器。249は大平鉢。外側に火葬、内側に黄ゴマが掛かり、口縁は大きく歪む。250・251は擂鉢で、口縁の形態および擂目の密度から乗岡近世2b期に相当する。252は壺底部。肩部に櫛引き波状文を施し、黄ゴマが掛かる。253は瓶底部。254は壺口縁部である。

255～281は上師質土器皿。255・256は口径7cmとなる小皿。255は灰白色を呈する精良な胎土である。256



第34図 H層出土遺物

の底部切り離しは回転糸切りによる。257は底部切り離しが回転ヘラ切りのもので、佐藤皿A I形式に相当する。胎土は橙色で、口径7.8cmを測る。258～262は胎土に赤褐色粒を含み、内面全体の付根で見込みの外縁が窪むもの。佐藤皿A III形式に似た特徴をもつが、法量および口縁の形態が一様でない。258は口径10.8cmを測り、深手の体部で口縁端部が尖る。器面の摩滅が著しい。259～262は底部に回転糸切り痕を残すものの。259は口径9.5cmを測るが、器形の歪みが大きい。厚い器壁で尖った口縁をもつ。260は口径10cmで、尖った口縁をもつ。261・262は口径8.7cmで、体部の中位で折れ外反あるいは内弯気味になる。263～266は底部の切り離しが回転糸切りで、短く内弯する口縁と見込

みが窪む特徴をもつもので、佐藤皿VI形式に該当する。口径は9.1～9.9cmを測る。267～281は灰白色系の精良な胎土を用いるもので、見込みに不定方向の仕上げナデ、底部に板目状压痕の特徴をもつもので佐藤皿V形式および皿X形式に該当する。口径は267～278の皿V形式では8.5cm～11.6cm、279～281の皿X形式では12.8cm～14cmを測る。底部の切り離しについては、判明しうるものはすべて回転糸切り法である。282は瓦質土器茶釜である。体部下半は煤化、耳貼付け部に工具の圧痕が認められる。このほかに外面調整はほとんど見られず、内面調整はハケ後ナデ調整が施されている。283は土師質土器で、把手付鍋。胎土は橙色で金雲母を含む。外面はヘラケズリおよびナデ調整で

仕上げ、内面はハケ調整を残す。284・285は土師質土器鉢、浅黄色の胎土で、金雲母および赤褐色粒を含む。286・287は土師質土器焰格。286は深手で、体部外間に横方向の指オサエ、内面にハケ調整を施し、口縁は回転ナデで仕上げる。287の口縁端部が断面三角形で、胎土には角閃石が認められる。288は土師質土器鉢。短く肥厚した口縁および深手の体部をもつ。内面および外面上にハケ調整が認められる。289は土鉢。白色系の精良な胎土を用いた型成形のもの。290は土師質土器鉢で、三足と推定される脚をもつ。貼付の脚で、貼付接合部にカキ目が認められる。胎土は暗オリーブ色を呈し、角閃石を含む。内外面上にハケおよびナデ調整が認められる。291は瓦質の脚付鉢。内側に突き出す口縁にやや浅い体部で、三足と推定される脚および脚内側に焼成前の穿孔をもつ。外面上はヘラミガキ調整、内面は回転ナデで仕上げる。

292・293は丸瓦および軒平瓦。292は瓦当周縁の幅が狭く、比較的長い尾の巴文と小さな珠文をもつ。294～298は丸瓦。294～297は凸面にヘラミガキおよびナデ調整、凹面には布目痕を残す。295および297の凹面にはコビキ痕が認められる。298は瓦質の焼成で、凹面にはコビキ痕およびゴザ目、吊り紐痕が認められる。

299～302は青銅製煙管。299は先端部が欠損している。300・301は雁首。ともに、補強帯はなく首部を垂直に曲げて火皿を接着している。301の管には棒状の炭化物が詰まっている。302は吸口。吸口部を覆い肩部が接着されている。303・304は青銅製の刀装具。303は小柄の柄部。薄い金属板を折り曲げて、棟側で接着している。304は青銅製の鐔。耳に4箇所の抉りが付く形で、茎およびその両脇に笄と小柄の透かし孔をもつ。象嵌などの装飾は認められない。305～307は石製品。305・306は砥石。305は安山岩系の石材質で、306は泥岩である。307は那智黒の轍石。308は円盤状を呈する土製ないし石製品。温石と考えられる。309～314は鉄釘。309は頭巻釘。他は頭部あるいは先端部が欠損している。315～332は青銅製の錢貨。当該整地より18枚が出土した。内訳は宋錢が5枚、寛永通寶が9枚、判読不明が4枚である。315～318は永楽通寶。319～327は寛永通寶で、字体からすべて明暦2年(1658)までの铸造とされる古寛永と考えられる。328は一部判読不能だが、宋錢で□宋通寶と読める。331・332は厚みから、それぞれ2枚重ねで鑄付いている可能性がある。

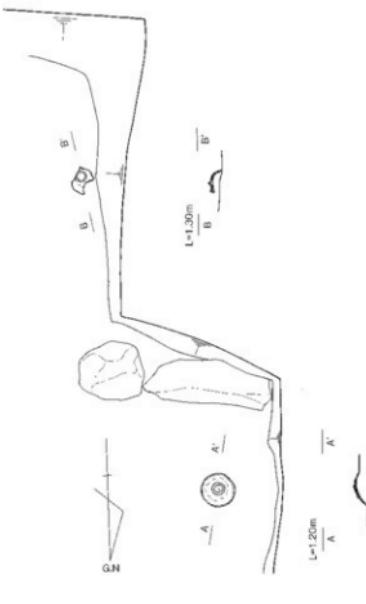
F層出土遺物（第41図）

既述のとおりF層はSB101付近のみで認められ、SB101下層遺構であるSK206～213を被覆する整地である。遺物の出土量はコンテナ2箱で、青花皿、肥前

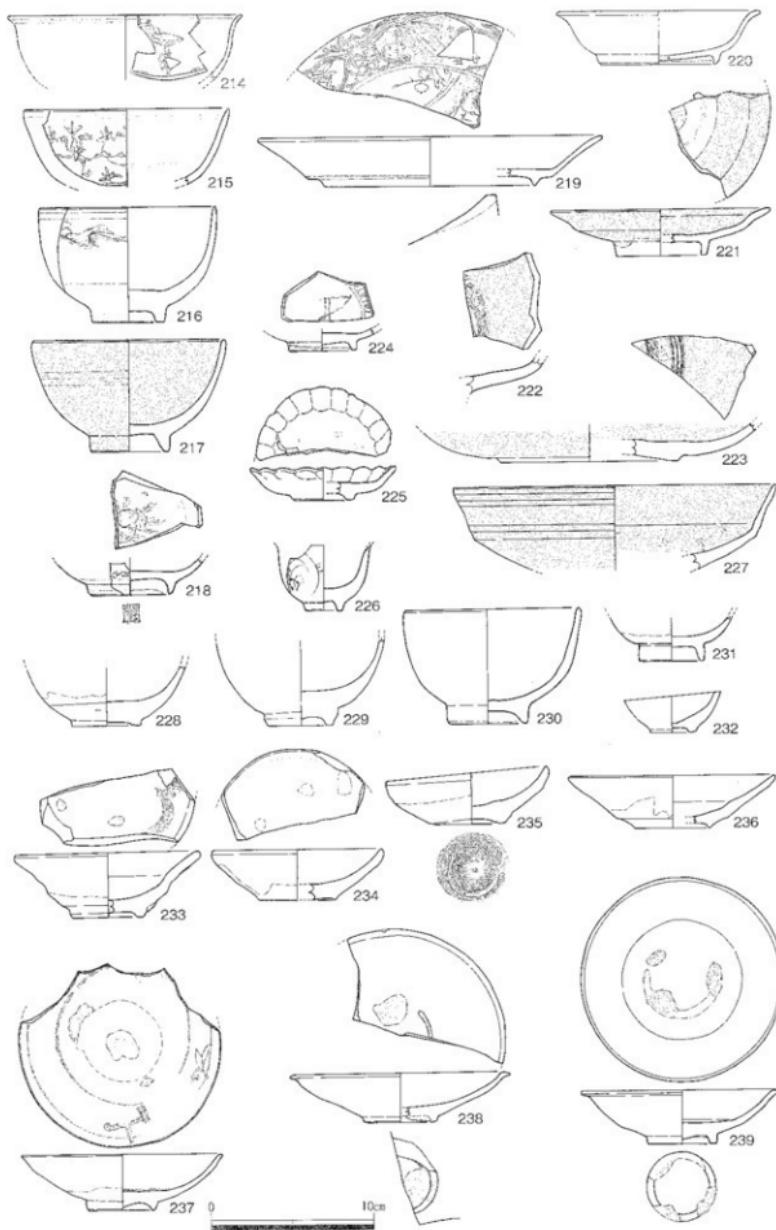
系陶器碗・皿・小杯、肥前系磁器碗・皿・紅皿・蓋・青磁・白磁、瀬戸・美濃系陶器細片、備前系陶器灯明皿・擂鉢・大甕・瓶、施釉陶器蓋、軟質施釉陶器火入れ、土師質土器皿・焰格・瓦細片・焼塙蓋・軒丸瓦、錢貨、鉄釘、石製品などが認められる。これら出土遺物の大半は17世紀後半を中心としたもので、下部G層からの混入品と推定される。当該整地の所属については、19世紀中葉まで下ると考えられる。

333は漳州窯系青花で、大皿口縁部。貫入が著しい。334は肥前系磁器小杯である。335は肥前系磁器で、井桁文の碗。見込みに蛇目目輪剥ぎを施す。中野V-4期に相当する。336は肥前系磁器碗。大橋Ⅲ期に相当する。337は肥前系磁器で、型打による陽刻の捺文をもつ染付皿。高台に砂粒付着が認められる。大橋Ⅱ期に相当する。E層と接合関係が認められる。338は肥前系磁器で、蛇目目輪剥ぎの青磁皿。中野Ⅳ期に相当する。339は肥前系磁器で、ヘラ彫り文をもつ青磁大皿。

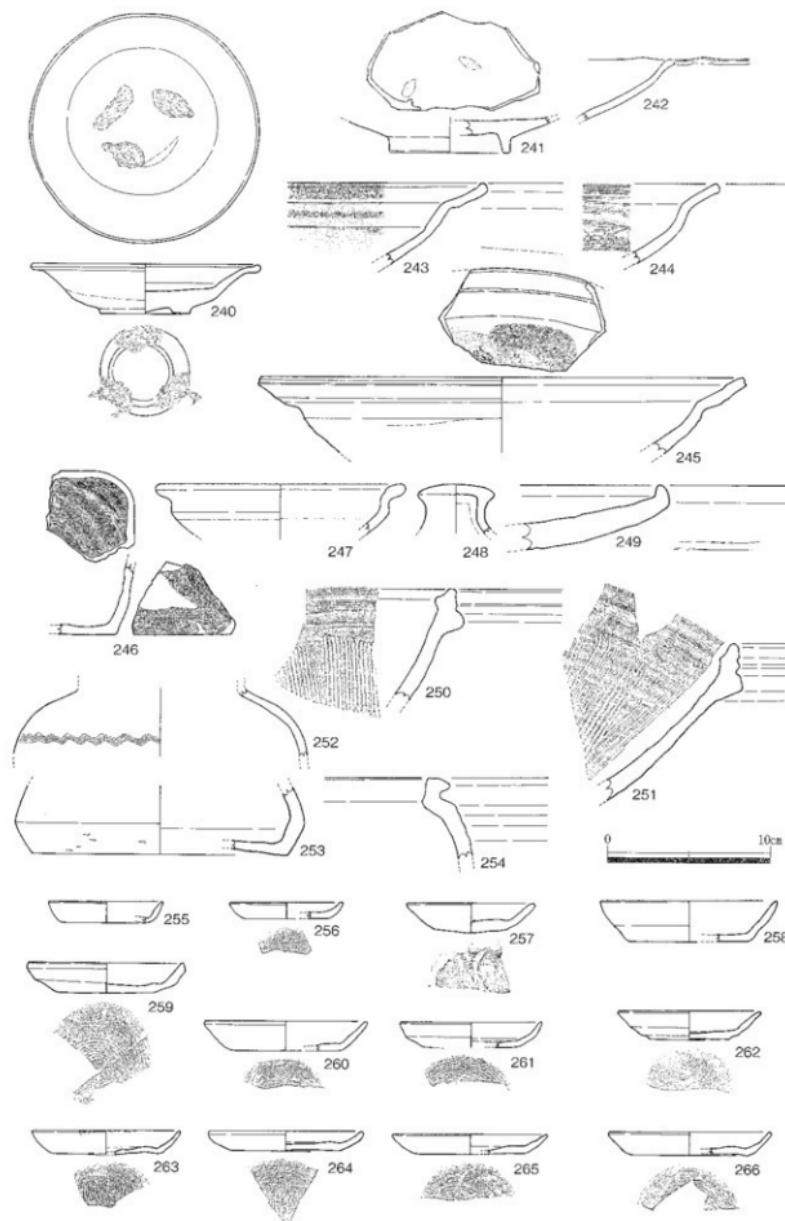
340は肥前系陶器碗。341～344は肥前系陶器皿。341は胎土の皿で、大橋1期に相当する。342・343は鉄絵皿。大橋I・II期に相当する。344は溝縁皿で、大橋II期に相当する。345・346は備前系陶器灯明皿。い



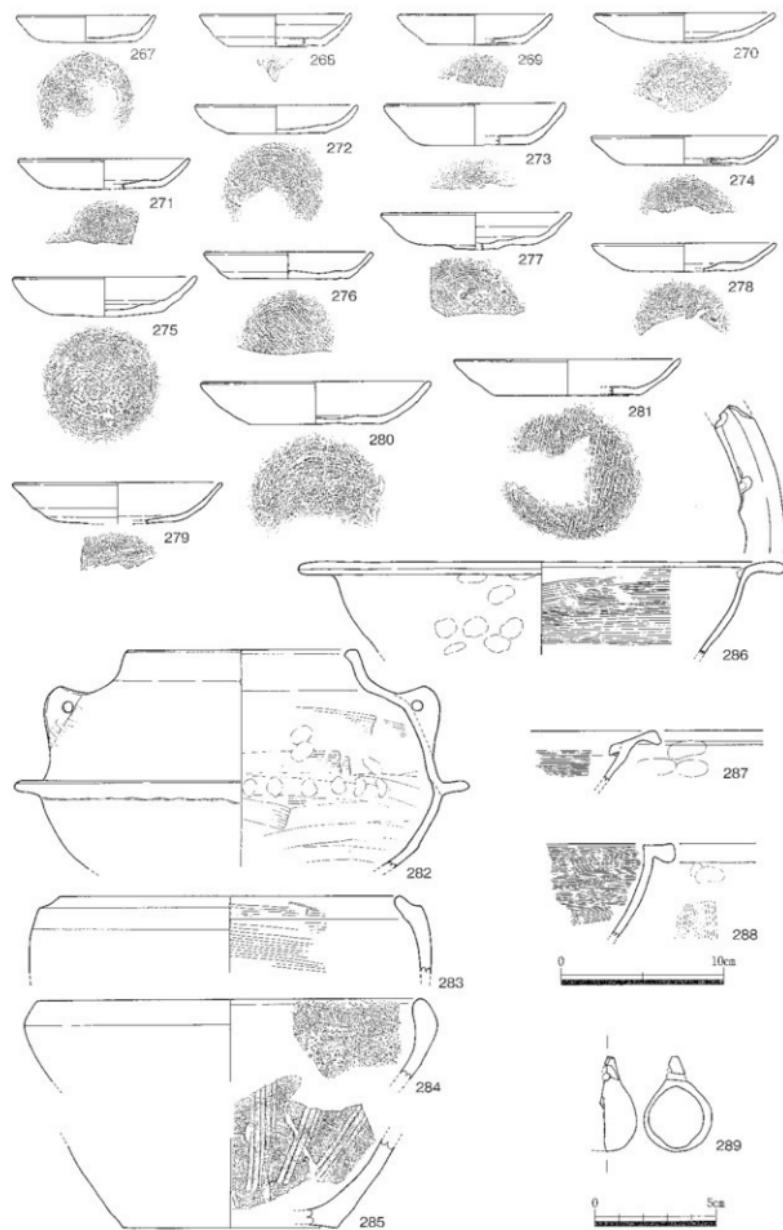
第35図 G層遺物出土状況 (1/20)



第36図 G層出土遺物 1

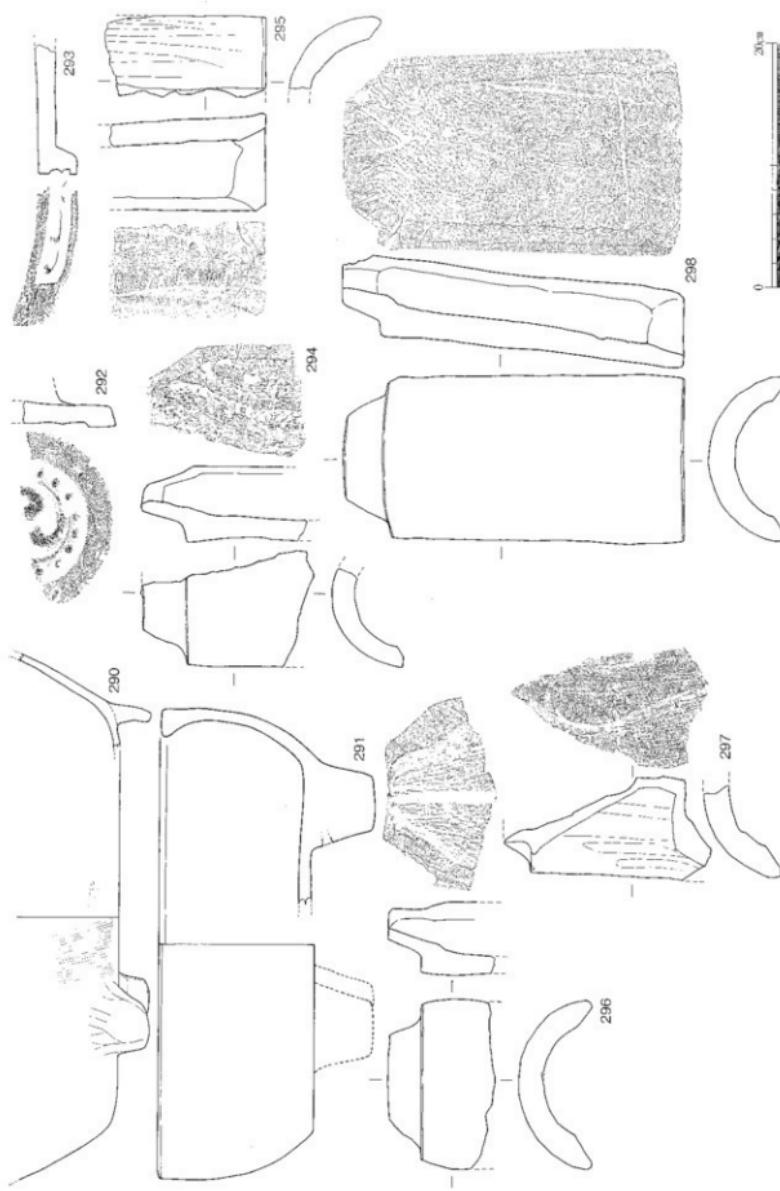


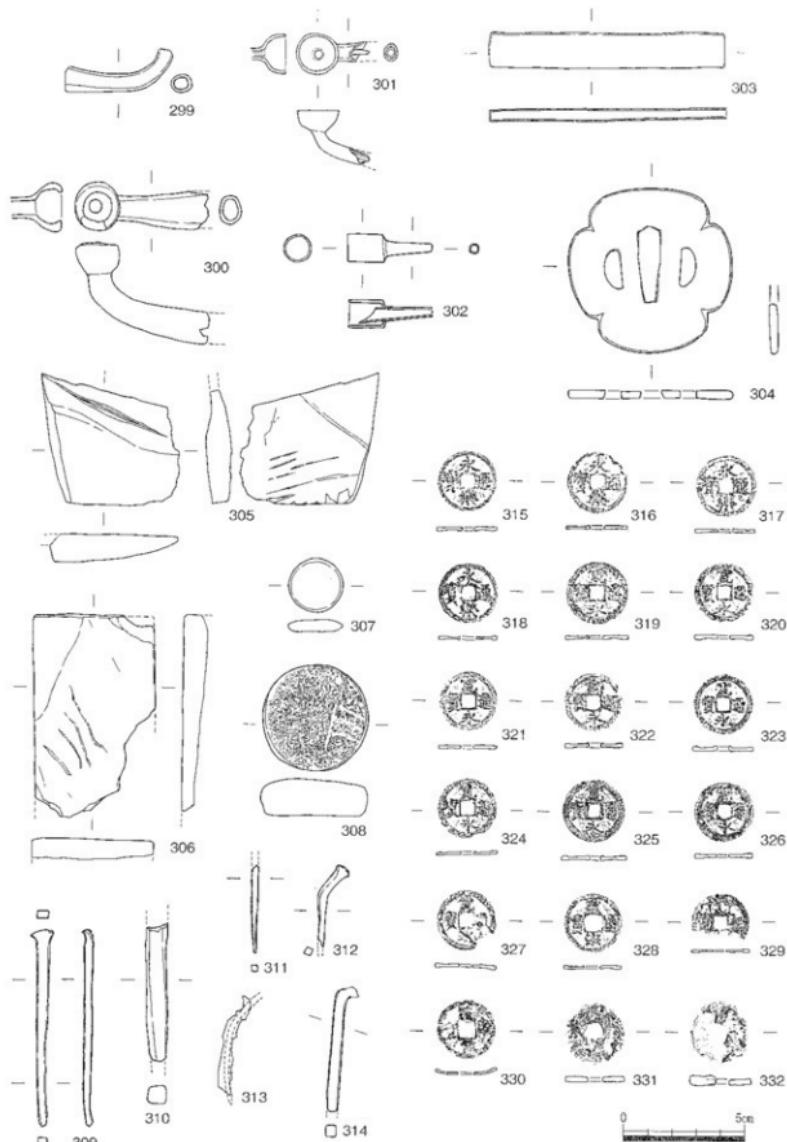
第37図 G層出土遺物2



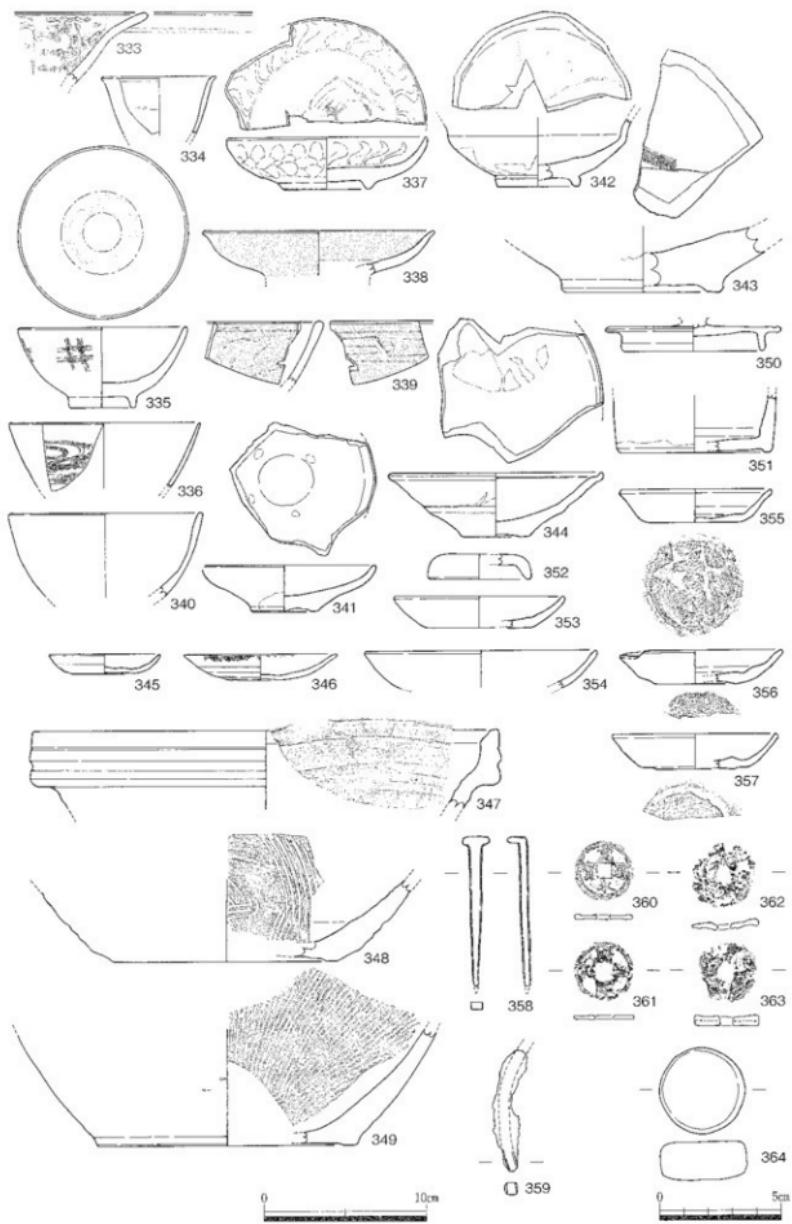
第38図 G層出土遺物 3

第39圖 G層出土遺物4

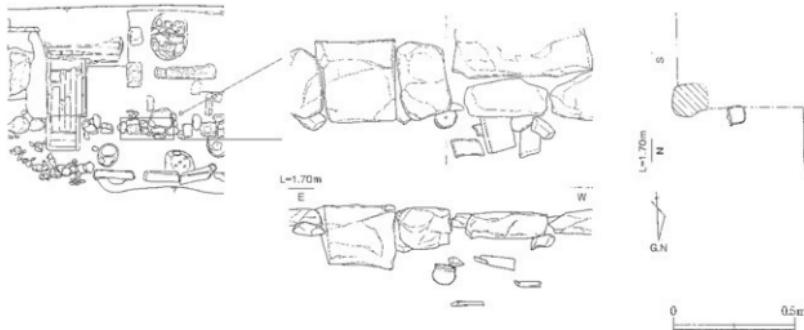




第40図 G層出土遺物 5



第41図 F層出土遺物



第42図 E層遺物出土上状況

ずれも内面に塗土を施す。347～349は備前系陶器擂鉢。347は口縁部の形態から、乗岡近世2-a期に相当する。349は体部外面に回転ヘラケズリ後塗土を施し、乗岡近世3-4期に相当する。350は黄橙色を呈する焼締陶器の蓋。351は軟質施釉陶器の火入である。

352は土師質土器で、輪積成形の焼塙壺。353～357は土師質土器皿。353・354は器形および胎土から佐藤皿V形式およびX形式に相当する。355～357は底部に回転糸切り痕を留め、器形から佐藤皿AⅢ形式に相当する。

358・359は鉄釘。360～363は青銅製鏡貨。360は古窓水通寶。他は判読不明だが、363は2枚重なり銷付く。364は円盤状の石製品。308と同様、温石と考えられる。

E層出土遺物（第42～44図）

既述のとおりE層はSB101, SF101, SU101の基盤となる整地層である。遺物の出土量はコンテナ3箱で、青花皿、肥前系陶器碗・皿、肥前系磁器碗・皿・小杯・蓋、瀬戸・美濃系陶器碗・鉢、瀬戸・美濃系磁器碗、京・信楽系陶器灯明皿・甕、備前系陶器擂鉢・大平鉢・サヤ鉢・灯明皿・瓶、軟質施釉陶器急須、土師質土器皿・焜炉、軒丸・軒平・丸・棟瓦、瓦質土器羽釜、砥石などが認められる。出土遺物には17世紀後半のものが一定認められ、他は19世紀後半のものが占める。またSB101の出入り口に相当するSF101の基盤で、埋納遺物（375・376）を確認した。掘り込みが認められず、当該整地途上で置かれたと理解される。同形の備前小壺は、高松城天守地下1階の床面で埋納された状態で見つかっており、天主建物解体後、明治35年（1902）に建設される玉藻廟の地鎮遺構と考えられ、神社施設ならびに建物の地鎮に閑した類例となる。

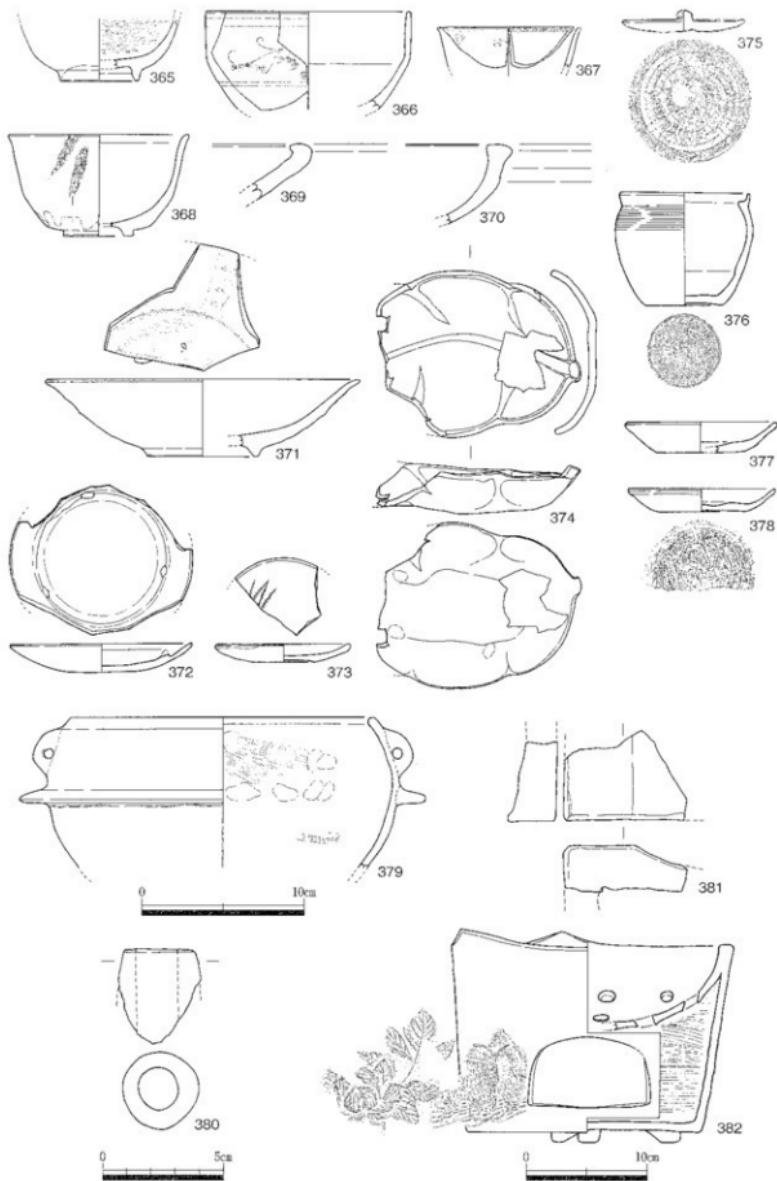
365は肥前系磁器で、内面に鉄釉を施す掛け分けの碗。大橋II-2期に相当する。366は肥前系磁器で天目碗。

大橋II期に相当する。367は瀬戸・美濃系磁器で端反碗である。368・371は肥前系陶器で、鉄絵を施す碗および皿。大橋II期に相当する。369は備前系陶器大平鉢である。370は瀬戸・美濃系陶器皿である。372は備前系陶器灯明皿。受皿で内外面に塗土を施し、底部には火拂痕が見られる。373は京・信楽系陶器で、櫛描文をもつ灯明皿。374は施釉陶器で型打の変形皿。内外面を白色および透明色の釉を施す。底部には目痕が残る。375・376は備前系陶器蓋および蓋。蓋付で確認したが、内容物は認められなかった。ともに外面に塗土を施す。376は体部上半にカキ目、底部に刻印をもつ。

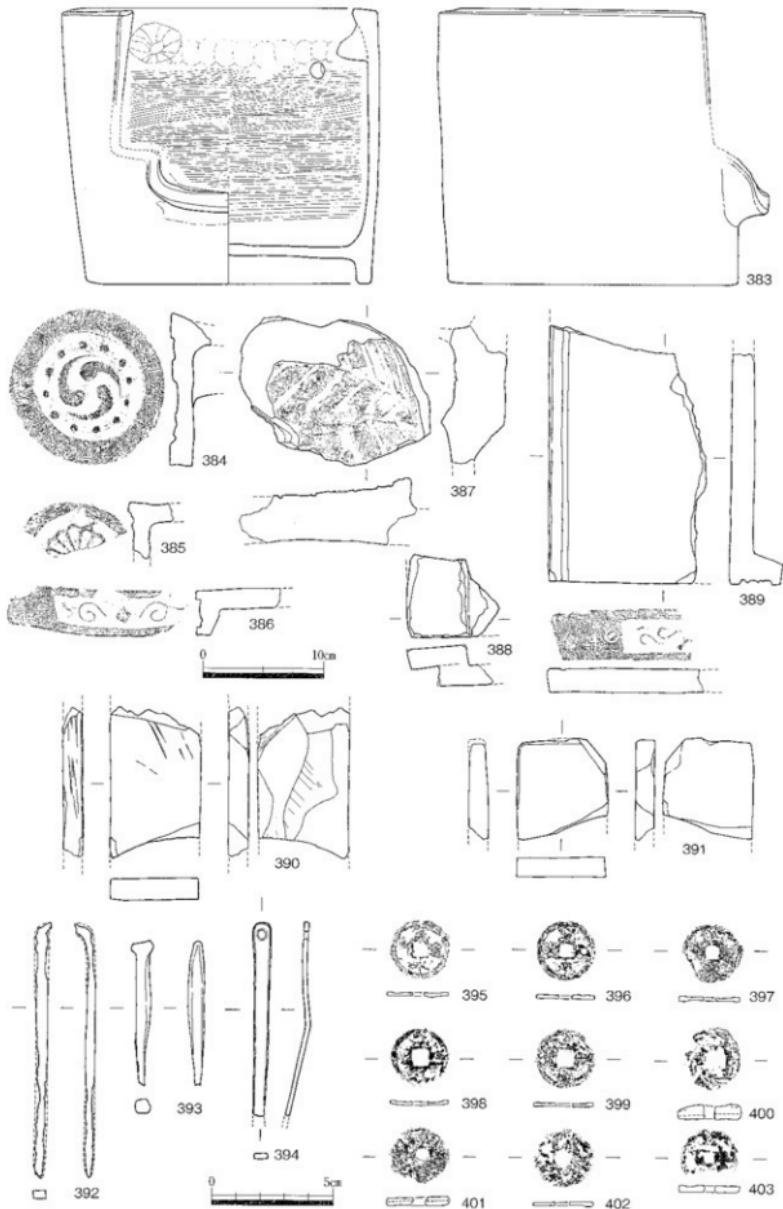
377・378は土師質土器皿。ともに灰白色の精良な胎土をもち、口径は9cmを測る。器形から佐藤皿V形式に該当する。379は瓦質土器羽釜。外面は上半部未調整で、下半は媒化している。内面にハケおよびナデ調整が認められる。380は備前系陶器で、管状土錐。自然釉が掛かる。381は土師質製の甕。正面側にヘラミガキを施す。胎土に角閃石を含む。382・383は土師質製の焜炉。382は型成形で陽刻文をもつ。383は開口部が口線上縁から切り込み、下縁に突出部がつく。外面は赤土により化粧し、ヘラミガキを施す。口縁内側に受部となる突起が付き、その下方に円孔が認められる。

384は軒丸瓦。巴文が左方向に回転する。385は菊丸瓦である。386は軒平瓦。中心飾りは宝珠文で、瓦当面にキラコを塗布する。387は鬼瓦の踏部である。388は棟瓦である。389は土堀瓦で瓦当面に刻印をもつ。凸面は未調整、凹面は被熟している。

390・391は泥岩製の仕上げ砥石である。392・393は鉄釘である。394は青銅製金具である。395～403は青銅製鏡貨。395・396は寛永通寶。396は古窓水である。397～403は判読不明で、400・401は複数枚が重なったものとみられる。



第43圖 E層出土遺物 I



第44図 E層出土遺物 2

第4章 総括

第1節 遺構変遷（第45図）

以下、当調査地における時期的変遷ならびに各期における遺構の構成について整理する。

I期（17世紀初頭）

調査地南部においてのみ確認した第3遺構面に属する遺構である。南北方向の溝SD302の東側で、柱穴群、土坑、溝状遺構など生活痕が密に残るが、その西側では希薄となる。柱穴群についてはSD302ほかSD301、SX364・380～382の配置からSB301を復元した。この建物の東面には集石遺構ならびに土器埋納遺構が伴う。こうした遺構群で構成される当該期の地割はN-15°-Eおよびこれに直交し、かなり東に傾く。この点については大堀2007bで指摘されるように海岸部の地形を反映したものと理解でき以降の地割と比較すると、築城当初にあってはその傾向がより強いと考えられる。所属時期については、在地土器が高松城縦年様相1、肥前系陶器大橋I-2期、備前系陶器糞同1b-c期であり、第3遺構面を被覆する整地H層との関係から17世紀初頭の遺構群と考えられる。出土遺物については質・量とも突出したのではなく、むしろ希薄である。また1×3間程度の掘立柱建物を復元したが、当該遺構面において丸・平瓦が少量だが認められる。当該遺構面の廃絶についてはSX364など焼上・炭化層を伴う遺構が散見されることから、火災が関係した可能性を考えられる。

II期（17世紀後半～19世紀後半）

I期との間に空白期（17世紀中葉）が存在する。調査地南部で確認した整地H層が肥前系陶器大橋II-2・III期、備前系陶器糞同2a期の遺物を包含し該当するが、遺構を確認できない。この点については、当地点に中堀が開削され大手として整備される以前の段階にあって、次節の絵地図で見るようにその位置関係から当地点が街路に比定されることと関連される。

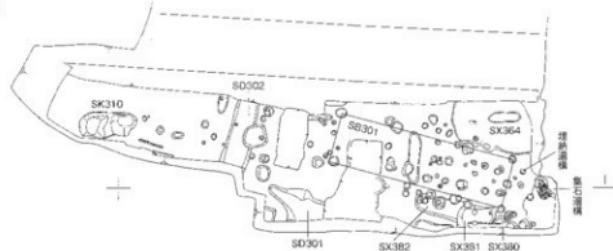
II期の主要遺構に中堀が挙げられるが、遺物では調査地南部で確認した整地G層出土品により、時期ならばにその性格について窺えることが多い。G層については当地点で最も丁寧な整地として観察され、整地の過程において周辺からの廃棄物とともに錢貨など地鎮に供したとみられる遺物を包含する。所属時期は在地土器が高松城縦年様相4、肥前系陶器大橋III期・中野IV期、備前系陶器糞同2b期までが認められ、中堀開削時期とされる17世紀後半に相当する。直接、中堀の開削時期を確認するような調査を行ってはいないが、中堀石垣上端とG層の標高との関係から、現時点で石垣構築の時期をG層の所属時期としてよいだろう。

中堀の廃棄時期については、ヘドロ状の泥炭化層に19世紀後半の遺物を包含しており、この頃には堀としての機能を失っていたと考えられる。その上位は入念に整地されており、これにより別途土地利用されたことが分かる。その他、調査地南部で確認された遺構については、溝状遺構（SD201・202）、土坑（SK201・202・204・205・214）が検出面ならびに出土遺物からG層と同様、17世紀後半に位置付けられるものの、遺構の内容と遺物量から当該時期の生活域を示すものとは考え難い。また南端に並ぶ礎石建物の基礎と考えられるSK206～213については、整地F層に被覆されることから19世紀中葉以前の所産と推定されるが、Ⅲ期の礎石建物SB101との関係や石材に豆矢の痕を留めるなど後出する要素が多い。ただし、Ⅲ期SB101とプランが合致せず上記の礎石基礎のうちで先行するSK210については、性格の異なる構造物の基礎である可能性があり、中堀西面から延伸した位置関係にあることからその関連が留意される。Ⅱ期の地割については、中堀を含めN-5°-Eおよびこれに直交する主輪にはほぼ統一される。やや東傾するが内堀および以西の中堀に近い方位となり、Ⅲ期においても基本的に踏襲される。

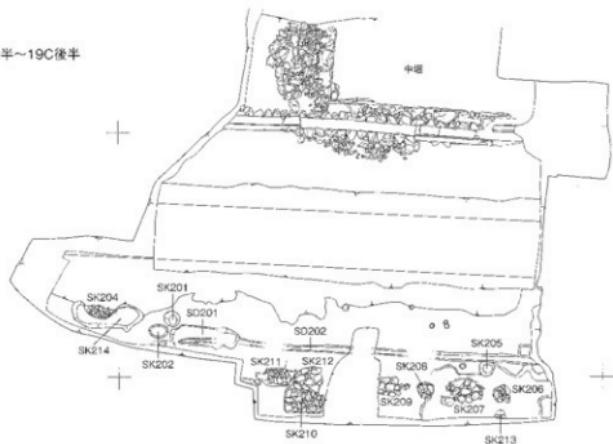
III期（19世紀後半～20世紀中葉）

調査地北部では堀埋め立ての整地、調査地南部では整地E層を基盤に構築された遺構面で、ともに19世紀後半を上限としている。下限については、南部が戦災で廃絶するのに対し、北部では被熱層など直接的な戦災痕を残さないことから戦後に櫻塗された遺構が主体となるものと考えられる。調査地北部では石登の路SF102、建物基礎SF104、戦災処理遺構と考えられるSX101が認められる。調査地南部では、礎石建物SB101およびその基壇SF101が主要遺構であり、SK108ならびにSU101が戦災遺物を包含した遺構となる。SB101-SF101については、出土遺物に加えて絵地図との位置関係から神社施設と考えられる。礎石建ちの瓦葺となる建物跡であることから、本殿・拜殿以外の施設と推定されるが、地下遺構SF101を伴い特異である。路肩SF103・105については、戦後の道路跡と考えられるがSF103の下層に石組み溝が存在することから、堀埋め立て直後から側溝が存在したと考えられる。またSF103の主輪については中堀西面付近でN-92°-EからN-95°-Eに屈曲し、以西の高松城に関わる区画が当地点で東傾することを示唆する。いずれにしても、I期後の調査地北部および南部の遺構のあり方から、この道路は大きく位置を変えず踏襲されてきた結果として理解される。

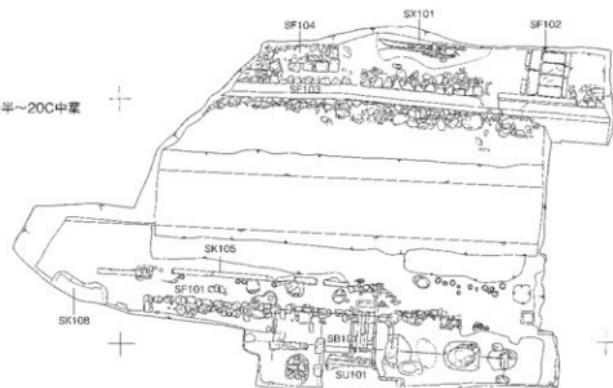
■Ⅰ期
17C初



■Ⅱ期
17C後半～19C後半



■Ⅲ期
19C後半～20C中葉



第45図 遺構変遷図

第2節 史料との整合性（第46図）

以下、前節での遺構変遷と絵地図等の史料を比較し、整合性を検討する。

Ⅰ期、生駒時代初期の当地点に関する絵地図等史料は確認できないが、生駒時代末期の絵地図と調査成果とを比較すると、Ⅱ期以降では後述のとおり街路周辺に相当するのにに対し、当該期では居住域に相当するうえに地割方向もⅡ期以降と異なることが分かる。程度については不詳だが、城域中盤付近の景観が次期とは異なっていたことが推測される。

Ⅱ期について、中堀が開削される前後の時期を示すものに絵地図1～3がある。絵地図1・2は生駒時代末期ならびに松平時代初期のもので中堀開削以前に相当する。絵地図3は享保年間のもので、中堀が開削され東ノ丸など新曲輪が認められる。中堀の開削された位置については、絵地図1の「いおのたな」と記された町屋とするのが定説であるが、これによれば調査地点はその南端の「本町」と記された付近に相当すると考えられる。調査成果において、これらの位置関係を明示する遺構は認められないが調査地南部が当該期に居住域でなかったと考えられることから、東西方向の街路に面した付近であったと考えてよいだろう。

中堀の開削後になる絵地図3では、新造された東ノ丸の南側で新大手へと土塁橋を通じ城發する下馬所として描かれる。下馬所の北は土橋で新造された東ノ丸と繋がる。南側は御用屋敷とされた武家地で、その東隣、中堀の対面側は町屋となっている。下馬所の南を通る東西方向の街路は、絵地図1・2では西の堀端から東の本町まで直進し町屋を1軒分過ぎた先でT字あるいはクランクしているが、絵地図3では堀端の武家地が南に寄る。これについては「小神野夜話」にある享保3年（1718）の高松大火後、御城火除けのために屋敷並びを中堀から5間南に寄せて腰丸で再建したという記述を反映したものと理解される。一方、町屋の街路はクランクしていたが、絵地図3では直線になっている。弘化年間とされる絵地図4では、再びクランクしており町屋の再編に因縁した現象と考えられる。下馬所の対面側になる武家地についても、絵地図4では町屋が統合され御殿となっており、東西の街路も堀端の武家地から斜行して城門に至るようになっている。

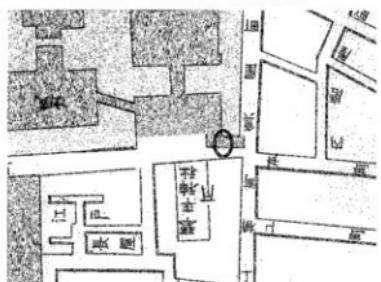
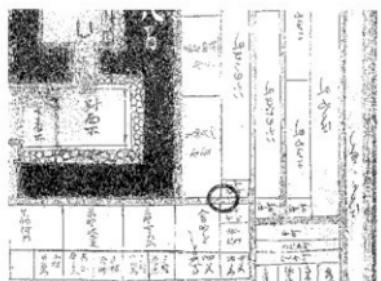
このように中堀の東西において、武家地と町屋が接する構成となっているが、絵地図2の段階では町屋と武家地を分け隔つように木柵が描かれている。その後、曲輪が増設され新たに大手となる絵地図3では、長大な腰掛施設の南部に番所ならびに長屋門のような建物が描かれるようになっている。さらに絵地図4の段階では、この箇所が2重に遮断する形のように描かれており、隨時戒戒になっていた様子が読み取れる。

また、Ⅲ期においては礎石基礎が連続して確認されており、こうした施設との関連も念頭に入れる必要があるが、現状で確認できる位置関係や平面形態はこのような遮断施設のかたちにはならない。一方で、この礎石建物についてはⅢ期以降に明確となる神社施設との関連が強い。絵地図4において、東西方向の街路に北面する「若宮」と記された敷地が認められる。以降の絵地図5・7では「琴平神社」と記され、東西の街路を挟み中堀の対面に神社があったことが分かる。このことから、調査地南部で確認したⅢ期の礎石基礎およびⅢ期の遺構については神社に關した遺構群と判断される。

中堀の開削時期については、「小神野夜話」、「英公実録」、「三代物語・付録」（註1）などの記述から、東ノ丸・北ノ丸の新曲輪造営および、これに続く新大手、御殿建設といった寛文・延宝年間の大改修のなかで理解でき、寛文11年（1671）に東ノ丸を造り、新たに開削した中堀の土を用いた埋め立てによって北ノ丸を築造した、とするのが定説である。その完成は、北ノ丸に建てられた月見櫓の上戸板に「延宝四年拾二月□□」の墨書きならびに「延宝四年辰年二月二十二日北の丸矢倉棟上」の小神野夜話の記述（註2）により窺われる。調査成果で推定される中堀石垣の構築時期もこれに矛盾しない。ただし、SX101出土の「寛文四年」の刻書土器については、出土状況において中堀との直接関連を示さないものの、「英公実録」に記された高松城の城邑修築が許された年号と合致している点では留意しておく必要があろう。

中堀の埋没時期については、昭和6年（1931）までに随時、埋め戻され別途、用地利用がすすんだ状況を絵地図などから知ることができる。調査地付近については、明治45年（1912）の絵地図5および大正9年（1920）の絵地図6によって埋め戻された状況が認められる。絵地図6では、下馬所に圓路および馬屋をもった腰掛のような施設と隣接して製材所になっており、明治末期から大正初期に姿を消したことが分かる。調査では19世紀後半の遺物を包含したヘドロ状の堆積が認められ、この時期より堀の維持管理が遅ったことが窺え、その上位で認められる入念な埋め立てについても土地利用の経過のなかで理解できる。その後も松平期に開削された東側中堀の埋め立ては続き、戦後には家庭裁判所から城内中学校へ変遷していく状況が絵地図で読み取られるが、調査地南部がこうした開発から逃れており、戦災直後の状況を保っていたことが分かる。

以上のように位置関係については、検出した中堀石垣および調査地を南北に分けた旧道路を定点とし、概ね各期の絵地図と照合することが可能といえる。また調査で確認した各遺構の時期についても、史料で認められる変遷ならびに年代観のなかで理解できる。



第46図 各期における絵地図（絵地図2以外は上が北、丸囲みは調査地の比定地点）

第3章 歴史的評価と課題（第47図）

以上の整理および検討を踏まえて、調査成果の歴史的な評価と今後の課題について述べる。

上記のとおり、調査地は松平初期に新造された高松城の中枢部へ繋がる大手前あたり、以降大改修のなかった高松城にとって重要な位置を占める。その一角で入隅を保った中堀石垣を確認できたことは、現在は失われた新造曲輪の位置関係を明確にするものであり、その延長部分である昭和59年国追加指定の東ノ丸石垣および復元整備された県民ホール、県立ミュージアムの石垣とともに、往時の曲輪ならびに武家地と町屋とを隔てた堀の姿を再現できるものとして文化的に高い価値を有する。

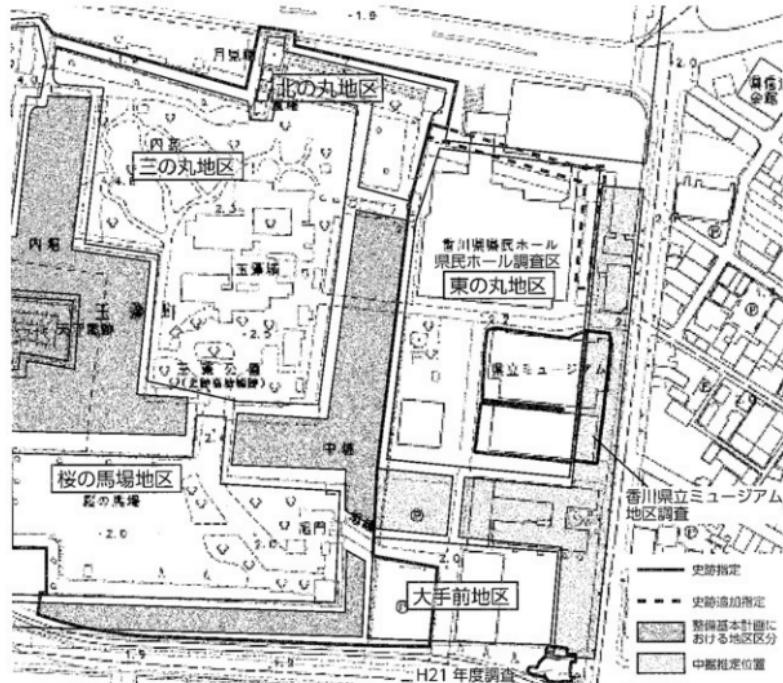
調査地となった下馬所については大手前地区として、既に史跡高松城跡保存整備基本計画（平成7年度策定、平成22年度改定）において、史跡範囲に隣接した地区として追加指定および保存活用を図ることを指針としている。当面の課題としては城内中学校跡地利用があり、この指針に沿った対応が求められよう。当該大手前地区については、堀のほか大手口に架かる太

鼓橋、東ノ丸に繋がる土橋、腰掛、武家地と町屋とを隔てる城門施設（一ノ門御門）が興張り図において認められ、そのほかの下馬所に関わる埋没した施設とともに発掘調査による確認が必要となる。

また、南側の中堀掘堀から今回確認した中堀南端を通り抜ける位置において、都市計画道路高松海岸線が計画されている。同路線については、これまで発掘調査により中堀掘堀の武家地に関する成果を蓄積してきた経緯があるが、上記の整備基本計画では大手前地区に南接することから、発掘調査による内容の確認にあわせて整備範囲と路線建設との綿密な調整が求められる。

(註1)「三代物語・付録」の内容は、香川 1989『香川県史 第三巻 近世1』を参考にした。

(註2)月見櫓についての記述は、松平公益会 1964『高松藩主 松平頼重傳』による。



第47図 整備基本計画と中堀石垣

引用文献・主要参考文献

- 大船和則 1999『史跡高松城跡（地久櫓跡・三ノ丸跡）史跡高松城跡
整備に伴う埋蔵文化財調査報告書』高松市教育委員会
- 大船和則 1999『「高松平公益会事務所改築に伴う埋蔵文化財発掘調査
報告書 高松城跡（作事九）」高松市教育委員会・財团法人松平公益
会』
- 大船和則 2002『香川県弁護士会会館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
報告書 高松城跡（松平大膳家中原敷跡）』高松市教育委員会・香川県
弁護士会
- 大船和則 2004『高松城跡（外堀、西内町、共同住宅建設）』「高松市
内遺跡発掘調査報告書－平成15年度因幡補助事業－」高松市教育委
員会
- 大船和則 2006『「高松城跡（外堀、兵庫町）」「高松市内遺跡発掘調査
報告書－平成17年度因幡補助事業－』高松市教育委員会
- 大船和則 2007a『史跡高松城跡整備報告書 第1番 銀山石垣調査・保存
整備工事報告書』高松市・高松市教育委員会
- 大船和則 2007b『「高松城の発掘成果から」』「四國村落研究会シンポジ
ウム 潟町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－」四國村落遺跡
研究会
- 大船和則 2008a『史跡高松城跡整備報告書 第2番 石垣基礎調査報告書』
高松市・高松市教育委員会
- 大船和則 2008b『史跡高松城跡整備報告書 第3番 玉藻廻解体・記録保
存調査報告書』高松市・高松市教育委員会
- 小川翼 2002『片原町遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報 平成12年度』
香川県教育委員会
- 小川翼 2004『新ヨンアンビル別棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報
告書高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）』高松市教育委員会・四電ビジネ
ス株式会社
- 小川翼 2005『共同住宅建設（コトデン片原町パークイン跡）』に伴
う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡（東町奉行所跡）』高松市教育
委員会・高松琴平電気鉄道株式会社
- 小川翼 2006a『高松城跡（寿町二丁目）』『高松市内遺跡発掘調査報告
書－平成17年度因幡補助事業－』高松市教育委員会
- 小川翼 2006b『丸亀町酒店街A街区第一種市街地再開発事業に係る施
設駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡（復跡）』高
松市教育委員会・高松市丸亀町酒店街A街区市街地再開発組合
- 小川翼 2007『寿町二丁目テナントビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調
査報告書 高松城跡（寿町二丁目地区）』
- 小川翼 2008『高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第1番 高松城跡（江戸長屋跡）』
- 香川県 1989a『香川県史 第二巻 通史編 近世Ⅰ』
- 川畠聰 2003a『史跡高松城跡久居台発掘調査報告書 平成11～13年度
調査』高松市教育委員会
- 川畠聰 2004a『史跡高松城跡久居台発掘調査報告書 平成14・15年度調
査』高松市教育委員会
- 北山無一郎 1999『香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
報告書 高松城跡』香川県教育委員会・財团法人香川県埋蔵文化財調査
- センター
- 小山勝 2005『ケンブリッジ大学協賛明治古写真 マーケーザ号の日本
旅行』平凡社
- 財团法人松平公益会 1964b『松平領壽傳』
- 佐藤竜馬 2003a『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告 第6番 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会・
財团法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤竜馬 2003b『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告 高松城跡（西の丸町D地区）』香川県教育委員会
- 末光甲平2003『辯天屋遺跡』高松市教育委員会
- 高松市 1957『重要文化財高松城 二ノ丸 月見櫓 繁櫓 波櫓 水手門
修理工事報告書』
- 高松市 1967『重要文化財 高松城旧東之丸長櫓移築修理工事報告書』
- 高松市 1971『史跡高松城保存修理工事報告書 輸出解体復元工事報告
書』
- 高松市 1974『史跡高松城跡保存修理工事報告書 石垣修理工事報告』
- 中西克也 2005『市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋
蔵文化財発掘調査報告書 第1番 高松城跡（無量壽院跡）』高松市教育
委員会
- 中西克也 2007『市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋
蔵文化財発掘調査報告書 第2番 高松城跡（壽町一丁目）』高松市教育
委員会
- 桑原真也 2004『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告 須磨町 深ノ町遺跡』香川県教育委員会・財团法人香川県埋
蔵文化財調査センター
- 古野徳久 2001『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告 第3番 高松城跡（西の丸町地区）Ⅰ』香川県教育委員会・
財团法人香川県埋蔵文化財センター
- 松本和彦 2003a『高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
書 高松城跡（丸の内地区）』香川県教育委員会・財团法人香川県埋蔵文
化調査センター
- 松本和彦 2003b『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告 第5番 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員会・
財团法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 松本和彦 2007『野原の景観と地域構造－発掘成果を中心に－』『四
国村落研究会シンポジウム 濱町の原像－中世港町・野原と讃岐の
港町－』四国村落遺跡研究会
- 森下友子 1996『「高松城」の絵図と城下の変遷』『財團法人香川県埋
蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅳ』財團法人香川県埋蔵文化財調査
センター
- 山元敏裕 1991『史跡高松城発掘調査報告書－玉藻公園整備事業に伴
う埋蔵文化財発掘調査－』『高松市文化財調査報告書』高松市教育
委員会
- 波部明夫 1987『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』香川県教育委員会



1 中堀西隅石垣検出状況（東方向から）

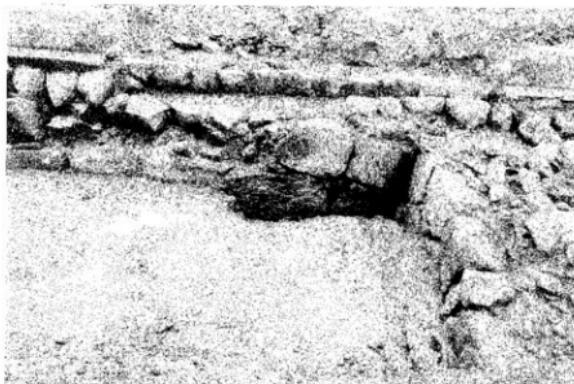


2 中堀南西隅石垣検出状況（東方向から）

図版 2



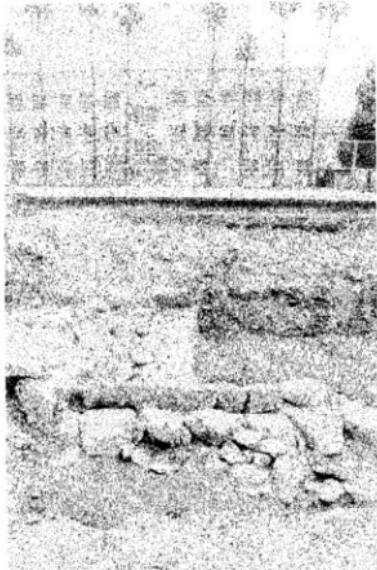
1 中堀検出状況（東方向から）



2 中堀検出状況（北方向から）



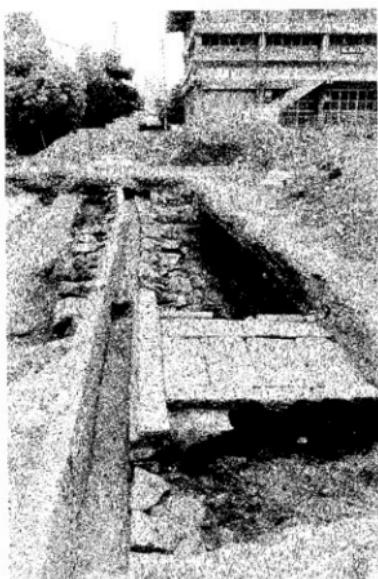
3 中堀南西隅石垣検出状況
(北方向から)



1 中堀検出状況（南方向から）



3 中堀南西隅石垣検出状況（東方向から）



2 第1発掘面 調査区北部（東方向から）

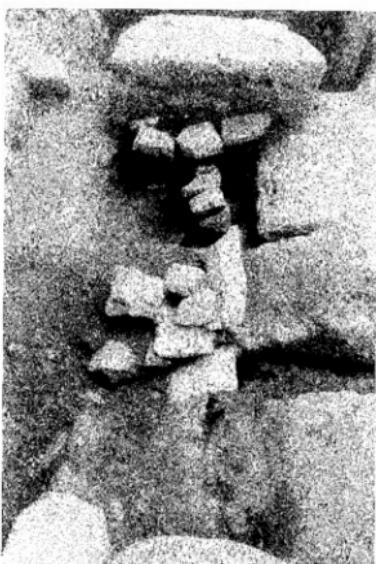


4 第1発掘面 調査区南部（西方向から）

図版 4



1 SB101 検出状況（東方向から）



3 SK208 検出状況（東方向から）



2 SB101 積石 1 柱材裏（北方向から）



4 SF101 柱座ハツリ裏（西方向から）



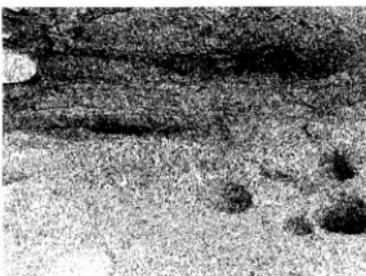
1 第3遺構面（東方向から）



5 SX381（東方向から）



2 第3遺構面 遺構被出状況（西方向から）



6 SX381（北方向から）



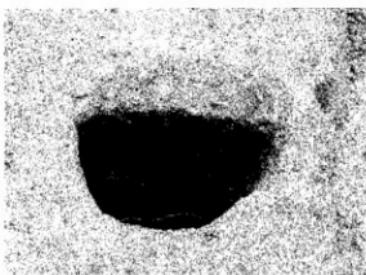
3 集石遺構（南方向から）



7 SP3105（西方向から）



4 SD302（北方向から）



8 SB301 P4（南方向から）

図版 6



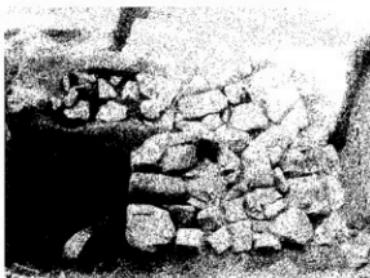
1 E層出土 地鎮遺物（北方向から）



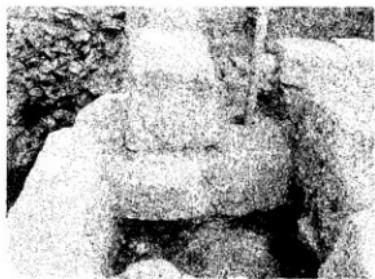
5 SB101 磨石 4根石検出状況（北方向から）



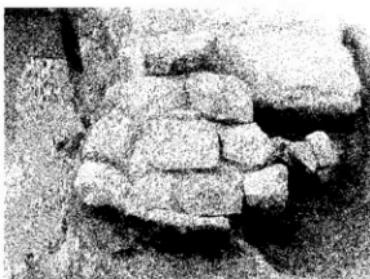
2 SB101 磨石 2・6根石検出状況（北方向から）



6 SK210・212（南方向から）



3 SB101 磨石 2根石検出状況（北方向から）



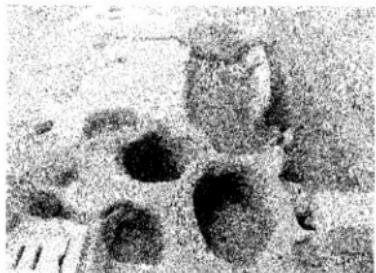
7 SK209（南方向から）



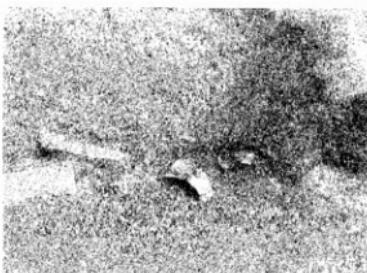
4 SB101 磨石 1根石検出状況（南方向から）



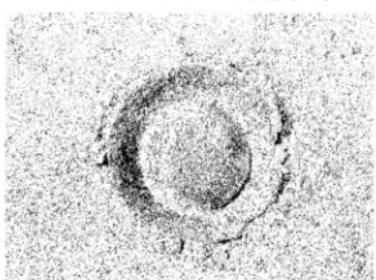
8 SK207（南方向から）



1 SK201・SD201 および SD201 (西方向から)



5 G層 遺物出土状況 (230)



2 第3造構面 埋納遺構 (西方向から)



6 G層 遺物出土状況 (北方向から)



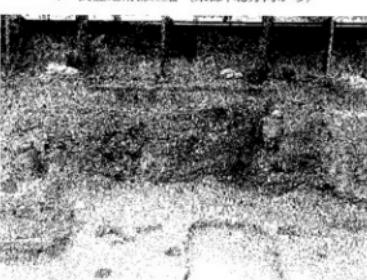
3 G層出土 青銅製鐸



7 調査地南部土層 (東部, 北方向から)



4 G層 遺物出土状況 (240)



8 調査地南部土層 (中央部, 北方向から)

図版 8



1 SF101 (北西方向から)



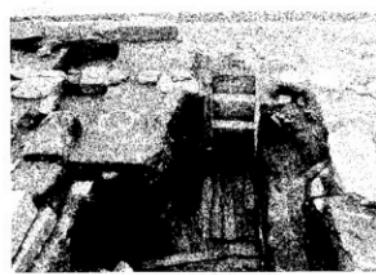
5 SK310 (北方向から)



2 SB101 出入口部 (北方向から)



6 SF103, SX101 (東方向から)



3 SU101 (南方向から)



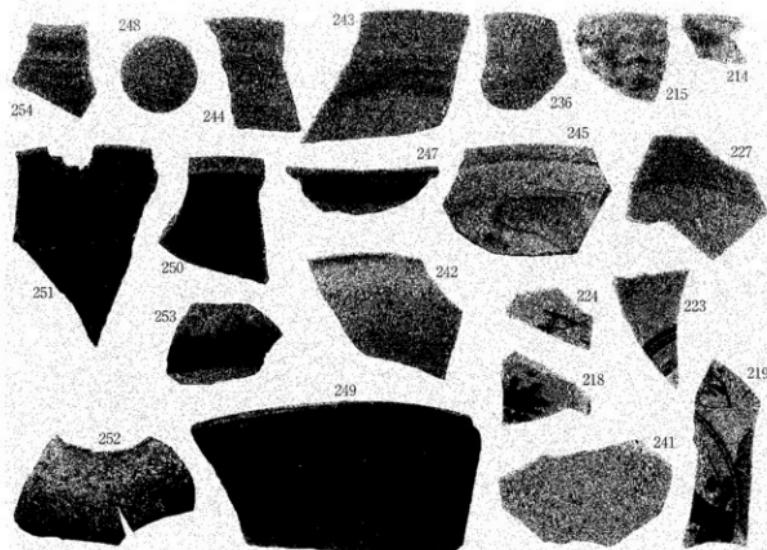
7 堀石垣 篠状ノミ痕



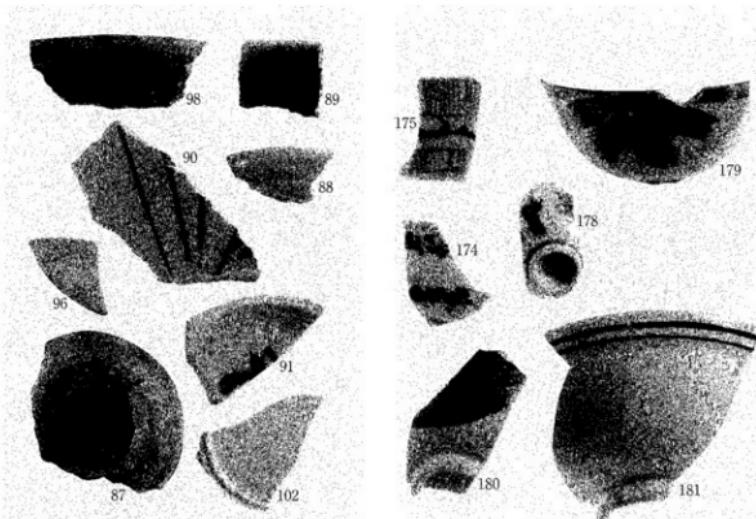
4 SU101 床組み検出状況 (南方向から)



8 中堀埋め戻し状況 (東方向から)



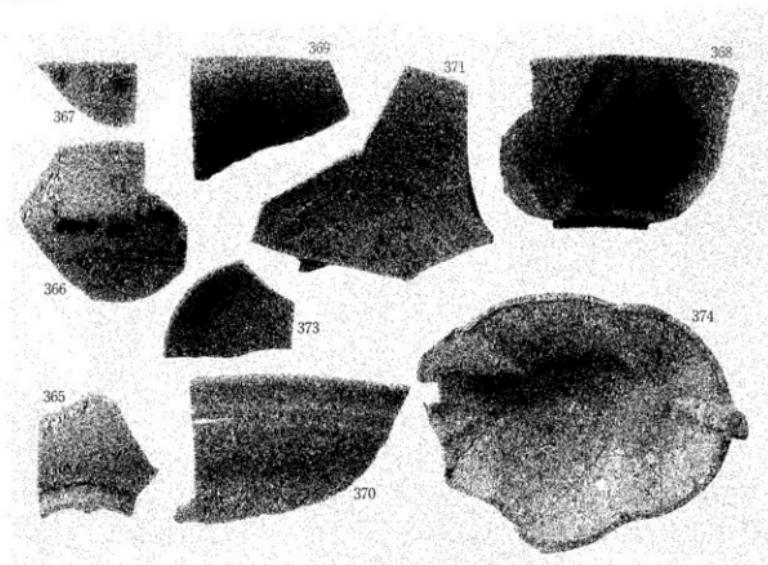
1 G 层 出土遗物



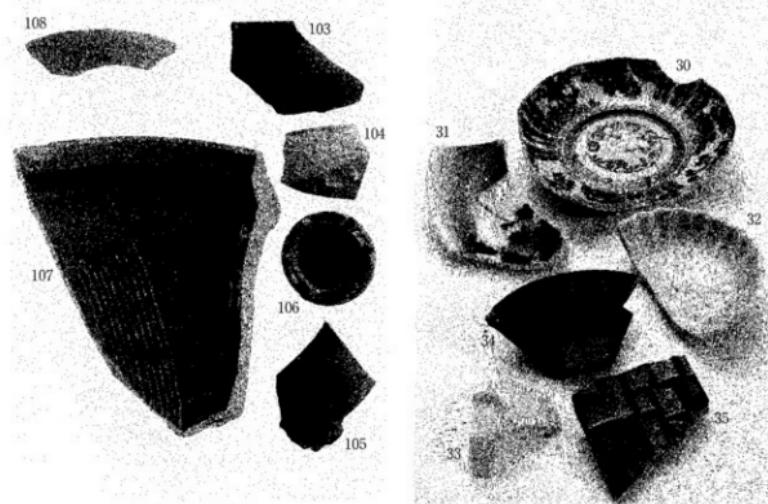
2 第 3 挖掘面 出土遗物

3 SK108 出土遗物

图版 10

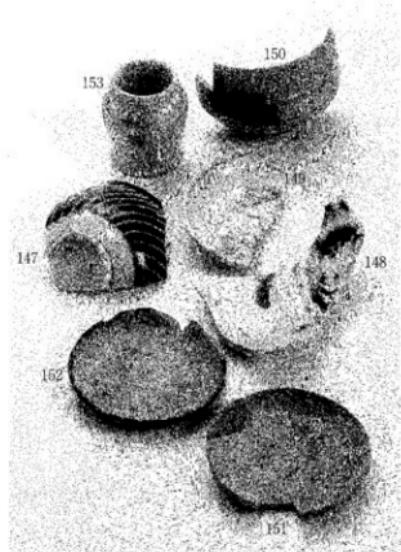


1 E 层 出土遗物



2 SK365 出土遗物

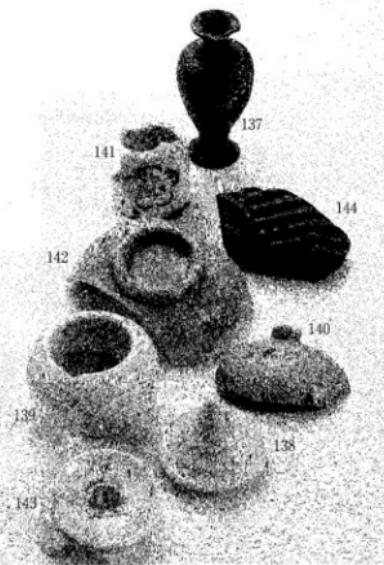
3 SF104 出土遗物



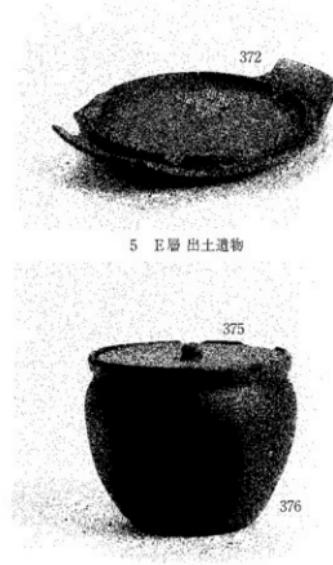
1 SF101 检出時 出土遺物



3 碩石 2 掘付坑 出土遺物

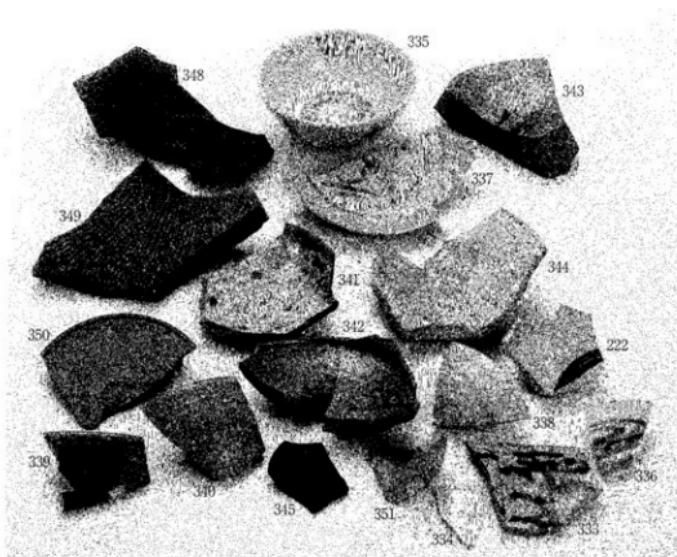


2 SB101 碩石 1 - 6 檢出時 出土遺物

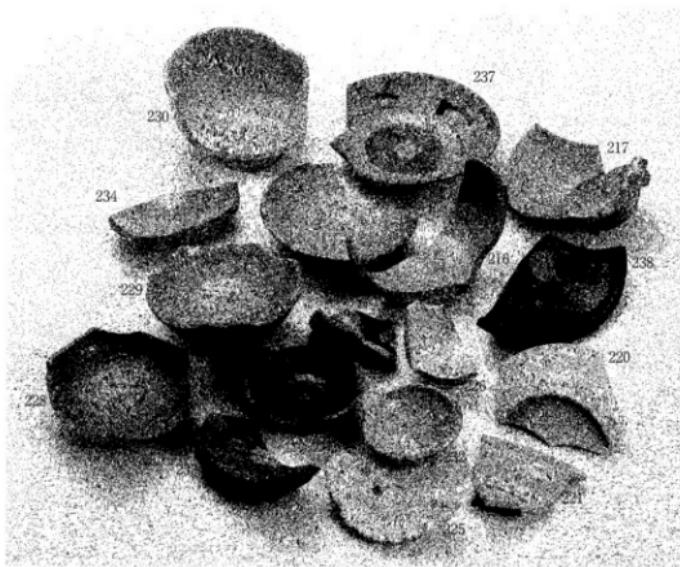


5 E 層 出土遺物

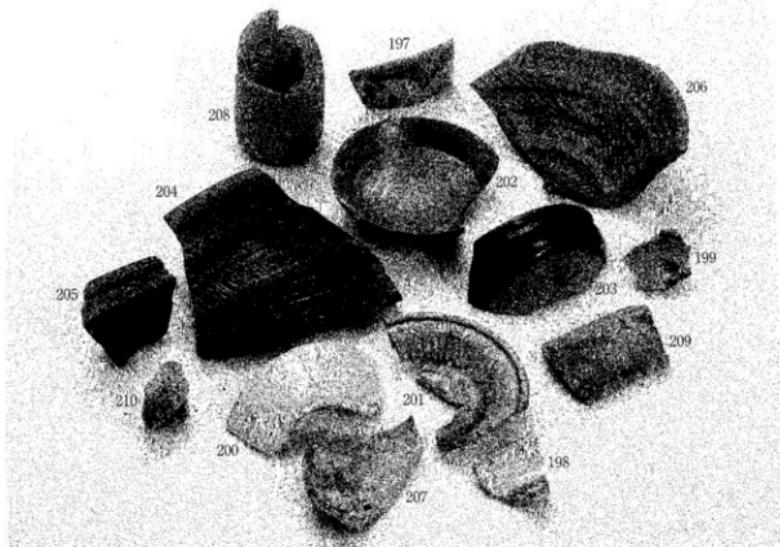
6 E 層出土 埋納遺物



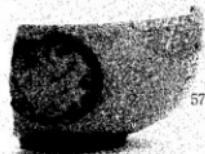
1 G·F層 出土遺物



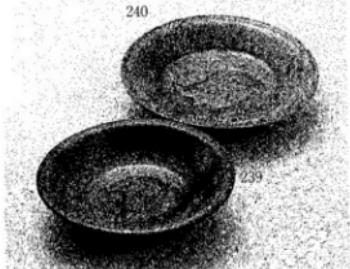
2 G層出土遺物



1 H層出土遺物



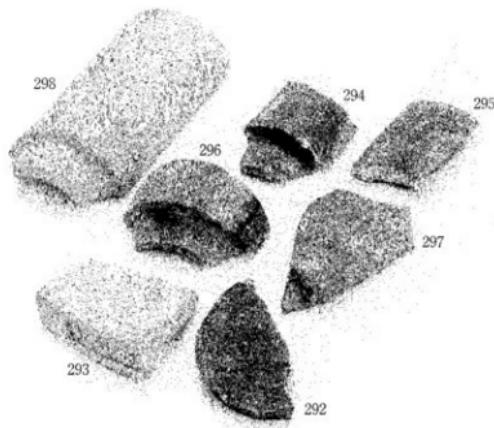
2 SX101 出土遺物 球形衛兵



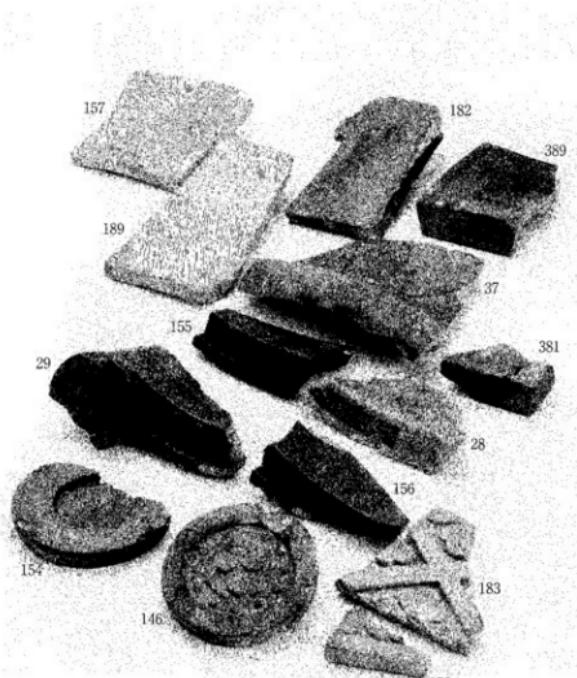
3 G層 出土遺物



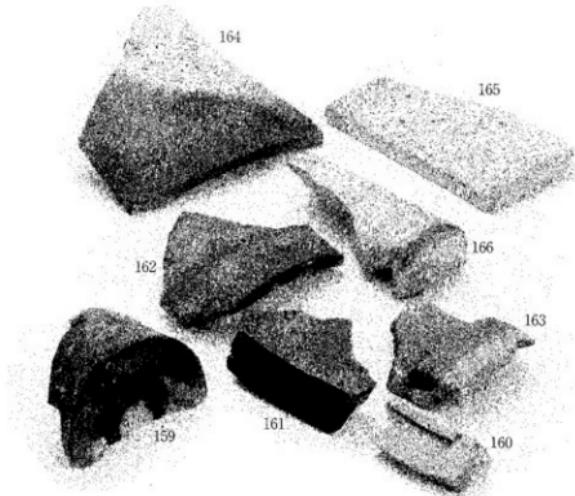
4 中堀および SX101 出土遺物



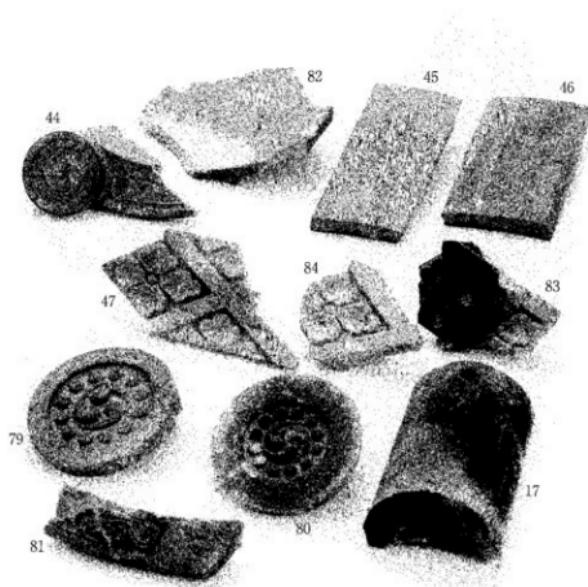
1 G 层出土 瓦



2 调查地南部, 第 1 遗物层
出土瓦

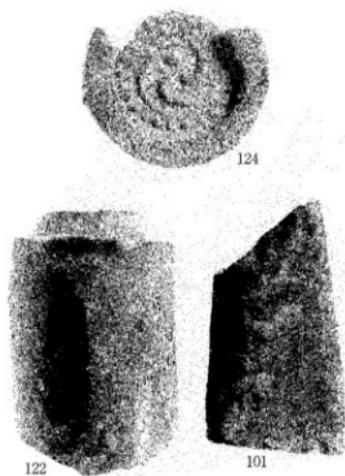


1 SU101 出土瓦

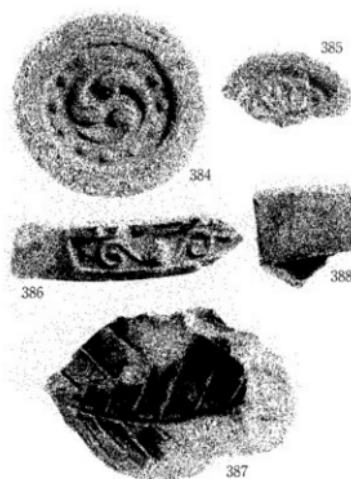


2 中軸 SX101 出土瓦

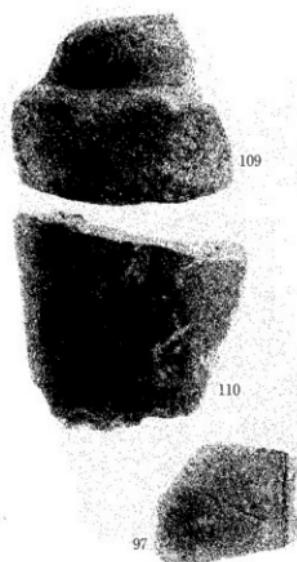
图版 16



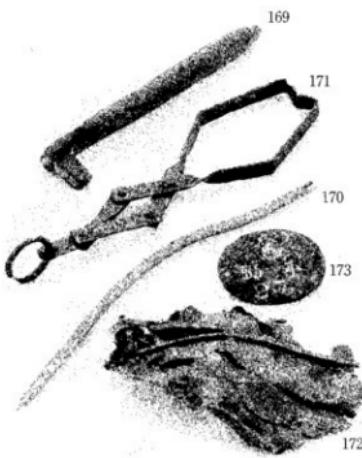
1 SK214 出土 瓦



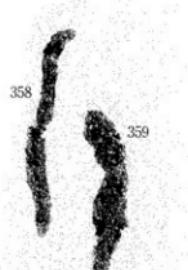
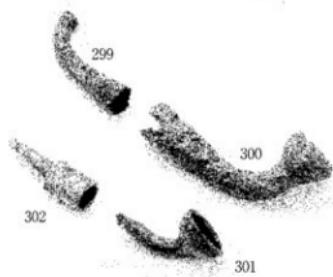
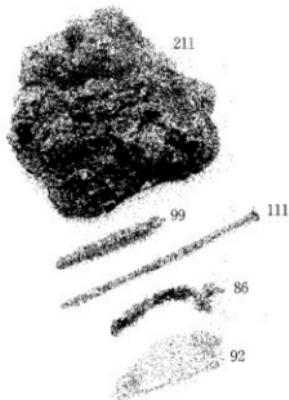
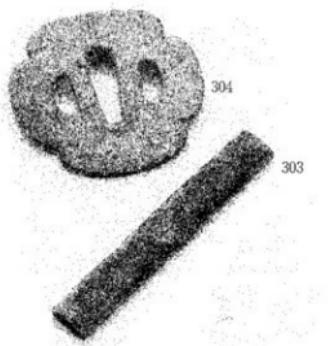
3 E 窑出土 瓦



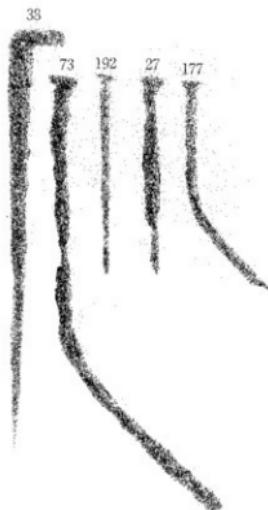
2 第3遗构面出土 瓦



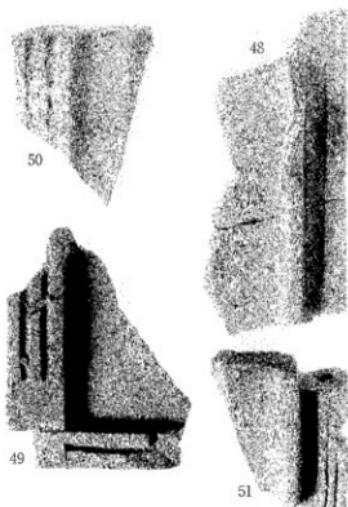
4 SU101 出土 金属制品



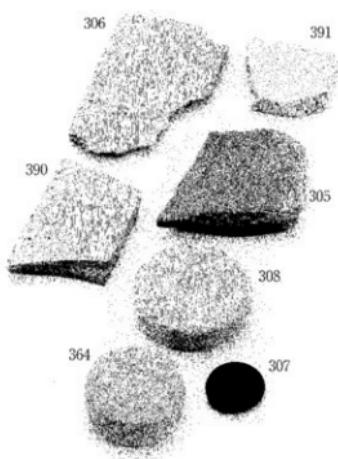
図版 18



1 第1遺構面出土 鉄釘



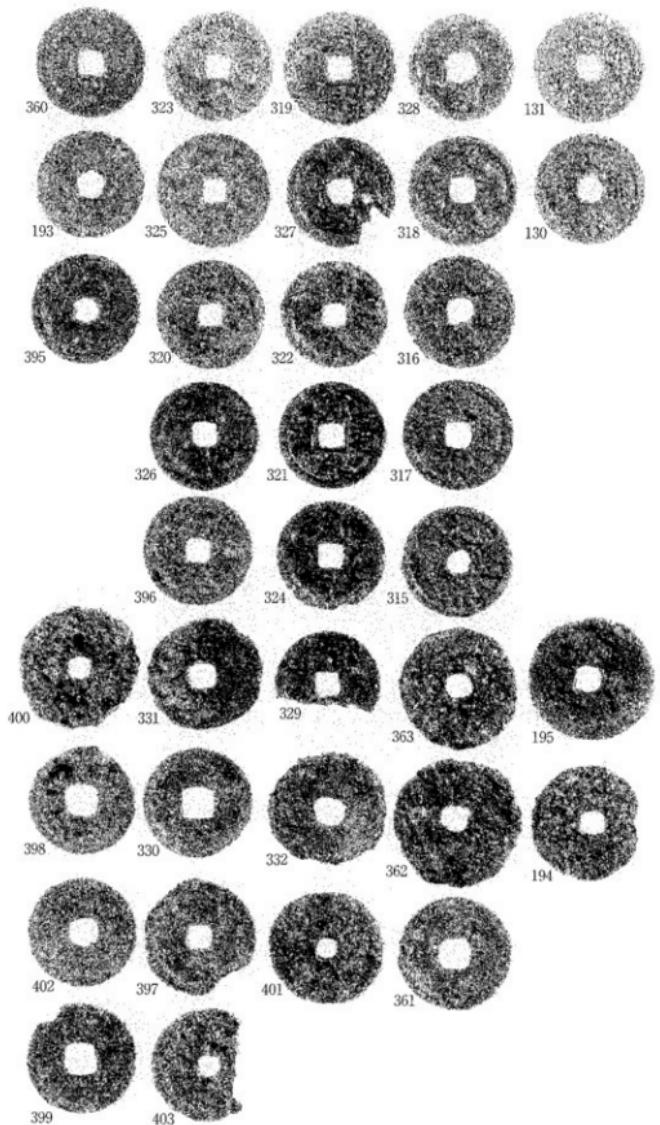
2 SX101 出土 陶製折・蓋



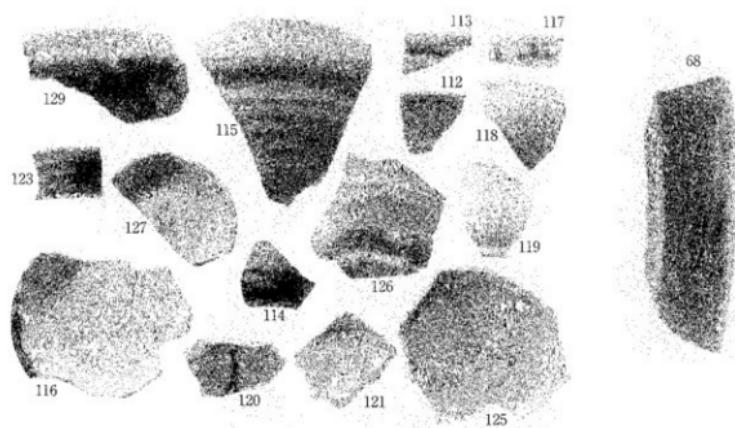
3 出土石製品および七製品



4 G層出土 脚付火盆

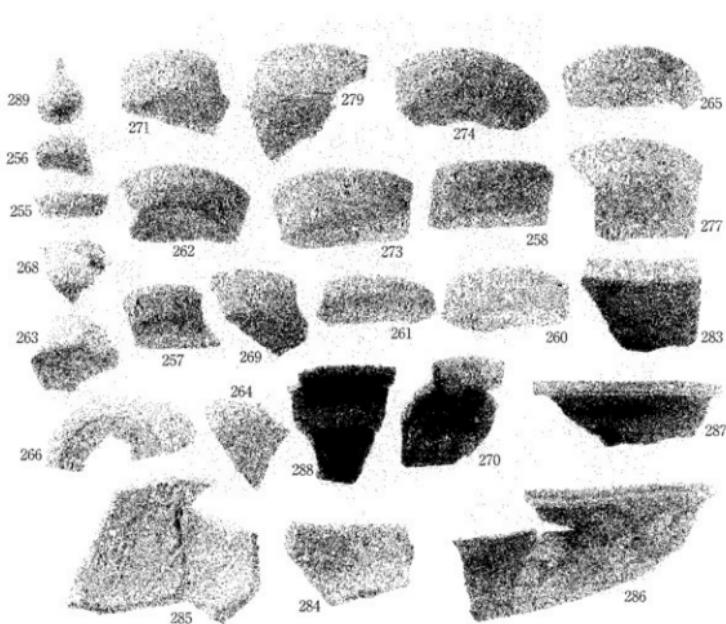


圖版 20

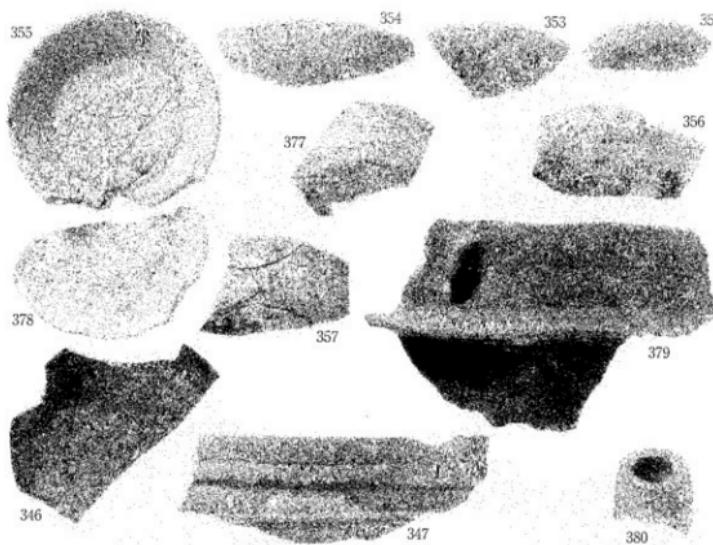


1 SD201,SK203 ~ 205,SK214 出土遺物

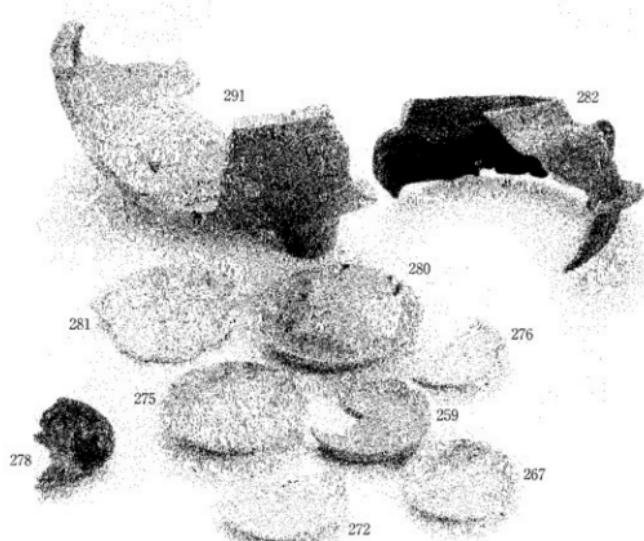
2 SX101 出土 刻畫土器



3 G層出土遺物



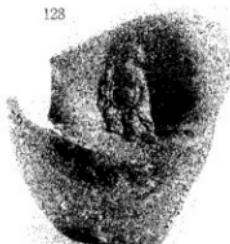
1 E層およびF層 出土遺物



2 G層 出土遺物

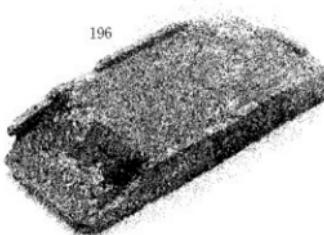
图版 22

128



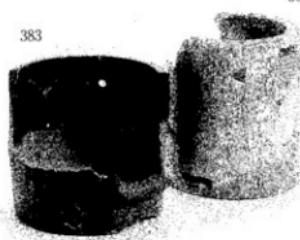
1 SK203 出土遗物

196



2 出土遗物 梁

383



36

3 出土遗物 炉

85

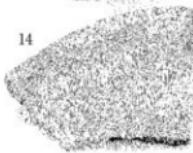


4 SX101 出土 瓦

15



14



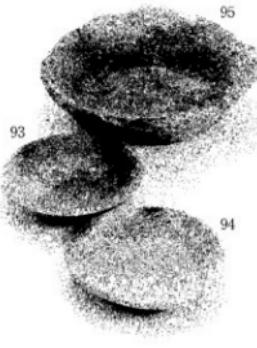
13



16



93



95

94

5 出土土质遗物

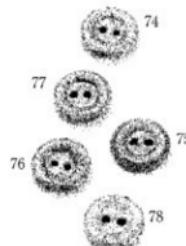
6 埋纳遗物 出土遗物



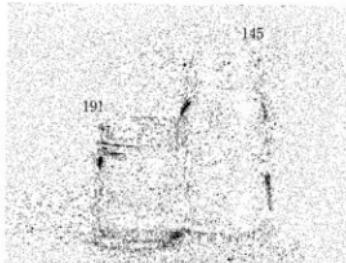
1 SK310 出土骨



2 SX101 出土 ガラス皿



3 SX101 出土 陶製ボタン



4 出土 ガラス瓶

報告書抄録

高松市埋蔵文化財調査報告第139集

雨水管渠整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
高松城跡（大手前地区城内中学校跡地）

平成24年3月31日

編 集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
發 行 高松市教育委員会
印 刷 株式会社 太陽社